THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿四年　第六號

第二百四十三號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東亞堂書房創業第五週年記念出版

特賣は極めて短時日也
爾來斷じて延期せず!!!

見よ！新時代の新道德は確立せられぬ！

◉昔は士人一部の四書五經を藏して日夕人格の修養に資し、兼ねて家庭の神聖を保てり。本書は即ち新たなる論孟易禮!!!

加藤咄堂先生新著

修養論

好評 四版 出來

修養は人生の一大事也、常に心を修養に存する者は向上し怠る者は墮落せざるを得ず。修養あるは實に吾人人類の恩寵にして、又畢世の一大義務也。然かも新らしき時代には、新らしき人物を要し、新らしき人物には又新らしき修養を要す、乃ち加藤先生の此著ある所以にして、君が深奥なる宗教上の造詣と、儒教、哲學、倫理學等の學説を骨子とし、且つ古今東西に亘りて偉人先哲が立志奮勵、以て人格鍛錬に努力せし、各種の趣味深き逸話史實を膚肉として、圓融陶冶、玆に新たなる修養法を建設せられたるもの、從來江湖に散在せる空想的成功論の類に非ず。之れを小にしては齊家處世の妙契を悟得すべく、之れを大にして宇宙人生の大目的に瞑合すべし、眞に吾人が修道の唯一路にして又向上自彊の絶好指針なり。

◉菊判全一冊總クロース頗壯麗
正價壹圓八十錢
六月三十日限り
特價壹圓五十錢
送料（内地）十二錢（清韓臺）卅五錢

書籍
往復葉書にて御申込あれば
即刻贈呈！
見本

發行所 東京本郷一丁目 振替口座一一七一 東亞堂書房 賣捌 全國著名書店

御奈良天皇恩賜　本派本願寺所藏
宮內省御歌所寄人　坂正臣先生序
宮內省御歌所寄人　大口鯛二先生撰及跋

三十六人家集寫眞帖

装幀用、コロタイプ印刷、用紙菊倍判、純良鳥の子、奉書、江戸川別漉、上質洋紙等各種　一組六十葉特別實價金拾圓(但用帋鳥の子に限り一圓增)
遞送料金貳拾四錢(但東京市內無遞送料)

本帖歌集の原本は、藤原氏時代の舊物にして、長年月の間幸にも蠹魚の災を免れ、料紙の下繪に聊かの變色剝落なく、墨痕亦淋漓たれば、寫眞印刷極めて鮮明にして、一帖の裏、直ちに平安朝時代の書と畫とを併せ見るを得べし、其の如何に天下の貴重品なるかは、乞ふ左の撰者の跋文に就きて知らるべし、本帖は本願寺に乞ひて百部を限り、世の全好者に頒つものなれば速かに申込まざれば、直ちに賣切となるべし

大口鯛二先生の跋に曰く

去明治二十九年の八月、おのれ賜暇にて、京都に遊びたりし頃、故明如上人の許にありて本願寺の庫裡に藏せらるゝ古書ども、これかれ取調べし中に、家集と外題したる一函あり、ひらき見れば即ちこの三十六人家集三十九帖なりけり。筆者の名もなく、傳來の故由もみえねど、その書は、道風、佐理、行成の三蹟をはじめ、公任、俊頼などの筆蹟とおぼしくて、料紙など、目もあやにいみじうめでたければ、先うちおどろかれつゝ、かく貴き天下の寳物を、なにとてよのつねの圖書の中に、うちまじへてはおかれたるならん、といぶかりあやしみつゝ(中略)時なるかな、時なるかな、天文日記とて六十餘卷あるおそか

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

上人がとうてられては證如上人(光教)の自筆にかゝる座右日記なり、見ずや、といはるゝまゝに、まづそか中なる一卷をうけて、ひらきみしに、そのはじめ程に、ふと目にたまりたるは、左の一條なり。

天文十八年正月○○○○○○○○○○○○○○○○

二十日従禁裏以女房奉書三十六人家集令拝領、門跡經乘へ以御書被仰越候、僧正事來二日以前御申沙汰有度下由被仰候。

天文は、後奈良天皇の御代なり、これなり〳〵、此の時拜領の御品こそ、この三十六人家集なりけれ、六十餘卷の日記かたはしより見もてゆかば、數日を費すべきを、たま〳〵何心なくひらきみつるその一卷の初にしも、この事を見いてたるは、まづ不思議の緣なるに、明如上人が、その事ともなしに、見せたまひし日記の中に、この事のまさしく記されてありしは、全く本書の世に出づる時到來せるにて、證如上人のみたまの、暗に示したまへるわざにこそ、とかしこくおぼえたりき(中略)やがて上人より本書を借受けて、東京にたづさへかへり、ひろくその道の博士等にも見せて、その說をもとめしに、誰も未だ見聞せさる珍書なり、寶物なりとて、ひたすらおどろきたふとむばかりなりけり、(中略)本書はかくの如く、後奈良天皇恩賜の由緒貴き平安朝の舊物にて、世に傳へたる三十六人家集中の最古最巨の證本たるのみならず、その筆者は前に記せる如く、**本朝三蹟**とたゝへられたる能書たちの筆もまじり、その料紙はた世にたぐひを見ざる結構にて、**藤原氏全盛代時**の**美術**の粹を鍾めたる物なれば、美術家の參考品としても、**無比の重寶**たるものなり。本書中の一片にして、また〳〵世に傳れるは、千金の價値ありしも、然るに、後西院天皇の返させたまひしより後、二百餘年の間塵埃のそこに埋もれて、しかも蠣喰のうれひなく、今日に至れりとは、おもへども〳〵不思議の至ならずや、おのれはからずも、これを發見して、かく世に紹介することを得しは、實におのれが一生のさいはひにて、うれしきことのきはみになん。本書一たび世にあらはれて、古筆家の從來の鑑定を一變せしめたること、又本書の料紙の下繪その、切り繼、破り繼、重ね繼などの製によりて、美術家の意匠を啓發せしめたる力の頗る大なることなどは、既に洽く世に知られたれば今又いはず。又おもふに本書のかくの如く貴重なること、もしはやく世に知られてありしならんには、かの戰亂の時代などに、よからぬものどもありて、いかにもてはふらかしけんも、はかられざるを、なか〳〵に絶えて知るものなかりしは、今日まで滿足に傳はれるもとゐなりけんかしとにもかくにも**天下の致寶**なれば、**神佛の加護**ありしなるべし(中略)又本書は、もと御室關白道長公の意匠になりて、上東門院の御遺物ならや、と紫式部の日記によりて、おのれが思ひよれることゞもは、坂ぬしの序文にもいはればもらしつ、さてこの**寫眞版**は、故明如上人世にいまそかりしころ、本書を見ることあれはざる人にも、ひろく見せ、又おのれらが**手習**の本にもせまほしとて、おのれせちに上人にこひきこえて、一帖のうちより、一葉二葉あるは五六葉あるはまでづゝえりいで寫しとり、かくはものしつるなりけり。

發賣所　婦人社

東京市本郷區西片町十番地ノ十四

電話下谷九百十九番
振替口座東京卅四番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

池田晃淵　小林庄次郎　本多辰次郎共著

全部完成

日本近世時代史

（徳川史）――（幕末史）――（維新史）　全部三卷

菊版脊皮金銀箔付頗美装紙數二千三百五十頁毎卷コロタイプ數葉入

外に小包料壹貫目代

正價金六圓五拾錢

特價五圓五拾錢

（全部三卷の外分賣せず）

●殘數尠少品切●後ハ永久絶版●トス申込至急●

特價提供

諤々の史論精緻の考證を以て満天下を震撼したる本史は大成したり

老獪家康の豊臣家を亡せる奸譎手段を知り得ると共に其智謀の絶倫なるを推すべく幕府の腐敗を知り得ると共に三百年の泰平を致せる眞原因を明にするを得べく薩長諸藩の幕府に臨める悪辣手段を詳にすると共に幕府の無謀無策眞に憐むべきを捜るべし蓋し本邦近世史の最正確にして最も詳密なる者なり

發行所　東京牛込早稻田　振替一一二二三番　早稻田大學出版部

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

田山花袋氏著

妻

●わが文壇『妻』あるを誇れ！

●わが文壇『妻』あるを誇れ！

定價金壹圓五十錢　(郵稅金十貳錢)

菊判箱入美本　紙數五百二十頁

文壇翹望の「妻」は出でたり。「妻」は花袋先生の最近思想を忌憚なく流露せる未曾有の長篇にして、著者自らも其描寫法に於て飽まで印象的に且つ客觀的の手法を試みたるを誇とせり。思ふに本書は自然主義作品中の最高位に位するものなる可し

東京日本橋區馬喰町三丁目　今古堂發行　(振替口座四九〇七番)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

内容を見ざれば寶を知らず

著譯者	書名	冊數	定價	郵税
中島德藏	日本、那西洋倫理學要領	全壹冊	円 厘 .六五〇	錢 六
足立栗園	日本倫理史綱	全壹冊	.六五〇	六
木村鷹太郎	美的道德	全壹冊	.六〇〇	六
佐藤誠實	修訂日本教育史	全壹冊	一.二五〇	八
大瀨甚太郎 山本源之亟	理想の學校	全壹冊	一.三〇〇	八
稻垣末松	社會的教育學綱要	全壹冊	.四五〇	四
澤田金義	初等理科教授指鍼	全貳冊	二.〇〇〇	三
石川成章	地學叢書地球發達史	全壹冊	.六五〇	六
鳥居龍藏	同人種學	全壹冊	一.二〇〇	八
石川成章	同鑛物學	全壹冊	一.三四〇	八
今村明恒	同地震學	全壹冊	一.二〇〇	八
廣瀨歸芳	同實驗鑛物學	全壹冊	一.七〇〇	八
麻生慶次郎	同土壤學	全壹冊	一.二〇〇	八
東京地學協會	樺太地誌	全壹冊	一.五〇〇	八
東亞同文會	滿洲通志	全壹冊	三.八〇〇	三
物集高見	修訂日本文明史畧	全壹冊	二.〇〇〇	三
高桑駒吉	印度五千年史附錫崙島史	全壹冊	二.〇〇〇	三
同	新撰西洋通史古代史	全壹冊	一.八〇〇	八
那珂通世	支那通史	全五冊	各巻二.五〇〇	各三

著譯者	書名	冊數	定價	郵税
伊澤修二外二名	世界歷史年鑑	全壹冊	円 厘 三.〇〇〇	錢 一六
大川茂雄 南茂樹	國學者傳記集成	全壹冊	四.〇〇〇	一六
東京地學協會	地學論叢	第一輯	.六〇〇	六
同	同	第二輯	.七〇〇	六
同	同	第三輯	.七〇〇	六
東京數學物理學會	學術通俗講演集	全壹冊	.九〇〇	八
木村駿吉	物理一般論	全貳冊	六.五〇〇	二四
山口鋭之助	普通教育物理學	全壹冊	二.八〇〇	一六
平塚志之助	物理學輓近の發展	全壹冊	二.〇〇〇	一三
吉川實夫	數学叢書近世綜合幾何學	全壹冊	一.三〇〇	一三
愛知敬一 角尾猛次郎	同實用高等數學	全壹冊	一.五〇〇	一三
同	改訂初等代數學教科書	全貳冊	各巻.六五〇	各六
同	續初等代數學教科書	全壹冊	.七五〇	六
菊池大麓	英文幾何學教科書	全參冊	各巻.四〇〇	各四
菊池大麓 澤田吾一	初等平面三角法教科書	全壹冊	.七五〇	六
菊池大麓	英文平面三角法	全壹冊	.六〇〇	六
菊池大麓	幾何學講義	全參冊	各巻一二.七五〇	各六
菊池大麓 數藤斧三郎	近世平面幾何學	全壹冊	.七〇〇	六
東京數學物理學會	本朝數學通俗講演集	全壹冊	.六〇〇	六

東京市京橋區銀座壹丁目 **大日本圖書株式會社發行**

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

東京高等商業學校教授　花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

▼○一册定價五拾錢郵税金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出て、親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四料目の內、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を斟酌して、假りに**試驗問題**に**擬**し、別に**詳密丁嚀**なる**解釋**を附せられたるものにして、問題の數實に**七百以上**に及べり

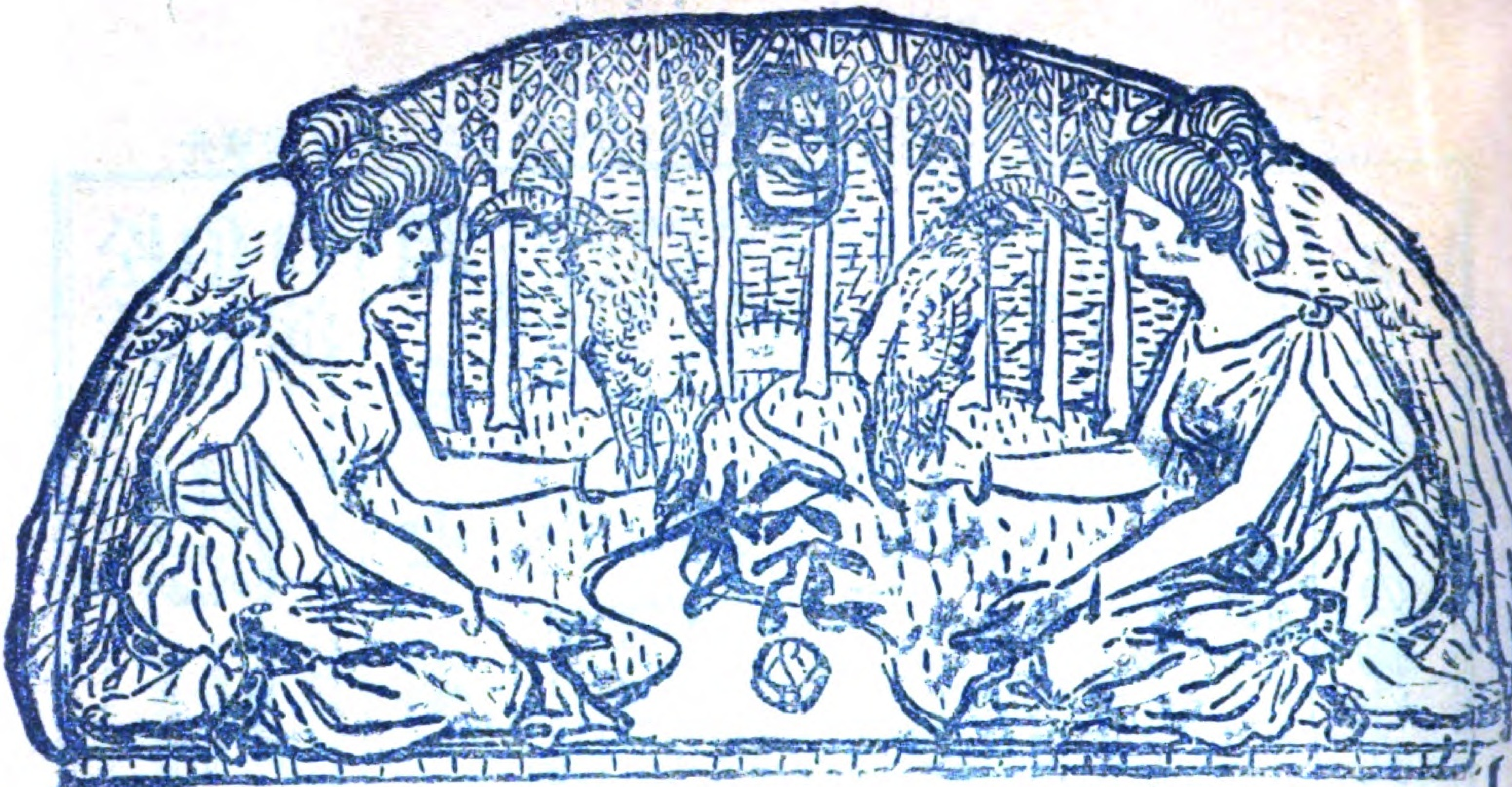
されば、一航英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の內に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　**反省社出版部**　（電話下谷九百十九番）（振替東京三十四番）

發賣所　東京堂　上田屋　東海堂　北隆館　三共社等其他



中央公論第二十四年第六號目次



此廣告によりて御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

松林伯知口演　徳川榮華物語

前篇　松の卷　竹の卷　梅の卷

後篇　松の卷　竹の卷　梅の卷

續篇　椿の卷

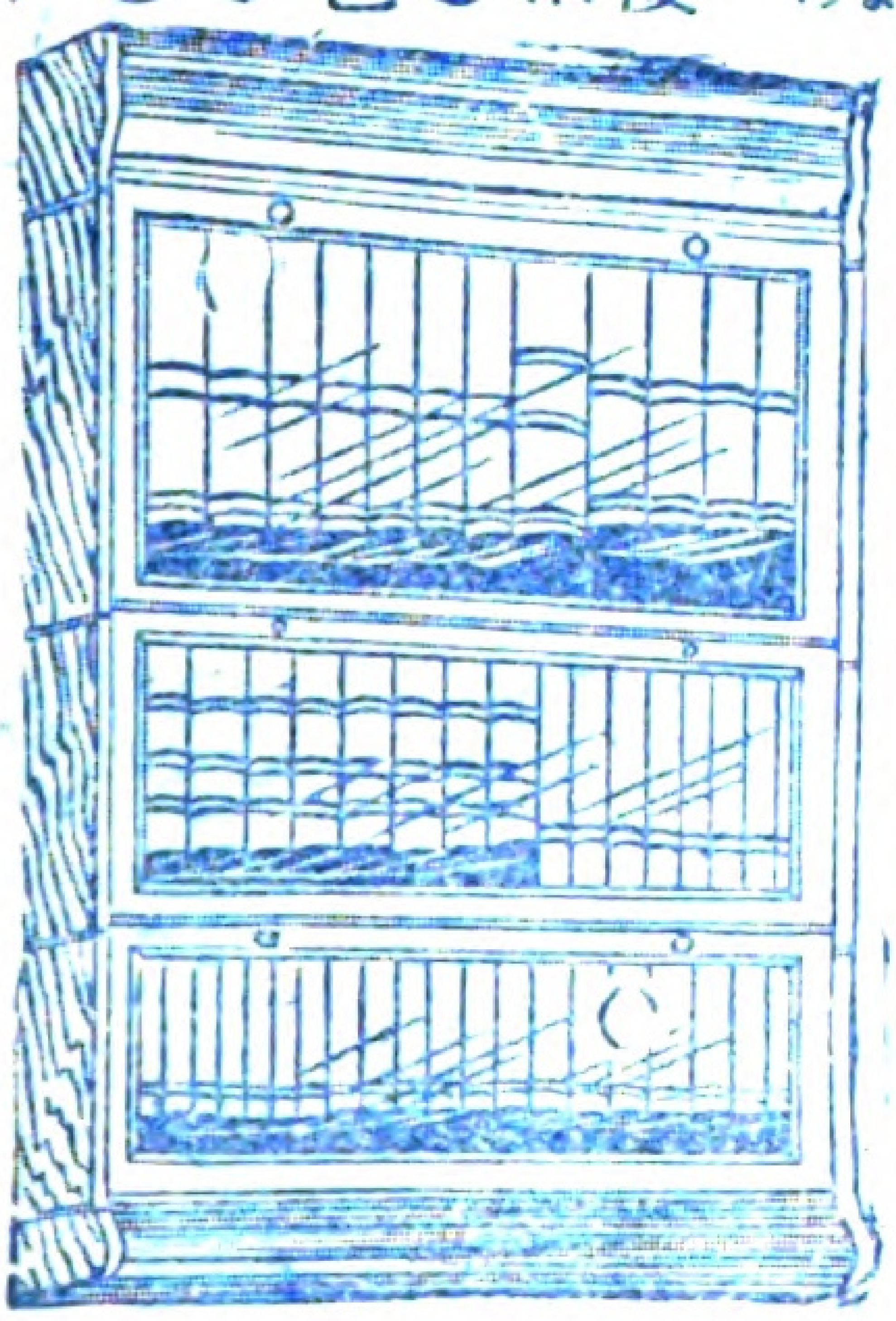
定價各冊金五拾錢○郵稅各冊六錢

組合セ本箱（最新式特製）

歐米諸國に大流行のセクショナル、ブツク、ケースよりも數等進歩したる者にして特徵は

●材料は上製には櫻、並製にはナラ樫を精選し堅牢此上なし●形狀は優美にして色彩は上製は紫檀塗り並製はハイカラ塗●在來の函と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書冊及帳簿の出入に便なり●一組の本箱は三個の段函を重ね之に別にトツフ（屋根）とベース（脚底）を附するものなれば藏書の增加に從ひ隨意に段函の數を增加し得べく、如何なる室にも適應すべし

一組（總高サ三尺九寸五分、奥行九寸四分、間口三尺上製金參拾圓（荷造費金壹圓）並製金貳拾七圓（荷造費不要）地方運賃御自辨



理想のデスク（本箱と机の兼用）

●本箱一個の價を以て机をも併せ得らるゝ者なれば最も經濟的也

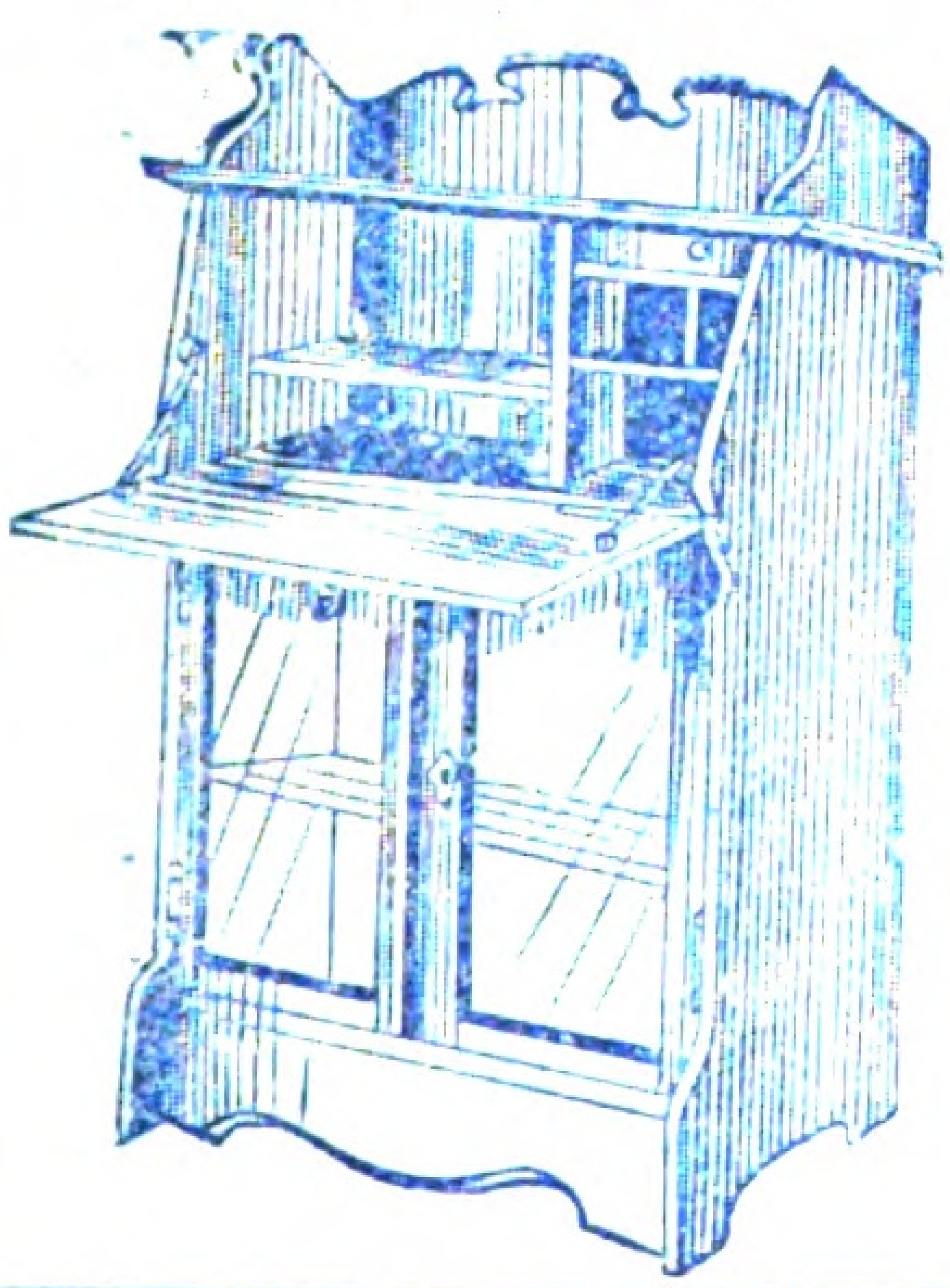
●上部本棚の戸は開閉自由にして用ければ机板なり、用終りて閉つれば元の戸となる故、如何なる狹小の場所にも用ひられ室内面積上の經濟最も大なり

●本箱に藏するものは机上に備ふると同じき故、日常必要の書冊帳簿書信材料其他一切の物を最も手近に排置し得て之を他より持來る勞と時を節する事著し

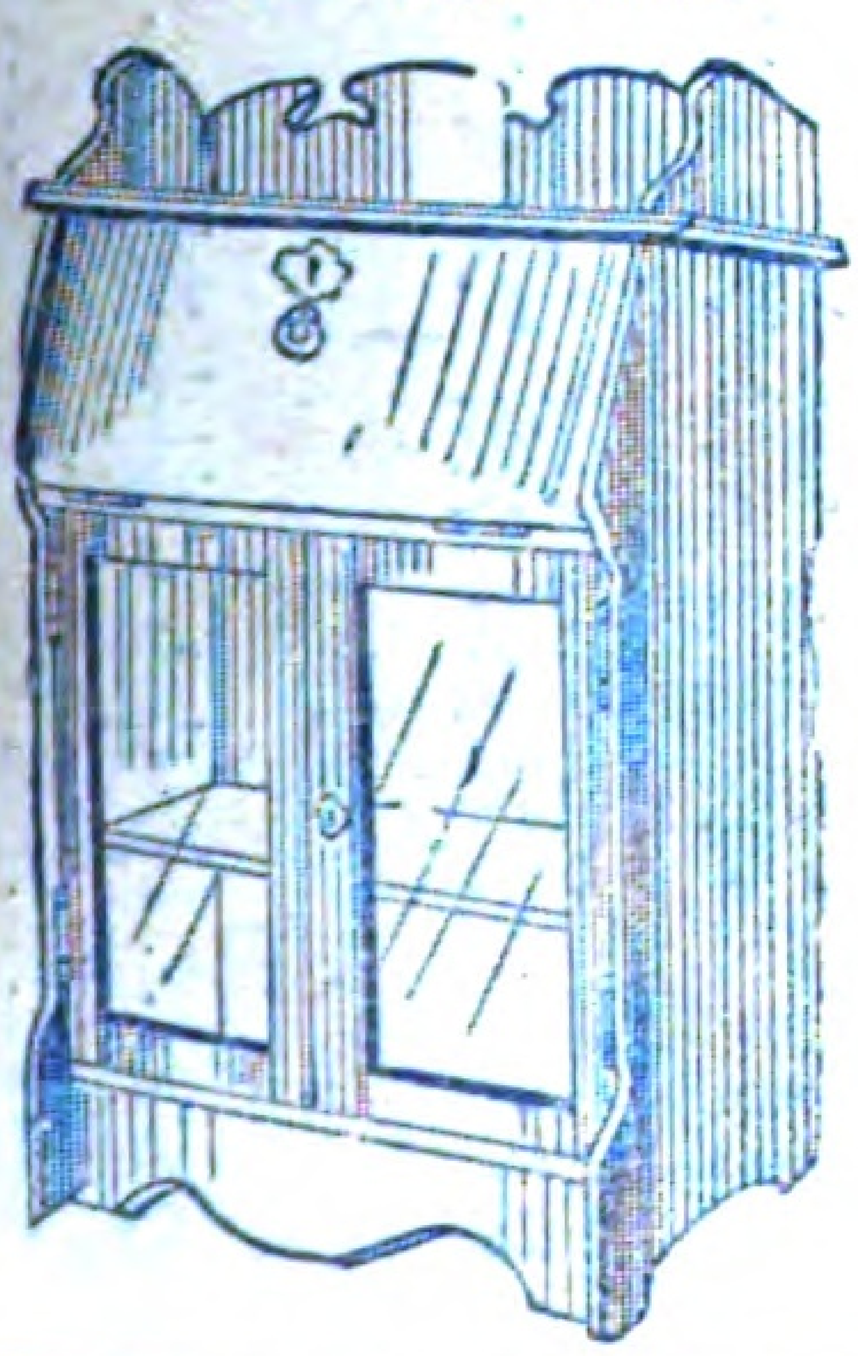
●實用的なると同時に色彩形狀頗る美麗にして優に室內裝飾たるに足る

●一個高サ四尺四寸、間口二尺二寸、奥行一尺●上製（櫻製紫檀塗）金貳拾圓並製（ショーヂ製ハイカラ塗）金拾七圓荷造費壹圓參拾錢地方運賃自辨

（本箱と机に兼用の圖）



（本箱に專用の圖）



各種本箱製作の御注文に應ず

東京銀座大通新橋際（電話新橋三六七七　振替貯金口座二百番）

新橋堂書店　發賣

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

The Mill.



MEINDERT HOBBEMA.



第二十四年
第六號
第二百四十三號

政友會の未來

(一)

政友會は星亭權力を握れる以來、幸ひに順次發達して兎にも角にも衆議院に絶對の過半數を占め、且つ宮中の御信任をも繫ぐを得るに至れり。

星亭の卓見として、黨人の齊しく推稱する所は、第一宮中の御信任を繫ぐに勗めたるに在り、第二黨の基本金を積立つるに鋭意したるに在り、從來の政黨は能く民論の聲援を得るに於て多くの遺憾を有せざりしも、唯だ宮中の御信任を得るの望み甚だ少く、隨つて陸海軍の信用を得ると能はざりき、斯くして如何に衆議院に勢力を占むるに至ると雖も、到底自力を以て內閣を組織する能はざりし也。

政黨の存在には、少からざる費用を要す、單に一個の本部を設け、幹事事務員以下の役員を置くも、一箇年の經費少くも三萬圓より五萬圓を下るとなし、況んや各所に支部を設け、支部毎に役員を設くるをや、若し其れ少しく活動して地方に遊說員を派し、或は縣會議員の撰擧を助け、若くば總選擧に競爭せん乎、其の費額幾んど貲る可らず、然るに本部の經費として代議士の納むる所一人一箇年百圓に過ぎず、二百人の代議士を有するも其の徵收し得る所二萬圓のみ、何ぞ況んや代議士の大部分は歲費を納むると莫きをや、政黨の常に苦む所は實に此の自から生活する費用の得がたきにあり、世には物好きなる金滿家ありて、他年一日政黨を利用せんと欲し、陰に若干の經費を負擔するものなきに非ず、又國庫の補助を受くる會社にして、衆議院の決定を動かすがため、平生より政黨經費の一部分を負擔するものなきに非ず、然れども斯の如きは幾んど數ふるにも足らざるのみ、玆に於てか政黨及び黨人は、議會毎に一種の收賄を爲し、一種の脅喝取財を爲して以て其の生活難より免かれんとを求めんと欲す、其の行事頗ぶる卑むべしと雖も、其の苦衷に至ては寧ろ多少の諒とすべきものなくんば非ず、然かも此の行事のため、政黨が眞に國民の信賴を得るに至らずして、動もすれば天下清議の指彈を受くると蔽ふ可らず。

星亨の自由黨の實權を握るや、先づ山縣內閣と握手したりき、以て海陸軍との感情を融和し、延きて以て宮中の御信任を得べき端緒を啓かんとせし也、然かも提携の十分ならず、且つ山縣公が依然として非政黨主義を撤するに難色あるを視るや、更らに去つて伊藤公を引きて黨首と爲さんと欲し、公の子分中第一の智囊たる伊藤巳代治子を聘して黨師とし、竟に機を看て自由黨全部を公の膝下に捧ぐるに至れ

り、蓋し公は一び自から野に下つて政黨を組織し、以て民間黨に對抗せんとしたりしも、思慮ある山縣公に諫止せられて果さゞりき、即ち公の政黨思想は、絕えず其の胸奧に往返したりき、之を看破したる星は、巧みに自由黨全部を公の前に投げ出し、其の存滅與廢一に公の意のまゝたらしめんとしたる也、星が尊大を好む公の氣質に投じたるは、流石に其の宜きを得たりといふべし、公は果して星の描る所の如くして、竟に今の政友會を組織し、公自から其の總裁たりき、斯くして公の元老たる地位を以て、政友會は頓に宮中及び陸海軍の信用を博し、何時にても內閣組織の素地を作り得たるのみならず、公の力に由て從來自由黨外の士たりし原、大岡、元田、末松、金子の諸氏を始め、秋元、兒玉等の諸貴族をも網羅し得て、其の勢力益々增大したる也。

星は又山縣內閣と提携前後に於て、黨の基本金積立に鋭意し、會社又は政商等の來りて其の援助を求むるものあれば、昂々然として何程出金すべきやを反問し、恰かも米國商人が貨物の價格を評議するが如く、最も手短かに談判したりき、現に雨宮敬二郞氏の如き豪膽の佐傑も、星の氣勢に壓せられて、其の懷にせる二萬圓の切手を出す能はざりしといふ、星は此がため有らゆる惡名を負へりと雖も、其の收納する所少からず、其の金額は今に至て不明なるも、或は十六萬圓といひ、或は三十萬圓とも稱す、星は此等の金額を一々銀行に預入し、其の元利を明細に計上して黨の本部に報告するに、厘毛の差なかりしといへり。此の基本金は今果して存するや否やは知らざるも、一二回の總選擧に於て著るしく奏効したると爭ふ可らず。

星は刺客に斃れ、伊藤公去つて西園寺侯之に代り、而して伊東、末松、金子の諸子幾んど手を絶てるも、政友會の勢力は年を追ふて加はり、竟に今日に至れる也。

(二)

歴史は繰返すものなりといふは、一面の眞理を有する説也、少くも政友會に取て大に考慮すべきものならずんばあらず。

政友會が西園寺侯を戴く間は、而して伊藤公の援助(假令間接なりとも)を受くる間は、必らずしも政權に遠ざかると進歩黨の如き虞なし、然れども其の生存資源たる財貨を那邊より求むべき乎、彼等は大黒天の打出の小槌を有せず、金の生る木を有するにも非ず、西園寺侯の背後には日本第二流の富人たる住友家あり、原敬氏の黒幕には古河家あり、共に東西の銅山王たるも、然かも無際限に政友會に投資するものにあらず、否、西園寺侯は超然として黨費問題の外に立つがために能く總裁たるのみ、彼の眇たる國民協會の費用のためには、西郷侯も親族會議の結果、其の生首を賭したる誓言をすら打消さゞるを得ざりき、伊藤公も政友會のためにポケットマネー流出の多きに堪えずして幾んど奈何ともす可らざる境遇に陷らんとしたりき、去れば大政黨たる丈け其れ丈け臺所の廣くして財貨を要すると多き政友會は、其の財源を求むるに於て最も大なる苦心を要すると言を俟たず、英米の政黨が常に其の黨費總選擧に頭腦を惱まし、時にいふ可らざる醜聞を流すに視るも、我が政黨の苦心推想に餘りあり、政友會には今や幾多の小星亨あるも、大なる星亨なし、其の屢々醜聲を中外に傳へ、現に日糖問題に就て十數人の犯罪

者を出したるも其の一證也、若し第二の星出て、豐かに財源を作り、之を以て大に黨員を般はさば、彼等また何ぞ好んで日糖問題の如きに手を觸れんや、唯々黨の本部窮乏して彼等の政治運動を助くる能はず、彼等自から獨立行動を以て各個の運動費を調達せざるを得ざるがために、則ち敢て危險を冒して日糖問題の如きものに身を投ぜしのみ、政友會の本部にして生活及び運動の資源に窮すると永く今日の如くならば、議會に問題の起る毎に、其の黨員各個に運動費調達に鋭意すべくして、醜聞に重ぬるに醜聞を以てして、竟に天下多數人の信用を失ふに至るや火を看るよりも明か也。

故に政友會の最大要務は、先づ其の生活資源を豐富ならしむべき方策を講ずるに在り、今にして悉く星亨の故智を襲ふ妙ならざるにあらずと雖も、旣に日糖問題に出て少からざる威信を毀けられ、且つ司法官の法を執る嚴明なる間は、黨員等畏縮して容易に財源に手を出す能はざらんとす、且つ星の如き厘毛をも私せざりし人物さへ、天下最大の惡人と稱せられて、竟に刺客の毒手を免かれざりしを視れば、其の故智に倣はんと欲するもの深く戒むる所を知らざる可らず、然かも黨員畏縮し、本部また爲すと能はずんば、政友會は夫れ國庫の補助を得ず、檀那を有せざる大伽藍の如く、年を追ふて衰微し荒蓼すべきのみ、若し最も戒心を要せざる資源取得の方法如何といはゞ、蓋し政權に近邇するに優さるは莫かるべし、西園寺內閣が二年間持續したりし時、政友會は曾て資源窮乏の愁訴を耳にせざりしにあらずや。

然らば則ち政友會は、直ちに起て桂內閣を倒し、自から之に代るべき乎、然り、然れども今直ちに桂內閣に代るも、以て自から支持す可らず、桂一黨の人々を敵とせば、政友會の一角を崩壞せしめられて、

政友會自から衆議院にすら多數を制し得ざる恐あれば也、貴族院に戰ふて未だ必勝の算なければ也。

（三）

桂一黨にして若し今春來企畫せられし新政黨組織に加擔し、自から其の中堅となつて活動せば、進步、大同、又新、戊申の各黨派の多數は翕然として之に赴むくべく、且つ政友會中の一部分も、亦之に加はるべきを以て、其の新政黨なるものは、少くも政友會と拮抗するに足るものと爲るや明白也、政友會近く大多數を占めたりと雖も、其の結束甚だ堅からず、少しく桂一黨より强誘せられば、直ちに之に赴くもの少からざらんとす、何ぞ況んや辛辣なる手段をすら加味せらるゝをや。

假令幸ひにして衆議院に敗れざるも、貴族院は竟に之を奈何ともす可らず、政友會中達識を抱くものは、所謂藩閥と結托して政權に近邇すると共に、夙くより眼を貴族院の形勢に着け、機會ある每に其の勢力を扶殖するを劣らざりき。原敬氏が郡制廢止案を提げて起てるも、實は貴族院の形勢を顚覆すべき試驗として、一匙の藥劑を投ぜしのみ、然かも事の失敗に畢るや倘ほ屈せず、徐に形勢を指導して伯爵同志會の成立を促がし、子爵談話會の發達を助けて、漸くにして其の目的を達するに銳意す、其の勤勉と熱心と執着とは、吾人の感嘆して措かざる所なるも、今春以來の情勢より揣摩するに、其の志を成すの期倘ほ頗ぶる遼遠なるが如し。

我が貴族院が豫算先議權の外、一切の權利衆議院と異ならず、儼乎として存在する間は、斷じて衆議院を左右するのみにて事足れりと爲す可らず、故に今日政友會が桂一黨を敵とするは、猶ほ貴族院を敵と

すると同じく、無謀の極也、無策の極也。

若し誠實に政友會のためを計らば、桂侯を迎へて黨首とし、原、松田の諸領袖をして平田、大浦の諸氏と握手せしむるに在り、人格崇高にして雲表の白鶴の如く、宮中の御信任また深くして、天成の總理大臣たる西園寺侯は、惜い哉健康甚だ勝れず、且つ政事家の必要條件たる執着力に乏しきがために、永く政友會の總裁たる能はざらんとす、乃ち侯をして最高級の地位に立たしめ、而して桂侯をして之に代らしむるに如かず、若し星亭の伊藤公を迎へたるが如き大決斷と大活識とを以て桂侯に對せば、侯豈欣然として之に應ぜざらんや、夫れ政友會にして桂侯を迎ふるは、是れ桂一黨の有力なる傑物を網羅する也、啻だに末松、伊東、金子の諸才人を迎得たるのみに止まらざる也、然かも陸海軍と善く、貴族院とも善くして、少くも政權を獨占すると十年十五年に及ぶべし、何ぞ區々の生存資源に窮乏するの要あらんや。

或は桂侯を迎ゆるを難んずるか、然らば則ち侯と妥協して暫らく侯を助くるに如かず、星亭が山縣內閣、伊藤內閣と提携したりし歷史を繰返して、桂內閣とも提携すべし、斯くする間は、新政黨の組織自から荏苒せざるを得ざるべし、多く貴族院と反目するの要なかるべし、而して生活資源には假令豐富ならずとも、又甚だ窮乏するが如き虞なきを得べし、斯くして二年三年を送る間に於て、內は自から結束を堅くして他より乘ぜらるゝ罅隙を塞ぎ、外は貴族院の同情を吸引して以て他日飛躍の餘裕を作るべし、此の間屢々桂內閣の壓迫を受け、天下誹謗の焦點に立つも、陰忍し堅忍して以て垢辱を甘んずべし、前議

會に於ける桂侯の苦心を鑑とし、政友會また其の苦痛を忍び續くるの決心を爲さば、是れ決して不可能事にあらじ。

故に明白にいへば、政友會の未來は二あるのみ、一は桂侯を迎えて黨首と爲すべし、之を上策とす、二は暫らく今日の狀態を維持して桂內閣と提携すべし、之を中策とす、若し夫れ一朝の屈辱を忍ぶ能はず、起つて桂內閣を倒すが如きは、下の下策也、風雲を捲起すと快は則ち快なるも、徒らに新政黨をして其の利を享けしむるに止まらん、政友會は深く星亨の行動を思ひ、歷史の繰返さるべきを信じて、此の際輕忽に動く可らず、是れ吾人が政友會を本位として切に忠告する所也。

一種の人道問題

東洋には殊に幼者虐待の惡風あり、儒佛兩敎が主として老者優重を訓ゆるも、曾て幼者保護を德敎上に於て重しとせざりし結果なるなからんや。

子を愛するは人情の自然也、殊に幼兒を愛するは普通の人情にして、其の深きと、親を思ふの情と到底同日に語る可らず、且つ古代弱肉强食の俗熾んなりし時期に在ては、老人を虐遇して甚だしきは全く遺棄するの惡習ありしが故に、德敎家乃ち起て熱心に老者優重の訓を普及したりしのみ、是れ可也、然かも因習久しきに及びて、偶々幼者を虐待する者あるも怪まず、甚だしきは幼者を賣買して之を觀る恰か

も商品の如きに至るも、曾て之を問ふ者なきが如きは、實に人道を賊するの甚だしき也。

我が國に於ても、今日尙ほ未だ全く幼者虐待の惡弊を根絶するに至らざるは、吾人の常に慨せざるを得ざる所也、行政廳は幼者保護のため一種の制限を設け、十二歲未滿の雇人に車々率かしむるを禁じ、藝妓の滿十二歲以下、娼妓の滿十八歲以下にして從業するを禁止したれども、單に是にては尙ほ未だし、工場に使用する男女に制限を置かざるは其の一也、俳優の子役なるものを制限せざるは其の二也、角兵衛獅子なる者にも亦十分なる取締を加へざるは其の三也。

幼者をしても若干の工賃を得せしむるとは、貧家に在ては或は一の必要なるも知れず、然れども骨格未だ定まらざる幼者をして過度の勞働に從事せしめて、其の終生の不健康を招くは、貧家をして益々貧ならしむる所以のみ、而して一國の勞力を毀傷する所以なるのみ、即ち全局の利害より判斷して之に相當の取締を設くるの必要なると多言せずして明白ならん、貧家が其の幼者をして收入を得ざらしむるの苦は苦なりと雖も、畢竟するに一時の苦のみ、暫らくは之を忍ばしめざる可らず。

演劇の舞臺に幼者を使用するとは、大いに考慮すべきもの也、西洋の演劇に幼者を用ふるの例は甚だ稀に、現にセキスピアの作に幼者の現はれしは少し、我が近松の作には多く子役を用ゆれど、本來人形操りのみ、木偶たるに於て何者を用ふるも妨げず、彼の傑作に幼者を用ひたること多きも恠むに足らざるのみ、悲劇に幼者を用ふれば、觀者の感情を衝動し易く、隨つて最も成功し易し、然れども眞の幼者を舞臺に立たしむるが如きは、何等必要あるにはあらず、子役が劇の趣意を理解せずして、時々不自然

の動作を爲すは、寧ろ觀者の惡感を招くなしとせず、素より一枯枝に一鴉を點じて十分に秋味を彰はすが如く、一子役の作用は大ならんも、或る點より其の不自然なるを考ふれば、時に全體の興味を殺ぐとなきにしも限らざらん、然かも其の子役使用が純然たる幼者虐待の一種なるに於て、人道上容赦す可らずとすれば、作者も興行者も、深く省みるを要せずや。

角兵衛獅子に至ては、幼者虐待の殊に甚だしきもの也、彼等は我が子を自家に鞠育して其の藝を敎ゆるに忍びざるが故に、他の同業者の子と、之を更迭すといふ、其藝を敎ゆるに忍びざるは、其慘酷なる明證也、多く飲食せしむれば其の骨堅くして轉輾するに適せず、四肢柔軟ならずして動作輕妙なるを得ずとして、饑ゆるも十分に食せしめず、渇するも十分に飲ましめず、また肥ゆるを怖れて十分に眠らしめず、夫れ十五歳未滿の幼者を待するに斯る方法を以てし、其の甚だ好まざる藝を强ゆるが如きは、實に人情に叛するの極にあらずや、況んや一通りの藝を敎たる後、日々の如く市中を立廻らしめ、其の收入一日幾錢に滿たざれば、歸るにも伴はず、歸りても定めたる食を與へずといふをや、弱齢なる彼等の一人が黄昏街上に彷徨して哀涙に咽ぶとを目擊する人も、恐らくは斯る事情を知らざるべし、彼等懶惰にして一日豫定の收入を得ざるに非ず、命ぜられたる所を廻り、命ぜられたる如くするも、戶々必らずしも錢を與へて其の藝を見ざるが故に、不幸にして豫定の收入を得る能はざるのみ、即ち爲さゞるにあらずして能はざる也、然るに其の主人なるもの歸るに伴はず、歸りても食を與へず、幼者を道路に遺棄するの重罰を課す、殆んど禽獸と擇ぶなし、否、禽獸と雖も斯くまで無情慘酷ならざる也、能く細事に注意して、殆んど干渉に過ぐるの弊ありとまで難ぜらるゝ警察が此の大なる非人道問題を不問に措くが

如きは、寧ろ咄々怪事とすべし、必らずしも憫れむべき彼の幼弱者が主人の逆怒に觸るゝを怖れて、實を警察官に訴へざるが故のみに非ざらん。

幼者が玉乘又は輕業を爲す如き亦虐待の一種ならん、但だ藝を演ずる幼者自身が好んで自から進むに於て聊か恕すべしとするも、幼者をして斯る演藝を爲さしむるの必要は那邊にありや、觀者にして普通の人情を有するものは、其の幼にして巧みなるの妙に感ずるよりも、却つて幼者虐待として不快感を催ふすべし、但だ彼等が莞爾として輕快なるがために、纔かに惡感を甚ふせざるのみ、人道より論ずれば、斯の如き寧ろ絶對に之を禁止するに如かず。

藝妓の雛妓を育成するや、亦自家に於てせずして他の同業者に托するを例とす、自家に於てして我が女にのみ厚ふするが如く他の抱妓に思はしめざらんとする注意に出づるのみにあらず、幼者に過度の藝を強ひ、之をして客に侍せしむるが如きは、寧ろ人情忍びざるものあると、譬へば猶ほ角兵衛獅子の如きが故のみ、況んや其の十三四歳なるものをして、強ひて淫を鬻かしむるをや、娼妓の年齢制限を滿十八歳以上と爲す以上、藝妓の滿十八歳以下にして賣淫するものあらば、また之を罰し、併せて其の淫を買へる蕩客を嚴罰して、其の氏名を公けにすべし、此の蕩客や狒々に近くして人間に遠きもの也、幾許の富を有するも、何等の爵位官職を有するも、斷じて容赦す可らず、黄金を以て女性の貞操を蹂躪するが如き人道を無視するものに對しては、寸分だも寬假するの要を視ざれば也。

幼者虐待の遺習の尚ほ現存するは國辱也、然り、人道上の大缺點にして、倫理思想の低陋なる明證也、吾人は宗教家教育家が起つて之を矯救するとを促すと共に、行政廳が亦斷乎として之を禁止するの方針に出でんとを望む、政治の最高目的の一は、國家をして正義を支持せしむるに在れば也。

春風貴族院を吹く

烏有先生

當今政治上の問題尠からずと雖も、最も興味あり、最も希望ある問題は、貴族院に於ける政治熱の發生てある。人或は之を目して政黨運動の端緒なりと云ふものがあるが、予は唯單に之を以て政治熱の進みたるものと見做すに止つて、今後の形勢は豫言することは出來ぬ。兎に角貴族院に新たなる形勢を生ずる曉星曙色が既に來つたのであると云ふに就ては、寸毫の躊躇を要せぬことであると思ふ。昔の詩人は雪は白し比良山の一角、春風尚未だ江州に到らずと言つたが、從來の貴族院は燃ゆるが如き政治上の熱風に吹かれつゝ、尙其冷やかさ加減を持つて居つて恰かも比良山の白さが如くであつたが、今や時到り、機熟し、春風江州に到るが如く、貴族院の內に政治の熱が加つて來た。是れ獨り貴族院に於て新しき形勢を生ずる啓端であるのみならず、深く之を察すれば、我が內政の全般に亘つて新形勢を生ずるの端緒てあらうと思ふ。其到着する所のホーライズンは、殆ど今より測知すべからざる遠大なるものであらうと思ふ。

貴族院に於ける形勢の變化の中、最も著しきは談話會なるものが起つて、四十四年の總選擧に勝敗を爭はんとする一事であるが、貴族院の新形勢は單に是に止まらず、研究會の內訌を始として、各派、各會に於ける內部の形勢を察するに、悉く動搖を生じ、悉く變化を孕み、從來の形勢を以て今後を推測することの出來ぬ狀態に立至つたと云ふことは、蔽ふべからざる事實てある。併ながら今日政界の問題となつて居るものは談話會であつて、天下紛々、之を論じ、或は之を以て政黨なりとして攻擊し、或は之を以て政黨の卵であると言つて歡迎する者があるが、予は果して談話會が今

後政黨運動を爲さんとする者なりや否やを知らず、恐らく談話會員自身も亦之を知らぬてあらうと思ふ。何故なれば其政黨となるや、將た政黨らしきものとなるや、抑々又政黨らしからざるものとなつて止まるや、是等は今後の形勢自身が作るものであつて、談話會自身の希望通りに行かぬものである。併ながら予は之を以て政黨なるが故に歡迎すべき理由も有たなければ、政黨なるが故に之を攻擊すべき理由も有たぬ。予は唯其顏觸れ、其會員の主なる人々の平生の言論、及立つ所の地位に依つて、從來の他の人々の言ふが如く必しも衆議院を敵視せず、必しも政黨を敵視せざると云ふ一點だけは明白であると思ふが、若し談話會にして其誕生日を賀すべき理由がありとすれば、此一點にあるてあらうと思ふ。

從來貴族と平民の間に立つて狡猾なる策略を弄する議人の一派があつて、貴族院は政黨の外に立ち、衆議院と相對抗せざるべからずと云ふことを以て、頻に貴族を遊說する口實として居つた。併しながら是等の議人が爲す所を見るに、多くは是れ耳を掩ふて鈴を盜むの類てあつた。何を以て爾か言ふかと云ふに、研究會を始として各派、各會、悉く皆組織を有し、事務所を有し、代表者を有し、合議に依つて事を決し、進退を結束して居る。是等は純然たる政黨なりと標明せざるも、其實は政黨である、唯政黨らしからざるものは首領と云ふ名を設けぬのみに過ぎぬのである。黨議と云ふものを定めぬのみてある。然るに一人の首領は無きも、二三人の首領は確にあるのてある。黨議と云ふものを定めざるも、會の約束と云ふものはあるのてある。然らば其實は純乎たる政黨てあつて、唯之を警察署に屆出てぬと云ふに過ぎぬのてある。若し斯の如き集會が民間にあるならば、警察署は必ず之を政社法に依つて取締つたのてあらうと思ふ。貴族院の各派、各會は、從來斯の如き政黨の名を避けて政黨の實を執つて居る。而して衆議院の政黨に對しては超然として其外に立たねばならぬと云ふことは、是恰も耳を掩ふて鈴を盜むの類てあつて、殆ど自ら欺くの類てある。されば

或年研究會が桂內閣に對して反抗せんとする時は、桂內閣も流石に意を決して、政社法に依つて之を取締らんとしたことがあるが、併ながら貴族院の形勢に通ずる者があつて、斯くの如き手段を執つたならば、却て反抗を招くであらうと云ふので、此進言を容れて遂に政社法を以て取締り、政黨と見做すと云ふことだけはなかつたが、是等の事實を見ても、政黨が旣に貴族院に蟠つて居つて、研究會は其最も大なるものであつたと云ふことを證明することが、出來るであらうと思ふ。

貴族院に於ける政黨の發生は斯の如きものであるに拘らず、寛大なる貴族は此間に周旋する刀筆政治家の爲に誤まられて、全く衆議院と相對抗し、衆議院內に於ける政黨と相抗爭することを以て、貴族院の本務と心得て來た者が少くはなかつた。是甚だ貴族の爲に惜むべきことであるのみならず、貴族と平民に依つて相爭はしめ、貴族院と衆議院とに依りて相爭はしめると云ふことは、即ち國家政治上の爭ひを、問題に依らず、政策に依らず、階級に依つて相爭はしめんとするものであつて、國民的結合を弱からしめる所以の基である。是實に帝國主義を懷く者の、猛然として省みねばならぬことであつたに拘らず、刀筆政治家等の口舌は、能く貴族院議員を誤らしめて、貴族院は政黨と相爭ひ、衆議院と相爭はねばならぬものであると云ふやうに想はしめて來た。而して此兩院相爭ひ、貴族平民相衝突した結果は何であるかと云へば、國務の進行を阻碍し、而して政權をして刀筆政治家の一派に歸せしむるに過ぎなかつた。即ち貴族及貴族院は、刀筆治家の爲に栗を火中に摑み去つたものである。想ふに今にして是等の形勢を回顧すれば、愧憤に堪えぬ人が少からざることであらうと思ふが、今や貴族院の形勢一變し、上下兩院は相爭はざるべからず、貴族平民は相爭はざるべからずと云ふが如き從來の愚論に依らず、其信ずる所に依つて進み、政黨必しも敵視するに足らず、衆議院必して敵視するに足らず、若し其政策にして可ならば共に爲すべし、若し其行動にして否ならば相爭ふべし

と云ふが如き形勢を生ずるに至つたといふことは、是即ち政治が國民的性質を帶びんとするものであつて、此結果政黨、刀筆政治家等が、從來の策略を悉く放擲せねばならぬことゝなるのであるから、刀筆政治家等が極力之を妨害せんとし、或は黄金に依り、或は威迫に依り、之を妨げんとするは自然の勢であると言はねばならぬが、此區々の術策は暫時の間効能があるだらうとは思ふが、併し恐らくは長き結果としては効能を見ることが出來ぬであらうと思ふ。と云ふ次第は、春風既に貴族院を吹き初めて、區々の屛風を以て此風を遮らんと欲するも得べからざる譯であるからである。春は既に熟した、花と云はず、草と云はず、今や貴族院に於ける總てのものは、春色を帶びんとする時期である、區々の人力之を奈何ともすべからざる譯である。

蓋國會があれば茲に議員あり、議員があれば茲に意見の異同がある、意見相合する者は相合同し、意見相異なる者は相爭ふことも自然であるとすれば、合する者は一の政黨となり、合せざる者は之が反對黨を作ると云ふことも、是亦自然の勢である。故に憲法有れば國會無かるべからず、國會有れば政黨無かるべからず、殆ど自然の勢と言はねばならぬ。或人は日本の憲法に責任内閣、若くは政黨と云ふが如き文字が無いと云つて、之を以て政黨は憲法に認められて居らぬと云ふ論者がある。併ながら憲法の何處に於てか、議員が政黨を作ることを禁ずると云ふ文字があるか。禁ずるの文字が無ければ則ち之を許すの意味を包含したものと謂はねばならぬ。假りに國會有つて而して政黨無しとせよ。一の問題起る毎に、三百餘人の議員喧々囂々として悉く其意見を發表するとしたならば、恐らくは終年一の問題を決定する事が出來ず、國家は其煩雜に堪えぬであらうと思ふ。然るに茲に政黨あれば組織あり、組織あれば決議あり、決議あれば委員あり、委員あれば總務あり、而して其總務が互に相談合して茲に問題を決定すれば、國務茲に進行すると云ふ譯である。何人か政黨を以て國務の進行を阻碍すと言ふ者があらうか。政黨

微つせば國務の進行は恐らくは容易ならざることてあらうと思ふ。且又如何なる政府も、外に對しては武力を以て其背後の勢力とするが如く、內に對しては又政治上の勢力の結合したものがあつて、之を支へて行く者がなければならぬ。即ち國民の力未だ發達せず、僅に市町村に十人二十人の口利きがあつて、國政を批評すると云ふ時代に在つては、政府の勢力と云ふものは、屬僚中に於ける人物が政府に集つて居ると云ふことが即ち政府の勢力である。併ながら今日の如く國民の力が大に發達し、國民の權力が大に發達し、國民の知識が大に發達したる時代に在つては、區々の屬僚を以て政府の勢力と見ることは出來ぬ。即ち其背後に在つて國民と相權衡を維持するに足る程の大勢力が結合せねばならぬ。是は何てあるかと云ふと、國民中の最も秀粹なる者が相集つて政黨を作る。政府は是等の支持に依つて成立つのてある。昔外史氏は、鳥羽帝の時屢々制符を下して、諸州の武士の源平二氏に屬するを禁ずるを見たけれども、其の甲斐なかつたと云ふことを見て喟然として長歎したが、當時藤原氏に依つて支へられたる政府の權力既に衰へて、新たなる權力、新たなる勢力に依つて己を支へねばならぬ時代となつた。即ち藤原氏に代つて出づる所の勢力は源平二氏てあつて、天下悉く此二氏に屬すと云ふことは止むを得ざる勢てあつた。今日天下政友會と云ひ、進歩黨と云ひ、又新會と云ふも、何人が促す譯てはない、政府之を禁ずるも得べからざること、恰も源平二氏に屬するを禁ぜんとして得ざるが如き有樣てある。故に何れの政府、何れの時代と雖も、其背後に在つて之を支へる勢力がなければ成立つことは出來ぬ。何れの時代に在つても之を名けて政黨とは言はぬが、一種の黨派があつたと云ふことは掩ふふべからざる事實てある。是等の黨派は或は血族の黨派たり、一人の英雄に依る黨派たり、地方に依つて結合する黨派たり、時代に依つて性質を異にすと雖も、兎に角何れのときに於ても、政府を支へる所の勢力の結合が背後になかつた時はないのてある。而して近世に謂ふ所の黨派に至つては、政治上の

意見、國家を經營するの方策を揭げて國民の同志を集めるものであるから、古今の歷史に在る所の黨派的勢力を篩に掛け、蒸溜器に掛け、之を清潔にし、之を純粹にし、之を政綱化し、之を組織するものである。故に何れの國と雖も黨派無きに非ず、而して政黨に至つては其最も進みたるものである。予の一友人、曾て北京に居り某王と會したる時に、某王は氣品あり、德望あり、氣慨ありと雖も、近世歐洲の事情に昏く、留學生等が頻に政黨論を唱ふるのを見て甚だ之に平ならず、友人に對して其意中を洩らした。友人答へて曰く、政黨は憲法上必要のものである、之無かるべからずと云ふことは語弊がある、併ながら之有るは免れざるものであると云ふことは、亦蔽ふべからざる事實である。凡そ政黨は君主が其民を用ゆる所以の途である、古にあつては兵の權に依り民を用ゆるの時もあつた、宗教に依つて民を用ゆるの時代もあつた、君主の德に依つて民を用ゆるの時代もあつた。然れども今や何れの國に在つても國民の知識、感情、勢力大に發達し、之を用ゆるの途は政黨に依つて之を組織し、之を按排し、而して之を用ゆるに非ずんば國政を料理することは容易でなくなつたから、政黨が自然に起きて、君主亦政黨を認めるのであつて、即ち政黨は英明の君が其民を用ゆる所以の途であつて、亦是れ王道の一であると答へたが、此論移して以て貴族院に於ける現時の新しき運動を評するの言とすることが出來やうと思ふ。貴族院に於て政黨を敵視せず、衆議院を敵視せずと云ふ運動の起ることは是亦貴族が人民を用ゆる所以を解して來たのであつて、國政運用の妙用玆に始まると言はなければならぬ。然るに斯の如き時代に當つても、尙政黨を害物であると爲し、衆議院は貴族院と相爭ふものであるとなして、依然として階級戰爭を起さしめんとする議人あらば、是實に帝國統一の主義を妨害して、國務の運用を妨げるものであつて、貴族を用ゐて或一派の野心を遂げんとする孤注と爲すものであつて、貴族の敵と言はねばならぬことである。

何れの運動、何れの事業に就ても、曲學阿世の徒が有

つて、之が妨害、之が辯明を勉める者が少くないが、貴族院中に立籠る畸人等が、貴族と平民を依然として相爭はしめんとするが爲に、今尙貴族は政黨に關係すべきものでないと云ふが如き議論を唱ふる者があるが、是殆ど太陽東に出づるに當つて、猶蠟燭を以て夜を照さんとするが如き陳腐なる議論で、殆ど憐むべき議論と謂はねばならぬが、抑々何れの國の貴族が貴族院に立籠つて衆議院と爭ひ、其貴族の階級に依つて平民と相爭ふことを以て本務とする者が何處に在るか。何れの國にあつても貴族は治者の階級であつて、政治上に興味を有すべきものである、政府の當局と交はること久しく、又交はるの便宜がある、衣食足つて生計の憂なく、其脈管の中には曾て國を治めた人々の血液を有して居り、而して其地位を自覺すると云ふ自尊の念に依つて人の長たるの氣象を具へて居る。何れの國にも皆此階級があつて、而して此階級は常に其政治に興味を有つて、自然に政黨に興味を有つて居る。乃ち英國の如きは貴族が最も尊敬せられて最も勢力ある國であるが、英國の政黨は平民の政黨に非ず、實は貴族が作つた政黨であるので、宗教改革の當時、自由主義勃興の當時、大貴族が先づ政治に興味を有つて政黨を作り、而して地方に於ては山林の小民が亦政府及宗教に興味を有つて居つて黨派を作る者と、上下相合體して茲に大政黨を作つて、此政黨が歷代大事を成して、貴族と平民と常に相合同して來たのが即ち英國政黨發達の歷史である。故に今日英國に於て貴族院と衆議院の爭ふことなきに非ずと雖も、是は貴族院と衆議院と爭ふ譯ではなく、衆議院に於て多數を制する自由黨が、貴族院に其黨員を有するけれども甚だ多くない、而して時として衆議院に多數を制せざる保守黨が貴族院に於て多數を有するが爲に、上下兩院相爭ふが如き形を生ずるけれども、實際に於ては衆議院中の保守黨と、衆議院中の自由黨との爭ひに外ならぬのである。衆議院に於て多數を制する保守黨が政權を執る時は、貴族院は常に政府の味方である、衆議院の多數を制する自由黨が政府を組織する時は、往々にして貴族院の多數を制する保守

黨が之を妨害すると云ふことがあるけれども、貴族と平民の爭ひてはない、上院と下院の爭ひてはない、要するに保守黨と自由黨との爭ひに外ならぬのである。昔も斯の如し、今も斯の如し、恐らくは今後も斯くの如くてあらうと思ふ。貴族が政黨に興味を有することと斯くの如くてあるが故に、英國の貴族は他の國の貴族に比して國民に勢力あり、國民に尊敬せられて居るのである。若し是が上院は必ず下院と爭はざるべからず、貴族は必ず政黨と爭はざるべからずとせば、英國の如きは貴族の滅ぶるや久しからぬてあつたてあらうと思ふ。是等の事を思ふに付けても、英吉利の貴族の祖先が、其初め眼識あつて政黨に加入して自らを保ち、國民を啓導した先見の明は、深く尊敬せねばならぬことてあらうと思ふ。然るに英吉利の歴史の較著なる斯の如きを曲解して、外國に於ては貴族が政黨に關係する者が無いなどゝ曲論するに至つては、其愚や憐むべく、其痴や笑ふに堪えたりと謂ふべきものてある。我が賢明なる貴族は必ずや斯の如き阿世論者の惑はす所とはなるまいと思ふ。

予は政黨員にもあらず、貴族院議員てもない、貴族院中の貴族が如何なる事をするも、予に於ては何等の交涉なきが如くてある。併ながら予は人文の進歩を望む學者てあつて、此位地より見れば、貴族院に於ける新形勢は容易に看過すべからざることてある。予は素より平民である、併ながらシャトーブリアンが言つた如く、予は名節に於ては貴族たり、予は主義に於ては平民たり、予は理想に於ては共和黨たりと言つたが、予は平民てあるが、併ながら予の趣味は貴族に對して深く同情を有して居る、而して貴族院に於ては少なからず友人を有するが故に、他國の事として看過することは出來ぬ。故に此希望あり、而して興味ある問題に就て常に觀察を怠らず、其益ゝ進行せんことを望む者てあるが、之と同時に予は貴族院の諸公が、維新の當時志士仁人が身を殺して仁を爲さんとしたる時代の逸話を記憶せられむことを希ふ。予の先進の一人の語る所に依れば、維新前尊王攘夷の志士は、極力幕府を倒さ

んと企てたけれども、幕府には儼然たる兵馬の權があり、志士等が空拳を振つて之を倒さんとするも到底其望なきを悟つて、一時身を潜めて或者は長崎に行つて外國商館に、或者は民間に隱れて商賣人となり、暫く時機を傍觀しやうてはないかと相談したことがあつたが、其後一年ならずして伏見鳥羽の戰爭となり、幕府の敗北となり、九天直下の勢を以て二百五十年の歷史を有し、而して文武兵馬の大權を有する幕府は俄然として倒れてしまつた、凡天下の事、奈破翁の言へるが如く、最後の五分間の忍耐が必要てある、予久しく政府に在つて、議會に於て政黨と相爭つたが、政黨が既已力盡きる時は、政府も亦既已力盡きた時てある。若し此時に政黨が自ら重じて、最後の五分間を維持したならば、政府の倒れたるや屢々てあつたらうと云ふことてある、貴族院に於て新らしき事を企てんとするは、其事容易に非ず、收穫の直ぐあるものてないと云ふことを覺悟して、而して最後の五分間を爭ふ忍耐力を有たれんことを望む者てある。天下の事理は一なり、古今の勢ひ總て相等し、古に於て斯の如し、今後に於て亦斯の如くてあらうと思ふから、老婆心ながら貴族院の諸公に此言を呈したいと思ふ。

高商問題を論ず

島田三郎

一、高商の歷史と矢野君

高商問題は地上に波瀾を捲いて意外の騷動になつた、事の起るは起るの日に起るにあらず、必ず由つて來る處あり、此問題の關係を公平に觀察するには、遡つてその履歷を一應話す要がある、知るものは能く知る、我國て商業に果して學問の必要ある乎と云ふ事は、武士的階級教育の一變して國民皆教育の必要を感じた當初に於ける一の疑問であつた、此時分に社會は改革の精神に充たされて各種の方面其面目を一新せんと鋭意猛進して居つたが、故の森有禮君は辨理公使の任を解

いて亞米利加より歸朝し、亞米利加の實況を視察し來りて之を我國に應用せんとする時であつた、君は商業教育の必要を唱へて敢てその任に當るを決し、銀座の某所に講習所を作つて自らその局に當つた、當時は商業を商法といふ慣習故之を商法講習所と名けた、所が僅に一年を經て森君が支那公使に擧げらるゝ事となつた、て後任を誰に囑せんと思案の上、亞米利加に於て森君の後に立ち、代理公使を勤めた故の矢野次郎君が適任だと見て、之を同君に委ねた、矢野君は舊幕の騎兵の傳習隊士官で精悍の氣を負ひ、維新の變に遭ひ士籍を脫して獨立不羈の生活を爲さんとし、明治の初年通辯をして橫濱に內外商事の紹介をやつた經歷もあり、亞米加利の商業の旺盛を見て頗る此事に興味を覺え又森君の知遇に感じて、我國に商業教育の基礎を立てんと決心し、之を終生の事業となし、君の朋友が直接商業を營んで、有望有利の地に立つをも顧みず、一意專心商業教育を司る事となつた、矢野君の人物はその晚年に遺憾なく社會に公認せられし通り、快活で熱心で眞摯で、勇往邁進屈せざるの人物であつたから、當時商業教育の必要なしといふ四圍の空氣を排して、是非とも自己の理想を實現せんと、辛苦經營その發達を圖つた、故の勝伯も矢野君の此擧に同情を表して間接に援助を與へた、米人ホエツトニー氏が最初の英語教師として此講習所に入りしも、勝伯の口添に出たと思ふ、斯くて矢野君の盡力空からず、其事業が漸く一部の識者に認めらるゝ樣になりかけた、當時東京會議所といふものがあつて、重に有力な實業家を以て會員とし、東京の道路橋梁街燈その他府民の經營すべき事業の顧問として府政に參し、又共有金を管理して居つたが、此團體が講習所に補助金を與へた、澁澤男益田君等の講習所即ち高等商業學校の前身に關係したのは此時代からであるから、二君の如きは誠に古き商議員と言はねばならぬ、斯くて地を木挽町に相し、其處に講習所を新築した、今から見ると實に狹小なものであつた、その後制度の改革によつて府會が生じ、會議所の事務も府會に引續ぐこととなり、その補助金の出所も自然府會の

手に移つたが、その儘一二年を經ると此處に一個の問題が起つた、當時は市の獨立が無い勿論市會が無つたから、府會で市內の講習所の經濟を持つこととなつてゐた、商法講習所が商業講習所となり、又商業學校となつたのは此間の事であるが府は市區と郡部との共通經濟である、商業學校は直接商人の關係で市區商人の利益を進むる教育場所であるのに、郡市共通の府會が之に補助金を與ふるは不當であるとの議論が起り、遂に多數を以て補助金の廢止を議決した、此に於て折角發服しつゝある商業學校は、その糧道を絕たれて存立の困難を感じた、若し此時矢野君が所長でなくして、薄志弱行の人物が任に當つて居つたならば、此學校は此處で中絕したかも知れん、隨て三十餘年の商業教育の歷史は今日の如く連綿たる記錄を印刻せずして別の系統を留めたのかも知れぬ。

困難に當つて一倍の勇氣を發揮するは矢野君の特異の性質であつた、此府會の議決に逢つて君は八方に商業教育の必要を遊說し、當時府會議長で非常の勢力のあつた沼間守一君にも此教育の時代に必要なる事を說き、遂に之を同意せしめた、沼間君は矢野君の熱心に感動し、且つ實地に自らその學校を視察して如何にも實用的修業を爲すを見、翕然府會の決議を飜すことの盡力をすると誓つた、當時の府知事は有名な公平誠實事務練達の松田道之君であつた、此松田君も矢野君に同情を表して、從來沼間君とは多くの問題に就いて奮鬪し來つた歷史ある知事が、此商業學校問題に關しては沼間府會議長と協力して矢野君を助ける事となつた、沼間君は議長席を下つて自ら長廣舌を揮ひ、此商業教育の必要を論じ、一旦議決した補助金否決案を飜すこととなつた、當時議事法の上から之を非難するものも有つたが、遂に府會は補助金を繼續することに決した、併しながら此補助金だけでは到底時代の要求に應ずる程に、規模を擴張するには不足であつた、且つ又前の經驗からして此補助金に依賴するの危險をも感じた、て矢野君は廣く有志の寄附に訴へて學校資金を募集したが、第一に助力を與へてその確立に勉めたの

は澁澤男である、又此熱誠なる主張が上下を動かして宮内省の御下賜もあり實業家の義捐もあり會社の寄附金もありて漸く其基石を据へた、斯くて一二年の後更に府會の手を離れて之れを官立とするの新紀元が開けた、當時の農商務卿は（當時は太政大臣左右大臣及び卿の名稱ありて各省長官は大臣と言はざりき）河野敏謙君であつたが、河野君は世上に反對が多くして矢野君の特異の性質が認められなかつた時代から、深くその人と爲りを信じ又厚き同情を此事業に表して、その實業學校なるの點から一時農商務省から補助金を給與して其管轄の下に置く事となつた、其後森有禮君が支那から歸りて内閣に入り文部大臣となつたが、我國の教育史上第一流の文部大臣として今日猶ほ人に記憶せらるゝ森君は、諸般の改革を施した、その一として更に商業教育を奬勵し、農商務省の管轄より文部省の管轄に移して玆に今日の高等商業學校がその基礎を据えたのである、矢野君は多年の宿志その六七分を遂ぐるを得て非常に滿足し、學校に縁りある朝野の名士を招いて紀念會を開いた、これは明治十八年と思ふ、當時河野敏謙君は早く民間に下り反對政黨の領袖として政府よりは一敵國視せられた、沼間君も同じく政府より嫉視せられた有力者の一人であつた、民間黨と政府との間には當時非常の隔りがあつて、席を政府に列するものは從來の朋友で有つても民間黨と往來すれば、その位置を危險にするものと解せられ、民間黨は官界の友人と遠かつて交際せず、官界のものは民間の友人に近くことを恐れた時代であつた、然るに矢野君が文部省の管轄となつた高等商業學校の校長にてありながら、此紀念會の賓客として河野、沼間の兩君を招待し、官吏の間に席を設けて多數の中に曾て盡力せられし事蹟を公然と述べ、感謝の誠意を表したのは、世上の耳目を聳動して一時の談柄となつた、森君が矢野君を信用した程度は之によつて分り、又矢野君が獨立不羈の性格を具へ勇氣と誠意とを有したことは此一事に就いても分る、森君が自信に篤くしてその持論を敢行すると同時に、亦能く氣骨ある人を容るゝの量あつてその材能

を發揮せしめたのは、流石に今日記憶せらるゝ丈の教育行政家である、此の時代に矢野君は益々學校の發達を圖り、前に述べた通り或は宮内省の御下賜金を得て商業教育の大切なる事を上下に表するを得、實業家の寄附も少からずして、愈よ學校の基礎を固むると同時に實業教育の必要を悟らしむる階梯を作つた、且つ商業教育を實地その時代の實業界の要求に適合せしむるの必要を感じて、教育と實際との連絡を緊密にする爲め商議員を設け、公平に有力なる實業家の助言を受けた、此長き年代の歴史に於て絶えず助力を與へたのは澁澤、益田、富田等の諸氏である、勿論澁澤男はその首位を占めて居る、高等商業の講堂に澁澤男の肖像を掲げてあるのは、誠に當然の標識である、文部省が高等教育會やその他校長會議を招集する時此講堂を會場とするが、これは實に矢野君時代有志の寄附によつて出來たものと思ふ。

二、高商の學風と文部

併しながら此學校は、前進し來りし經歴から段々生育したものであるから、初より基礎を官立に置いたものとは自然にその性格を異にし、自治の精神が教授及び學生の間に充ちて居る、矢野君時代には校長は父の如く教授は兄弟の如く學生は子供の如き感があつて、情愛の方が重くなつて居たから、文部省が統一、規則を第一と尊重するものとは色彩を異にして居る、文部省が時にその威壓を他の學校に於けると等しく加へんとしても、此校内には及ばぬ事もあつた、森君の如き文部大臣を戴く間は、能くその長所を利用しその所說を容れて能く調和を取つたのであるが、時代の推移と共に文部省の屬僚は、却て自己の威權の此學校に及ばぬを不快に思ふものも有つたらしい、之が今日の問題を惹起す一原因である、矢野君校長時代に生徒の反抗した事件があつた、皮相の論者は此事實を捉へて商業學校の學生に [illegible] 如き、一種の反抗的不良の習慣があるといふが、之はその眞相を知らぬものである、當時の反抗は文部省側の或者が、矢野君の養成した校風は餘りに商人風で高

尙の氣風を缺いて居る、且つ餘りに俗氣を帶びてその學問の程度も低いといふ說を一部に吹き入れた、之が動機となつて一時騷擾を見たのである、當時此反抗の檄文を起草した一人は予の親しく證人として入學せしめた人で、激しき反抗をした、此騷動の爲に矢野君は一事職を去ることとなつた、けれどその後の實驗によつて、矢野君に反抗した事は惡かつたといふ事になり、當時反抗の主領株も改悔の實を表した、すると矢野君は前の爭は全然忘れたる如く、よくその學生を包容して及ぶだけの世話をなし引立てたので、此等の學生はその誠意に感服し、且矢野君の推輓によつて實業界にも出て、今日は純然たる矢野君崇拜者となつて實業界に勢力を得て居る人もある、予が證人たりし當時の反抗學生の一人は此時退學したが其後矢野君の力によりて其所を得、今回の問題起るに及び名古屋の同窓會を代表して大に母校の爲めに盡力し、同窓大會にも出席して居る、一時騷擾したものも却てその非を自覺して一層學校を愛慕するに至つたる結果、矢野君は又も舊位置に復して依然その歷史的發達を遂ぐるに至つた、彼の事件の動機は文部省側が不快の念を懷きて矢野君に反對したに在るのだから今日に於て文部省側の人が彼れの如き事は學校の惡風だなど、評する權利は毫もないと思ふ。

商業學校に入るものは入る時から一種の風がある、それは日本の商人は卑屈である、柔軟である、輕薄であるとの、漫然たる世上の貶稱に對して一種不滿の念を有し、我れ商業界に入る以上は適れ武士的實業家となり、此世評を打消さざるべからずとの自任がある、此精神は恰も明治六年に澁澤男が、當時權威ある官吏の位置を抛ち、奮然實業界に入る時に多年輕蔑せられたる商人の位置を高めて、英米諸國の商業界を日本に開拓せんと自任したると一點吻合する所がある、自尊自然の風が此學生間に磅礴するは、日本の歷史上商人を卑んだ一種の反抗である、書を讀み理義に通ずるに至つて愈よその理想の高まるは心理的必然の傾向である、處が一面文部省側から見ると、依然時代後れの思

想が官僚の間に充ちて如上の氣象を眼中に置かず、此敎育を極めて輕蔑する形迹あり、敎授や學生の自信自任の精神と相容れぬ場合がある、例へば商業敎育は此學校を最高の機關とする、他日はその程度を高めて大學とせなければならぬ、そして卒業したものは直に獨立の事業家となつて社會に雄飛せんと欲するに對し、文部省側からは屬僚の慣手段を以て之を支配せんとするの態度を示すに當つては、相互間意氣の此相違から平和を破るは已むべからざる結果である、曾て清水彦五郎君を校長としたる時、生徒敎授の反抗が有つた、寺田勇吉君の校長となつた時も平和を維持し難かつた、文部省は此等を見て、此學校に反抗の惡風があるといふが、前述した如く自任の深い學生等の團體、特に森有禮君以來歷史的に養成されて來た氣風があるのに、大學で舍監をし、文部省で事務を取つたといふ丈の人々を以て支配せんとしたのは此學校を重く見ぬといふ態度が分る、之を遺憾と思つて騷いだのである、學生等に斯かる自尊自治の風ある事は此等學生を統治する者の寧ろ大に喜ぶべき事と思ふ、當時の學生にして目下實業界に相應の位置を占めて居る某氏の當時の感情を語るを聞くに清水彦五郎君といひ、寺田勇吉君といひ、その人物に於ては決して異存はない、只文部省が輕く誰にでも商業學校は支配し得らるゝと思ふ事が遺憾なのであつたと、正直に言つて居た、若し此等の反抗を不可とするならば、京都大學が文部次官たる岡田良平君を校長としたのを不可としたのは、矢張り京都大學の惡風であるか、東京大學で農科大學長松井直吉君を總長とした時、敎授一同が不足を稱へたのは矢張り東京大學の惡風であるか、予は決して左樣には思はぬ、その人を得れば治まり、その人を得ざれば治まらぬ、何れの場所でも同樣である、菊池君が赴任して京都大學は今日の平和となり、濱尾君が總長となつて東京大學は今日の平[illegible]その人を得たによる、現に駒井重格君が高等商業學校の校長であつた時には最も人望あり、敎授も生徒も皆心服して居つた、小山健三君の校長時代も、熱心にそ

の教育の程度を高める事に努め、生徒を愛撫したから同君は頗る人望を集めたのだ、予は高等商業學校に反抗の弊風あるを信ずることは出來ぬ、その自任自信の篤きは却つて特異と見なければならぬ、特に今日の商業を一新して國際的大規模の商業を振はんとせば、獨立自尊の氣象ある學生は却つて之を尊重せなければならぬ。

三、目下の問題と文部の亡状

以上は歴史的に觀察したる、予の概見である、之より目下の問題を批評しやう、如何にするも文部の今回の處置は不可解である、商業大學の希望は年月久しきものであるが、昨年の議會に之を可決したにも拘らず文部省は少しも顧みなかつた、今年の議會にも再び之が可決せられたが、當局者には熟した考の答はなかつた、委員會に於ても政府の答辯は猶ほ調査中との事に過ぎなかつた、即ち今春の三月迄には商科大學を置くの決心もなければ勿論その制度の定案もなかつたのである、然るに三月に議會を終りて四月の半に至り、突然その議を速決して適當の順序をも踐まず、凡てを秘密に附して之を發表したのは經卒といはんか專斷といはんか、唯驚くの外はない、何故適當の順序を踏まぬといふか、即ち議會よりしていへば、永久に亘る教育の組織は先づ之に充つべき費用を豫算に組み込み、議會の協賛を經なければならぬ、文部省側はこれは行政權内の事だといはうが、その費用を可否するは議會の權能である、彼等行政官が新事業を既定の歳出中の者の如くに之を專斷して、後で是非ともそれを議會に承諾せしめ樣とする者は議會の權能の蹂躙である、故に其處置假に宜きを得たとした處で、猶ほ國會の權能を蹂躙したる不當の責を免れぬ、況んや設備宜きを得ず、順序の正路を踏まざるに於ては言語道斷の沙汰である、高等教育會の如きは此如き重大の事件を諮問さるべき處であるが之にも謀らぬ、元來此高等教育會の起つた原因は内閣交迭毎に教育方針の動搖あるのが、永久に亘るべき教育制度の危險であるから、之を設置して教育主義の確定を勉め、行政部をして内閣交迭毎に方針

め變更を要せざらしむる樣にしたものでないか、次に文部は年々實業學校長會議を開いて樣々の諮問をする、然らば何故に些末な事項をも諮問しながら商業教育の基礎を永久に定むべき制度の設立に於て之を諮問しないのか、又之を諮問するの暇なき程急遽斷行の必要あるのかといへば左樣でもない、今春までは等閑に附し置き、議會に對しても調査中と答へたのであるが、それがその後一箇月も經ぬ中に急に之れを定めたのである、聞く處によると、文部省内でも此議に與つたものは少い、次官が計畫し大臣に同意せしめて、後で他のものに調印せしめたとの事だが、事實とすれば更に驚くべき事である、それ故高等商業學校の教授連に至つては、發表間際迄全く無沙汰にされて居たのである、又前述した經歷から多年此學校の發達の爲に金を獻じ力を獻じ精神を注ぎたる人々、學校生徒の卒業間際にはその人々を賴みて卒業生の世話をも求めた、即ち世話人とも認めらるべき商議員にも何も謀る事なく、亦その半途に進めたる忠言をも聽き入るゝことなく、最早や定まりたるものだから斷行するとの態度であつた、予の聞く處によれば、先月の半頃經濟商科を大學内に置く事も澁澤男に話した相だが、澁澤男は經濟商科とは異なるものだとその時反對の意見を述べて置いたら、その後には商科を置くと改めた、此間に行違がある相だ、即ち商科を置くとすれば、農科工科と同樣な譯で、それ等と對立すべき一分科だとは澁澤男の取つたる意味であつた、でそれなら教授連の辭職をも說得して思ひ止まらせ樣との親切な考を持つて歸つたのであるが、豈圖らんや左樣ではなく、唯經濟商科の名目を單に商科と改めた迄て、依然法科の一部として同科内に置くとの事であるのだ、何だか一向要領を得なかつたので、澁澤男も啞然として文部省の名を存して實を沒却する狡猾手段に驚いたとの事である、凡ての遣方が誠實を缺くのに不快を感ずる、文部省は盛に誠實主義を鼓吹して居るが、文部省自身は果して誠實であるか、名を取りて實を沒するは不誠實である、謀るべきに謀らず一旦定めたからとて我意を斷行するのは專權

である、凡ての點に於て予は斷じて文部省今回の仕打に不同意を表せねばならぬ。

四、商科大學の必要

次に制度の缺點をいへば、特種の性質を帶びた教育は其特性を發揮せしめねばならぬ、我國で等しく大學と譯する中にも歐米の制度によれば二箇の異る制度がある、ユニヴアーシチー――組織的統一的大學、アカデミー――單獨大學の二つである、組織統一的的大學にも長所あれば單獨大學にも亦便利がある、國柄と時代と教育の特質とに依て、此二つを併せ行ふ丈の行政的處分が必要と思ふ、文部省は一概に組織的統一的大學を主張して、他の一方の特質を無視せんとして居る、學制の統一といふが、元來教育其者の特質が個人としての特質を發揮するに在る、規則的に統一を旨とするは決して人材を各方面に成育するの必要條件ではない。

孔子も德行に文學に政治に言語に各その門人の長所を發揮せしめた、これが聖人の大教育家たる識量である、我國でも教育家の模範と言はるゝ木下順庵は、その人才を門下生より出せる點に於て同時代の諸儒を凌駕して居るが、矢張り本人の特質を個人的に發揮せしめたからだと思ふ、此理を推して言へば、教育機關も亦同一の理由で、組織的諸科を並置して互に廣く知識を交換せしむる便に於てはユニヴアシチーシステムならんも、特質を發揮せしむるの長はアカデミーシステムに存するであらう、商業教育の如きは其性質上後者に屬す可き一つである、今日の教育が高き教育を生徒に授け、餘りに永き年月を學校に消せしむるのは不得策であるとの説もあるが、此説は重もに實業家の中から出る樣である、此説の中に確かに眞理がある、されど之を以て商業大學を不必要だといふのは一方に偏する議論であつて全體の議論ではない、低度の私立、府縣立の商業學校もある、更に高き高等商業學校もある、高等商業の中に專攻科を置く最高等商業學校もある、今日は、多くの需要ある低度の學科で年限の短い商業學校は全國に數多あり、實業界の實際の要求に應ずるを得るも、更にその中心たるべき最高等の商業學校が

帝國の内に一つ必要である、現下の形勢無論多くは不必要であるが帝國内に一つあるべきは亦時の要求である、然るに一つも必要なしとするのは議論の要點が現時の問題と其爭點を異にして居るのである、

予は多數の説に徹して考へ之まて新聞に現れた實業家の考を通觀すると、大學必要の考を有するものは第一に澁澤男である、阿部泰藏君の如きも亦此方の論者である、福原有信君も此種の論者の如くに見ゆる、益田孝君、莊田平五郎君、豐川良平君等は、在學年限の長いのは氣力旺盛の時期を學校に費して、實地の經驗を要する商業界の活動の時期が後れるから不利益だといはれるが、予は右の兩說を觀察して共に理由のある事を信ずる、故に多數の商科大學を要すといふなら無論予はその必要を見ぬが、帝國内に唯一商業教育の中心たるべきもの、即ち商科大學を建てることは刻下無用とは言ひ得ない、商業も規模を擴張して國家的となり又科學的となりし今日、その程度は工科農科の大學知識を要すると同一の形勢と思ふ、例へば南滿鐵道の理事の如き、之を總括すべき人物は天才を要するとは雖も、亦知識の國際的なるを要する、その他保險科の如き、運輸交通科の如き、皆科學的知識を必要とする、此點に於て普通商業教育の知識より以上のものが要求される、

けれども商業は學究的では無く實行的である、故に專攻科以上、即ち大學教育ともなつたならば、一面に教授の指導を受けて學問の修養を爲すと同時に一面に廣く連絡を附けて、保險會社に出入し、銀行に赴き、稅關に赴き、或は海陸の運輸會社に赴き實地の練習をなすとが必要であらう、研學と實地を併することと此の如くば、徒らに長き年月を學校内に費すとの非難は無くなるであろう、それに高等商業學校の教授、中等商業學校の校長の如きも亦中央の商科大學で養成する事が必要であるし、領事の如き政治的に商業の事務を執るものも廣き商業の知識を持たなければならぬ、特に我日本の事情から見ると、更に近き將來に於て必要なのは移民事業であるが、これ又商業と共に實業的知

識を有する人物を要する、此等は恰も工業に大學を要し、農業に大學を要すると同樣商業にも亦大學を要する理由ではないか、年限短くして實地の練習を有せしめたしとせば、その希望は現在の程度の低い商業學校て充たされるのだが、現在の擴大されたる商業、專門の科學的商業に對しては、日本に只一つの大學は如何あつても必要である、此點に於ては予は此の觀察の誤らぬを信ずる、阿部泰藏君が商大の必要を感ずるのは、その事務とする所が保險であるからであらう、保險の科學的なる事は疑ふべからざる事で、今や保險業の國際的に發達を見るに及んでは益々その知識の必要が分る、商業が國家的科學的となりし今日、保險家のオーソリチーたる阿部泰藏君から此說を耳にするのは、蓋し實驗から得られたる知識であらうとの感を抱かしむる。

予の聞く所によるに益田君は、澁澤男の如く、阿部君の如く、商科大學の主張者では無いけれども、兎に角商科大學を置くとの一般論旣に決したる上は、三十年の歷史を有する高等商業學校を基礎とするが當然であると、是が益田君の主張である相だ、然らば益田商議員も亦文部省の此度の遣方に就いて反對である事は明白である、故に大まかの分類法に於ては、澁澤男も益田君も阿部君も予等と同一の論と見るべきである、更に今回大學法科中に商科を置くの不可なるは、年限の延びる點、高等商業學校出身の學生と、高等學校出身の學生とを商科大學內に入れて同列に教授する不便の點である、莊田豐川益田三君等の意見によれば、學校內に長年月を費さしむるのは商業界に不利益だといふが、今日の法科大學に於ける商科の年限は四年であるから、從來の高等商業學校の專攻科二年に比べれば二年の增加である、すれば文部者の遣方は三君等の主張とも正反對である、更に大なる不利益である、主義に於ては澁澤男阿部君等と益田、莊田、豐川三君等とは相違して居るが、法科大學中に四年課程の商科設置に就いては、共に與に反對の說であることは、此に於て明白である、文部は實業界の代表者と見らるべき如上の

人々の議論を一切無視して素意を遂げんとするが、此の如くばその卒業生を果して何れの方面の需要に應ぜしめんとするか、此處に至つては遂に沒常識の方針と言はねばならぬ、文部省は口癖に教育制度の統一といふも實は名儀上の形式的統一にして其事實を解剖するに何のタワイもないとてある農科大學がユニヴァーシチー組織の一部となりて組織的統一の範圍內に包合せらるゝも其實は唯大學總長の下に立つといふ名のあるのみにて依然單獨の特質を保ちて居る福岡醫科大學分科の如きも同様てある更に陸海軍大學の如きは其尤顯著なる者にして是は名も實も共に單獨別立の大學てあるては無いか商科大學の如きは其單獨を便利とする點に於て大に陸海軍大學に類する所がある其實地の修練を重ずる點に於て其活動を主とする點に於て殆ど同一てある商科の中に銀行保險交通運輸諸分科の存するは陸軍大學の中に步騎砲工築城諸科の在るが如く海軍大學に航海砲術水雷諸科の在るが如くにして皆學究的講書よりも實際的研究修練を必要とする陸海軍大學の學生は士官學校に於て諸科を卒業し尉官の職に就き更に高等の科を學んて參謀官となり將官に昇らんとの志願を懷き學業人格能く其志願に副ふ者を大學に入學せしむるのてある其入學に先だちて二年間尉官として實地演習を爲し陸軍は隊附士官となり海軍は航海を指揮して後に入學するのてあるから其大學生は實地と學問と之を併せ得ることが出來る商科大學も亦制度に於て此の如くなる可き筈てある又今日實業界の先輩が商科大學不必要を說くは單に目前其部下に使用するに適するといふ意味に於て此論を立つるのと又其實際の成功者が自身商業教育を受けずして目醒しき成功を遂げた爲とてあると想ふ、併ながら是れは天才が學問を無用なりといふ論法て制度として一般にいふ可き論理ては無い例を軍事に取るに我國の軍陣に百戰百勝の成功者は源義經武田信玄上杉謙信てあるか此三人の名將[illegible]事的教育を受けたとは無い瑞典のゴスターブアドルフも普漏生のフレデリッキも兵學校に入つたとは無いぶ古今の名將として知られて居る若し此一個の理由を舉

げ來りて軍事に教育を要せぬ陸軍大學無用なりといへば是れは不通の論である、今日は科學的兵術の世となりたるが故に軍事教育が一層必要になつて來た、併ながら其事業の性質が實際的であるから此點に於ては特殊の實際的教育の組織を要するのである、若し現時の成功者が商業教育を受けずして成功せしとの理由を以て商科大學無用論を主張せば現在の高等商業學校すら無用なりと結論せねばならぬ、何故となら現時成功者の多くは高等商業教育すら受けずして成功したればなりと答へ得るのである、故に予は陸海軍大學の例を推して商科大學無用論に同意せぬと同時に其實地練習を重ず可しを結論するのである、

五、新制度に於ける幾多の難點

現在大學の費用は多く學生を收容するを許さぬ、大學それ自身の要求ては更に規模を擴張して年々卒業する高等學校の學生を受け入れたいのだが、遺憾ながら費用の點から制限せられて、合格と見るべき卒業生の多くを落第させ惜む可き青年の多くを中道に失望させて居る、之は、大學に於ても遺憾であらうが吾人にも最も痛心すべきことである、何とか大學の門戸を開いて此の失望者を少くしたいのは一般有識者の希望である、又同學生の素願である、今回法科大學内の商科に高等商業の卒業生五十名を入れるといふが、五十名の生徒を今他から入るゝ餘地があるならば、それだけ高等學校出身の卒業生を入れて落第者を減すべきである、之が大學擴張の素志て文部省の當に勉むべきであるのに何事ぞ、强いて五十名の高等商業學校卒業生を入れて敢て高等學校卒業生の入學を減ぜんとはする、此に於て亦我等は殆んど無常識の方針を咎めざるを得ぬ。

更に又教授の上に於て、高等商業學校側の卒業生は之が爲に不便を感ぜぬか如何か、高商の卒業生は既に本科に於て商業教育の專門的素養を受けて居るのである、他の點に於ては高等學校卒業生に讓る所あるも商業教育の素養には優る所がある筈である、之と反對に高等學校の卒業生は商業教育の素養はなけれど他の點

つては高商出身者の學ばぬ所の學科を廣く學んで居る、兩方の學生はその基礎を異にして居るから仕方がない、然るに此兩方の出身者を大學の同科内に養成するに至つては双方の爲に不利益不便甚だ大であらう、例へば簿記の如き商業地理の如き、各國物產の配置の如き、高商卒業生の既に學んだ所で高等學校卒業生の未だ學ばぬ所である、之を大學の本科に於て同列に敎授する時には高商の卒業生は其時間だけ手を明けて待つて居ねばならぬ事となる、又他の學科に於ては高等學校卒業生の學べる所にして商業學校卒業生の及ばぬ所もあるから、敎授の不便、不利益、迷惑之より甚しきはない。

更に一步を進めて大學それ自身の迷惑も察せられる

昨年法科中に經濟科を分置して日淺きに、又前述の不便ある商科を法科内に設くるとなつては、之を敎授させる上に二つの不便があらう、一つは敎授を兼務させて更に錯雜が起らなければよい、今一つは費用の點である、大學に左樣な豫備金ありとは我等の信ぜぬ所、若し有るとするならば之を活用して現在の諸分科を整理擴張する方が大に利益あらうではないか、然るに今商科を設立してそれを流用することは大學の基礎を鞏固にする所以ではない、予の疑問とする所は、文部省はその費用を何處から出すか、若し豫備金を使用するとせば法律の亂用である、豫備金なるものは豫期せざる急な事件に使用すべきも、行政官の隨意に獻立てた事業に使用する事は法律の許さぬ所である、文部省は此九月から新設の商科に使用するとするも議會が後から果して之に承諾を與ふべきであらうか、不得要領の事業に使用するのだから來議會で之を否決することは必然である、文部省は來議會に是非とも之を可決せしめ樣として敢て斯る事をするならば、これ議會を輕蔑した遣方である、可決を豫期して、行政權内の仕事は議會の容喙すべきに非ずなどといふならば、明に議會侮辱であるから大に叱責せなければならぬ、孰れにしても沒常理の仕打である。

六、明に是れ文部の大失策

予は今回の事に就いては八方面の不都合を感ずる、高等商業學校それ自身の迷惑。商議員に對する侮辱。高等教育會に輕蔑、議會に對する妄斷。及び大學それ自身の不便。一として取る所ないのに之を强行せんとするのは文部の一大失策と斷言せねばならぬ、又聞く所によれば大學の教授會に於ても仲々の議論があつた相だ、濱尾總長も此事件は容易に大學の引受くべきでない、高商側の意見も如何と言つたら、文部大臣は高商側には異存はない、それは文部が引受けると言つた相だ、それから又大學の元老ともいふ可き老教授連も文部省で他に異論なしといふならば引受けるも宜からうといふ程の意味で消極的の承諾をしたので、決して喜びはせぬのである、特に高商、高等兩校の卒業生を併せ入るゝに就いては頗る議論があり、教授會では可否相半したとも聞く、それで此際、岡田次官が大に奔走して漸く纒めたのだとも聞く、且つ一方には急遽高等商業學校の專攻部廢止の令を布いたが、まだ商科大學には如何なる課目を置くか、何人が之を擔任するか、今日に於ても不定であるといふ、その不準備、その輕卒、言語道斷と言はざるを得ない。

新聞紙上に云へる所によると、岡野敬二郎博士の如きも今回の文部省の企てには大不同意である、姉崎正治博士の如きもその成効甚だ疑はしいと言つて居る相だ、その他の教授連中にも斯かる意見のものがまだ多かろうと思ふ。何れの方面から見るも今回の事は文部省の一大失策であつて、生徒の動搖するのを弊風などと咎めるが、敢て生徒を動搖せしめたのは何人であるか、予は寧ろ生徒が千餘の人數を歩武整々と纒めた、その意氣と力量とには同情せざるを得ぬ、さればこそ此爭を縱容して善後の策を建つるは同窓會の責任であり、予等同情者の責任であるから、生徒等自身は情願を此等の人に告げ問題の解決を他の責任者に委ねて學業を廢せぬ事にしたい、此有望なる青年、他日實業社會に活動すべき有爲の青年をして、一日も學業を空くせしむるのは痛嘆に堪えぬ、そして有爲なる此青年をして此に至らしめたのは一に罪文部の當局者にある、

昔英國政府が亞米利加殖民地に課税した時、その殖民は之に反抗した、當時英國貴族院の議員で有名なる愛國者、英國の權利擴張者たりしチャタム卿は、此の場合に於て米國殖民地の反抗を餘儀なき自家防衛と認めてそれを辯護したのみならず、語を强めて「予は亞米利加の反抗を歡迎す」といつた、此英國の熱心なる愛國者が英國領土の騷擾を歡迎すとは奇怪の樣だけれど、英國の血を受けし殖民が若し非理の壓抑に盲從する如き事あつては、英の本國も亦他日暴政に屈從すべき兆候である、彼の精英の氣象は英人の誇るべき所であると説明した、予は此度の高等商業學校事件に於て、他日商界に雄飛せんとする敎育ある實業的靑年が、此不道理に就いて屈從しないのは、我商業の大に振ふべき兆候とも見て其不屈の氣象を喜ぶものである、願ふ處は天下の識者有力者の此問題を片時も早く解決し、千三百の學生をして失望に了らしめず、安んじて學業に心を用ひしむる樣にしたきものである。

（五月廿日談話筆記校閲濟）

統監政策の一斑

茜陵隱士

何人にも分つて居らねばならん事て、而かも何人にも分つて居らぬのは統監政治の實情てある。近來諸種の新聞雜誌に、統監政治に關する議論がチョイ〳〵出るやうてあるが、多くは空粗なる批難又は辯護の議論てあつて、事實に基いて詳細に研究したものは未だ見當らぬやうてある。私は數年間、朝鮮の研究に心を潜め、又屢々彼地に渡つて實際の調査をもなし、世人の餘り知らざる事情を知つて居るのてある。依て玆に、韓國の大體の形勢より、鑛業、農業等の各部面に亘つて、其大要を摘み、統監政治に關する二三の評論をして見たいと思ふのてある。

統治の大體方針如何

韓國は我日本の保護國なりといふ。我日本は韓國に宗主權を得たりといふ。保護國及び宗主權の言語上、

名義上の詮議は詮議として、事實についていへば、我日本は韓國を占略したるもの丶如くにも見え、又韓國の獨立を確認して居るもの丶如くにも見える。此二つの相異りたる見解の孰れが正しきのであるか、甚だ曖昧模稜の裏に葬られてゐるのである。私は先づ第一に、動かすべからざる我國是の上に、韓國政治に關する大方針を決定せざるべからざるを信ずるものである。

遠い昔の事は扨措き、日本が韓國に公使館を置いた以來、各方面の失敗の結果、日清戰爭が起り、其後、井上侯の失敗によつて、現總理大臣たる李完用等が親露主義に據りて、親日派の首領たる金宏集内閣の撲滅を見、韓王は三年間も露國公使館の中に逃げ込み、日本は韓國の獨立を認めねばならぬ事になり、韓王に向て、獨立國の王たる資格禮遇を與へたのである。而して韓王は其資格禮遇の下に於て、幾多の陰謀を行ひ、國際間に於て、殆んどあらん限りの紛糾錯綜したる問題を惹き起し。終に日露戰爭なるものが起り、三十八年に於て初めて日韓新協約が成立し、此新協約の結果、矢張り韓王に向て獨立國たる皇帝の禮遇と資格を認めて、而して現今の統監政治を布くといふことになつたのである。

夫れ故に日本が韓國を占領したりといふは、此表面上、名義上の條文と些か衝突するが如き嫌がないではないが、然し、それは國際間の申譯であつて、我國の韓國に對する國是は古より一定不動のもので決して之を變易することを許さぬのである。何故なれば此一定不動の國是は我日本の北防といふ根本の問題の上に築かれたものであるからである。韓國に獨立自衛の實力が充分でない限りは、我國の北防は常に危險の狀態にあるものといはねばならぬ。其危險の狀態を其儘にしておいて、而かも韓人種の事大心を見て居る場合には、日本は據レ險待レ亡より外はない。それで假令如何なる金がか丶らうと、韓國の占略を確實にするにあらざる限りは日本の北防を全うすることが出來ないのである。此事は識者の夙に看破したる所であつて、本莊翁などは明治初年より實に熱心に此の主張を持し、又故

川上大將も之を心掛け、故兒玉大將の如きは非常に苦心焦慮して自ら具體的の成案を作り、滿洲租借期限中に二百萬の日本人が韓國に移住して、一旦緩急ある時は、此等の移住民で以て其後送任務に當る丈けの實力を平常から養つて置かねばならぬと唱へて居つたのである。伊藤統監も素より此事を聞かぬことはあるまいと思ふ。伊藤統監就任の當初私も韓國に行て、韓國全體の土地、殊に河川の流域たる肥沃の土地を視察して、專門家にも質し、且つ高麗朝以來の韓國の沿革歷史を研究して見た所が、韓國には日本人が入つて產業を營む丈けの餘地はあるが、然しそれは日本の內地と比較して、稍々利益が多いといふ丈けであつて、決して充分なる移留民を送るといふことの六つかしいことを確めたのである。而かも內地よりも多少利益があるといふ事にするには、先づ第一に金融機關の設備を完成せねばならぬ、第二に輸送機關を充分に整備せねばならぬ、第三に官廳の介達がアテになるやうにせねばならぬ。此の三目の要素が備はつたならば、日本內地よりもいくらか利益が多いといふ事が分つたので、私は當時其意見を二三の當路者にも質した事がある。處が、其後、統監府の施設する所を見るに、一も余等の期待に添ふものなく、貨幣制度及び金融機關の不しだら、介達規則の濫發、お祭り騷ぎの頻繁、人をして統監政治の大體方針何處にあるかを危ましめて來た。それに、韓國宮廷の陰謀、外國人の干涉等なか〱に止まず、統監府は殆んど誠實なる實際の政治をすることが出來なくなつた。片一方が破るれば其れを繕ろひ、片一方を繕ろへば又片一方が破れて來る。其れも其筈である。日韓新協約より、日韓議定書は僅かに軍事と外交と通信の三つの權能を統監の手に收めた丈けて、內治の實際の權能を握らなかつた。それて統監府が內治の事をやらんとすれば、宮廷が色々の故障を唱へて、到底話が纏まらぬ。それから統監府に反對の連中もゾロ〱出て來た。何故といへば各方面からの請願書の如きものは統監府に停滯して一向に埒が明かぬ。公使館時代には韓人に賄賂さへやれば銀山ても開墾てもドシ〱出

來た。而も其賄賂は、やる當人にも損のならぬ樣に出來た者であつた。然るに統監府になつてからは、なか〳〵さう手取早く行かぬ。一日普通五圓位の宿料をかけて三四月も半年も滯在し其許可を待たねばならぬのがある。それに統監府の官吏でも、廉潔なものばかりは居ない。隨分不廉潔なものもある。で公使館時代よりも總ての事業をするのが不便になつた。此等の連中が韓國の不平分子と共に統監府の施政を喜ばぬやうになつて來た。彼の韓王の密使事件及其他いろ〳〵の陰謀が皆此空氣の中から醸出されるのである。で伊藤公も止むを得ず宋秉畯を擧げて其側面より一進會の援助を藉らうとした。一進會のことは後に詳しく話すが、親日黨と稱する大結社であつて、伊藤公は此後援によつて排日派を鎭めやうとしたのであるが、然し宋秉畯ばかりを擧げた處で、多年固滯したる宮中の情弊を如何ともすることが出來なかつた。けれども此宋秉畯を擧げた爲めに韓國部内の事情の一部は伊藤公の頭腦に分つて來たらしい。で少からざる機密費を投げて、一方には當時、キュウ〳〵困つてゐた一進會を助けて、其力を藉らんとし、一方には言論機關に金を入れて、統監府の失敗狀態を内地に紹介されない事に勗めた。臭いものに蓋をするのは伊藤公の慣用手段である。其上、伊藤公の周圍には俗吏が雲の如く多いが、一人も眼の光る奴が居ない。只統監府の政策を褒めて御大將の機嫌を取らうといふやうな朝三暮四の徒で、此位褒めればいくらにならうといふやうな事を考へてる者ばかりだ。然し、其結果で、兎に角一時、統監府の失敗狀態は陰蔽され糊塗されたが、豈圖らんや、韓王の陰謀は益々盛んになり、統監府は何事にも手をつけられぬ始末になつた。此れより先き韓人〇〇〇及び日本人〇〇〇は今の韓王が居る間は如何なる施設も到底駄目である。どうか一つ鐵案を下さなくてはならぬといふ事を、伊藤公にいふたといふ話である。けれども高慢一途の統監は、只之を聞き流して要領を得ずに居つたが、此時になつて伊藤公も愈々窮地に陷り、一進會に近づくに至つた。そして一進會の部分からつひに新王冊立の問題が起つ

たのである。始めの程は伊藤公は之に賛成しなかつたが、けれども最うどうもこうも動きがとれなくなつたので、免れて功を取るといふ統監の窮策の下に終に隆熙改元の大事を決行された。けれども其隆熙改元の大事は摘み喰ひ的にやられた。そして困難なる事はやらずに置いて、容易いやりよい事ばかりをやつた。之れが最も韓國に於ける土匪の蜂起を促し、又一般韓人の敵愾心を起さしむる原因となつた。當時其新王冊立の首張者の意見は先づ韓王をして皇太子に位を讓らせ、そして統監に内外の政務を委任遊ばすやうにとの事が大體の事で、それから朝鮮の軍隊を撤廢しては宜しくあるまい。韓兵はあつても戰鬪力のない兵隊である。けれども戰鬪力のない兵隊でも、一團に固まつてゐれば壘打に打つぶすことは易い、のみならず、隱居しても大王は多少の勢力あり、其勢力は自己の兵力に恃む氣になる。恃む氣になると同時に、形式を好む韓王は、韓王の持て居る儲蓄金を其方に使つて了ふ。又一方に於ては韓國の兵隊は盜賊も同樣である。之を解散せしむれば盜賊を野に放つと同じく碌な事をしない。それだからどうしても兵隊を一團として置いた方がよいのである。又今一つは何とかの名義の下に廢官を收用する處を拵へた方がよい。廢官共も飯を食ふ種がなくなるとよい事をせぬ。それから中央部の政治は韓人と合議では遣り切れぬから日本人直接やつて、地方政治には餘り立ち入らぬやうにした方がよいといふ意見であつた。處が統監は此事を一つも採用しなかつた。軍隊は撤兵させ、日本の官吏をば次官に入れ、そして合議體の政治を開いた。其上毛彫をするやうな机上の規則を喜び、それによつて日本人を地方政治に立ち入らしめた。其結果は新王が立て以來の土匪の猖獗となり、人命を取り、田地を荒らし、日本居留民の地方事業等は十年も十五年も懸りてやり上げたもの一朝に破壞され統監政治が實際一向に進歩せぬといふ形になつた。

恰度昨年伊藤公が歸られて、外國の干渉もあるから、止むを得ず朝鮮の内事に干渉せねばならぬといふやうな事を話された事を新聞に見たが、外國の事といへば直

の事でも心臓を鼓動せしむる伊藤公にとつては外國の事を氣にすることは無理のない事として、地方官に日本人を入れる必要は何處にあるのであるか。今假りに韓國の警察事務を日本人にてやると見たらばどうかといふに、日本の内地では、警察員の數が、都市に於ては八百人について一人、田舍では千人について一人の比例になる。之を韓國に持て行くと、韓國の人口を約千五百萬と見て、一萬五千人の警察員が入用である。一萬五千人に對して一人三十圓づゝの月給をやるとすれば、月に四十五萬圓、一年五百四十萬圓を要するとになる。統一のある日本の制にしても左樣であるから不統一なる韓國では警察員の數をもつと要するかも知れない。假りに日本の率に依るも二千萬圓ばかりの歳入の韓國に於て其の四分一强を警察事務のみに使ふといふ事になる。それに建設費も機密費も入る。到底やりきれる事でない。

又韓國に於て新たに法律を作つて裁判を開く。之れは結構な事には相違ない。韓民は固より之れまで虐政に困しんで居る。是れは金持を困しめて牢に入れて、それから金を取るといふ風になつて居る。之れを救濟するといふ大方針はよいには相違ない。然し之にも莫大なる費用が要る。費用が入るのみならず、又實際行はれない。何故かなれば、第一訴の大部は土地について起る。然るに其土地には臺帳がない。臺帳のない土地に境界爭が起つても裁判の仕樣がない。假令しても實際の調査や何かで非常の費用と時日が入る。それに韓人は訴を好む人種である。韓史を案ずるに肅宗の時に按察史をして地方に訴函を掛けしめて訴を聞いたといふ事があるが、之れは歴史の飾であらうと思ふ。是は一地方の函に五百の訴狀があつたと云ふが、當時の經濟史の上から見て、其訴數を量り、而して之を當時の官制に照合するに、其れを裁判する丈の人員も費用もないのである。これは恐らく、訴の多いと少い土地と調べて、郡吏府吏の治績と人民の順否を判する材料にしたものであらう。それで今文明式の裁判を開いたなら訴訟が非常に多くなる、それをどこ〳〵までもやるとい

ふ事は之れは到底行はれない事である。

又今内地に日本の居留民を送るといふ事にした所が今日のやうな有様では全く財産を捨てに行くやうなものである。一部落に購買組合を作つて一船を分配するといふ方法でも取れば米も内地より安いから暮らし易いだらうが、開港場から二割も三割も手數料をとられ、其れを不完全な輸送機關で送るのであるから非常に高いものになる。經濟上から見た統監府は全くなつてゐない。又政治は必ず人民の生活を安全確實にするといふ事が根本であらねばならぬのに、今の統監府の令達は不完全、不確實である。例へば礦山規則を見るに、之れは日本内地も同樣て、礦税も許可の方式も皆日本内地の直譯である。金融機關も不備、輸送機關も不備、而して日本から連れて行く勞働者の賃銀は二倍乃至三倍もする韓國に於てはどうしても算盤を持てるものでない、其れて韓國の礦山を開發しやうなどと思つてるのは實に笑ふべきてある。又開墾の許可と同時に一町歩、年五十錢の税を取る。日本内地では二十年か長きは四十年を鍬下年限として免税期間として居る。故に此點は日本よりも更らに苛酷である。又其規則中には、之を取上げるのも罷めさせるのも韓國大臣の權能にあるとしてある。夫れ故に統監府の認諾の下にボツ／＼仕事をする人は一日も安全な考をして居られぬ譯である。

斯く見來れば、現在に於ける統監政治の大方針は一も確立する所なくして、只其時其時の勢に制せられて彌縫糊塗して居るに過ぎないものといはれても多く辯ずるの辭なきを恐れる。余は國家百年の大計よりして一日も早くかゝる狀態を脫して、眞に動かすべからざる韓國統治政策の大方針を確立し、之に向て驀進直往せんことを希望する次第である。

韓國の鑛業

公使館時代から以來、韓國の鑛山權を有したるものが日本人にも澤山あつたし、又白人にもあつた。北濃地方で已に佛人米人の經營にかゝる盛んな鑛山もありた。處が統監府が出來てから、日本の鑛山規則の翻譯

見たやうなものが發布され、之に從て、日本人從來の所有に係る鑛山權を認むるか又は新たに許可するかといふので一時は非常に矢釜しかつた。何故といふに公使館時代の許可が結局不確實であるといふ名義の下に澤山に沒收された。そして白人にはオッとられたものは一人もない。且つ宋秉畯が農商工部大臣になつて以來、韓王の私有財産を經理して、從來韓王の私有財産と認められて居た鑛山の如きものは大體韓國政府の財産に籍をかへ、王府の財産は大制限を受けた。其結果、日本人が公使館時代から王府によつて借區などして居たものが、殆んど權利が消滅するやうな狀態に陷つたものが澤山あつた。けれども其部分は大抵大鑛山ではなかつた。大鑛山の一なる甲山の銅山の如きは王府の所有中最も有名なるものであつて、白人が二百萬圓位なら引受けるといふたものであるが、さういふ有名な大きな鑛山は、伊藤統監が外人の好意を買はんとする政策の下に、或事の交換問題に大抵白人に許可したのである。そこで、此鑛山を交通の關係より考へて見なければならぬ。平壤から元山に至るまで、韓國の鑛物の淵叢たる北韓を東西に限つた一線内の大鑛山は悉く外人の手に收めらるゝに至つた。憶ふに後來韓國に起る軍事上と經濟上の問題が共に完全なる交通機關を要するは勿論だから若し、我國が之れを軍事上で開いて見れば外人が之を經濟上で利用するといふ結果を見はしないかと思ふ。且つ其外國人なるものは宗教の力を借り、宗教の信者を鑛山の役夫にして何千人といふ鑛夫團體を自己の權域内に作つて居る。之れ外人の手段である。此節は此有力なる團體に附屬する小團體が點々其近處に出來る。そこで排日派の連中は白人種に便りて宗教團體に入つて行くから此部分の一線は、之をどうかせざる限りは統監政治の下に安穩に化せらるゝ人民でないと見て置かねばならぬ。それから鑛山の處分に關することも亦免るべからざる數である。けれども統監府は止むを得ぬ爲めに、こんなことをしたといふ話である。

それから山師などが韓國に入つて、何處にても結構な鑛山がゴロ／＼轉がつて居るやうな事をいひ觸らして、日本の資本主を引張出して金を費はせた。處が或工學博士などの實地に調査した結果によれば、山師などのいひ觸らして居るものは見る影もないつまらぬものだ。いろ／＼な方面に注意をし、干渉もして居る統監が此事については注意も干渉もしない。内地の企業心あるものに莫大の損失をかけて知らん顔をして居る。俗吏のすることだといひ流して了ふ氣かも知れないが、申分のない不都合な話と思ふ。調査した先生達の話によれば見込のあるのは五六の銅山と鐵山を除くの外、皆小さいもので、其他は採掘してもとんと引合相もないといふ事である。一般の實業家が韓國で鑛山業をやらんと思ふならば、餘程注意してかゝらねばならぬと思ふ。

或人がかういふ話をした事がある。韓國で農業を急激に進めて日本の移民をするのは、韓人と爭端を開くの憂があるから、成るべく鑛山を開いて、鑛山に韓人の勞働者を送り込んで、それから百姓の方には日本人を入れた方がよいといふのであつた。議論としては誠に面白い議論である。けれどもそれは開くべき鑛山あり、見込のある礦山あつての上に行はるべきことであつて、實際さういふ鑛山のない韓國であつて見れば議論の根本が間違つて居るといはなければならい。勿論算盤の握れる位のものは全くない譯でもなからうが、鑛山業に向つて、日本から三十萬とか五十萬とかの移植民をすることが出來ない事は斷言するに憚らぬ。且つ前述の如き統監府の政策と、之と伴ふ飜譯的規則の下には、其發達を見ることが頗る困難であるといはねならぬ。

韓國の農業

農業は韓國現在の經濟の原動力である。歳入の大部にもなつて居るし、又韓民の生活の大部にもなつて居る。韓國には農業を措いては殆んど日本の居留民を増加する方法がない。之れは特にいはなくても少しく眼のある人は何人も異論のない所である。けれども之を

歐羅巴式に認むると東洋式に認むるとの別がある。歐羅巴式に認むる人は統監政治の下には決して危險も何もなしと認める。東洋式に認める人は中々統監政策に安心せぬ。けれどもそれは何れも極めて杜撰なる見解と思ふ。私は別に韓國の歷史を根本にして、日本の農民を移す力があると確信する、けれども統監政策のよろしきを得ざる限りは到底駄目である。

先づ韓國の田制の沿革を概觀するに、韓國は新羅以來、籍田法を取つて居つた。籍田法は殷の法を根本においたもので、籍るといふ意味である。即ち國家の田地を藉りて耕作するといふ意味である。日本も推古朝から舊幕時代まで此法を用ひてゐた。税法なども總て夫れから割出してゐたのであるから、韓國田制の起點は誠によろしいのであるが、韓民の風俗性格がよろしからざるので、此田制の下に農業が充分なる發達をせなかつた。韓民には共同心といふものがない。一郡とか一村とかいふ團體が寄て堤防を築くとか、灌漑の便を圖るとか、旱魃を防ぐために植林をするとかいふ事が全くない。木が生えれば小口から切て了ふし、土地が痩せればそれを捨て丶直ちに他の土地に移つて了ふ。一度洪水や風害を蒙れば、一個人の力では到底恢復がつかず、到る處荒廢の地を見る。殊に山林の如きは數箇年間切て切て切り荒らして居るので山といふ山は皆山骨を露はし、眼に靑色を見ず只赭色なる岩石の嵯峨たるを見るのである。て、朝鮮八道を歩いて見ても國庫の支辨で以て堤防灌漑を開いたもの丶外、人民の共同により工事を起したものは一つもない。如何に韓民の共同心に乏しきかゞ想像されるではないか。又土地を愛するといふ觀念が毫もない。其結果が驕惰の心を起す。例へば日本人ならば、此土地には自分が草分から居る、若くは祖先の開いた田地だ、祖父が植えた山林であるといふので、之を愛惜し又死守するの風ある。古來日本人が尺寸の土地を爭うて死守するとふのも、日本の國體の敎化よりも此土地を愛するといふ念が最も多く影響して居るのである。處が韓人は之と正反對である。それで肥沃の土地でも一町歩、一畝

歩若くは半畝歩の田地に小溝を掘つて灌漑させて居る、其個々別々に小溝を掘て居るんだから實に憫れむべきものだ。それで李世桂(今の韓王室の祖)が高麗朝の社稷を簒奪して終に改むることの出來なかつたのは田制である。之は新羅朝高麗朝を經た宿弊其まゝ、國の財源を田地に求めたのである。それで今の李朝でも此田地についての問題が韓國の内治都ての基因をなした。然し前にもいつた通り韓國には田地に臺帳がない。それから各個人の名義の田地の外に隱田といふものがある。之れは一村の中て五百石の租税の村に切り當てたのが普通のもので、隱田は其中にこつそり持て居るのである。そして其持主は地方官吏である。それて土地制の改正をするとなれば、隱田匿田があらはれて、官吏は其生活の源脈を切られる事になる。之が韓國に田地の改正の行はれぬ有力なる原因である。目賀田が財務顧問の時に徴税の改革をして銀納となし各地方の郵便局をして徴收にあたらしめた。處が、非常な不結果を見た。何故かといふに、從來は地方の官吏の家に倉庫があつて其倉庫に貢米を徴收して、其徴收したる米を開港場若くは集散地點に居る商人が買ひに行き、買ひに行く時には必らず木綿、綿、鹽などを持て行つたものだ。それて米を賣つて衣服其他の必要品を買つたのである。處が俄かに銀税の徴收となり、通貨の不平均にして、交通機關の不完全なる韓國にあつては、韓民は米を抱いて米を賣るの方法がなくなり。又元來多食の韓民であるから、持て居る中に米を多く食ひ減らして了ふ、又投賣りをする。そして益々困つて居る處に、必要なる物品は米に代つて入つて來ない樣になり。邊鄙の韓人をして實に憐れむべき狀態に陷れた。そして國庫には三割位の減納を見た。之れは當時の俗吏共の机政治の結果であつて、是は文明國の標準によつて野蠻國を處分した所から出た失態て。其波動の餘を享けて居る今日に於て更に統監府令の頻發中々治蹟が顯はれぬ、一昨年昨年と引續いて韓國の輸出米がなくなつたのは、我國經濟界の當て違ひてあつたが、其實めに釜山、仁川、若くは鎮南浦等の重要なる米の集散

地が寂寞を告げ、従て韓民一般の購買力がなくなつて來、居留日本民も大いに悲境に陥り、統監府のみお祭騒ぎを事とし大官共が得意で居るといふのはどういふ氣心であるか頓と分らない。

新田開築と植林事業

私は韓國の田地を親しく調査した結果、韓國の農業をして盛ならしむるものは只新田法の採用にあるといふことを見出したのである。現今の韓國の田地は我徳川幕府の初期に於ける九州及び山陰道地方の田地の如き状態にある。當時日本は戰國の餘弊を受けて田地荒廢して居つたが、天正年間豊臣氏の政策の下に非常に農業を奬勵し、引續いて徳川時代になつて、各諸侯が其藩治の基礎を立つるに先づ實際の收入を水田に求めた。其結果どんなものが先づ着手されたかといふに、それは新田開築であつた。九州、山陰等の低地は肥沃で十四五年間も肥料が入らぬ。野中兼山や熊澤蕃山なども力を極めて稱道したのは即ち此點に着眼したものである。韓國の荒蕪地なるものを見るに、殆んど皆作り荒らした老瘦地のみで、之を開墾した處で一向に見込がない、處が南韓地方より各川河の流域到る處廣漠たる鹽入地である。此鹽入が山の地を洗ひ落して結構な土壌が沈滯して居る。今之れに堤防を以て海水の侵入を止め、其堤防内に田地を作つたならば、實に多數なる我農業者を移住させらるる。永正以後肥後藩、肥前藩などの富をなした同じ原因を茲にも見出し得るのである、それでどの位の田地が出來るかといふに、約百五十萬圓の資本を入れて七萬四五千人の農民をやると見て。其全面積を探ると、尚綽々餘裕があるのである。然し之れは共同的にやつて、大堤坊を築き、水門を設けなくてはならぬ事だから韓人のみでは到底出來る仕事でない。先づ五十戸、百戸の部落を其處に作つて、學校、社寺の備をなし、日常生活の物品も一船を共同組合の組織にすれば三割乃至四割安に買ふ事が出來る、生活が安くなると同時に土匪の害も免れ非常によいといふ事を當時の役人に話した事がある。然しそれは机上の空論である、慶長元和の話だと冷やかされた

事であつたが、新王冊立以來、各地に土匪が蜂起し、三々五々と點在して居る我居留農民が悉く害を蒙るといふ事になつてから、其役人に逢ふたら、君がいうたやうにしたら、こんなひどい目に逢はなかつたらうというて居つた。然し此法は現今に於て採用しても決して遲くはない。韓國から歸つて來るお役人共は韓國の内地はもう安全である、危險がない、日韓民の調和は十分に成功したと云つて居る。役人のいふ事であるから多分詐であらうといふので、息子も甥も出掛けては大變な損をする。危險は危險として不安全は不安全として實際を誠實に報告して、而して其危險不安全を除却するの方法を研究するより外に、韓國現在の狀態を一變して統監政治の効果を擧ぐる事は出來まいと思ふ。日本居留民の生活を安全にし、韓半島の一角に第二の日本帝國を作る方法は此外に斷じてあるまいと思ふ。

又韓國を開發するについては林業は最も必要である。處が林業は韓人には要求しても出來ない仕事である。何故かといへば韓民は現在、風と水との害に惱んで居る。風と水との害は韓國天災の根本である。之を救ふには朝鮮の各地を青く見えしめる―鬱蒼たる山林を以て蔽はしむるより外に策がないのである。けれども韓民は目前の事より外にせぬ國民であつて、植林の如き長年月を要する事業には全く手を出さぬ。だから之れは政府の事業となし、日本の居留民の一部に於ける防風林を土臺にして之を大きくして行くより外はないと思ふ。

韓國の現狀

再び韓國の大體問題に移て觀察するに、南山の下に堂々たる統監府が出來、其町には何れも日本の名稱を附し、日本の家屋が櫛比して居る。統監府の官吏はキラ〳〵した衣服を着て威風四邊を拂ふの概がある。かゝる狀態を一見すれば誠に結構な事で、統監府の仕事は充分につくしたといつてもよさ相である。又此先生達にやる月給、其他の費用、各地方に於ける駐屯軍の費用、之れが今日現在に於て韓國の開發に滿々費され

つゝあるものと見れば、非常に安全である。然し物の見方はいろ〳〵あるもので、私などから見れば、どうも韓國が日進月歩の有樣にあるとは見えぬ。何故かといへば其の費用に比例する生産の増加、商品の出入の増加等は一向になく、却つて反比例をして行くやうである。又統監府が出來てから、韓民其ものが如何なる程度まで進んで、如何なる程度まで安全になつたかといふに、此れも一向に其驗が見えぬ。土匪が頻りに發する。納税義務は重くなる。物價は騰貴する。生活は日に月に苦しくなる。然し大官共はいふ。我々は汝等韓民の生活の安全を計りつゝあるのである。韓國を開發するのである。日韓民の調和は東洋の平和を永遠に維持する爲めに必要である。よろしく萬歳を唱ふべしといふので大きく萬歳を唱へしめる。そしてそれが役人の職分のやうに心得て居る。地方に行て見ると、日本の大官の出入送迎を地方官から强ひられ、不必要な衣服までも作らせられて泣顔をして居るといふ狀態である。それで韓人の感覺の上には文明といふものはつらいものだといふ觀念しか與へられぬ。元來戰鬪力のない韓國であるからこうしろといふ命令の下には決してイヤとはいはぬ。不平の儘之を遵奉する。けれども之が度重なれば之を列國の國際關係に持掛けて諸種の陰謀を工夫するやうな事は又特得の智惠がある。現に今、露西亞の方に北韓の人民が年々流れて行くが、此等のものが統監府に對する批評を聞くに、實に聞くに忍びぬ惡言を放つ。露西亞に行くやうなものだから其筈だといふ人もあらうが、實に一般韓民が類似の觀念を抱いて居る。又日本人でさへも統監政治を決して有難がつてゐぬ。役人でさへ内實は不平を漏して居る奴がある。何故といへば其の生活の苦しい爲である、彼の役人共も充分の加俸は得て居るが、費用もなか〳〵尠くない。日本の内地ならばフロックコート一枚でよい所が、韓國に行くと、日本服も一通り贅澤なものがなければならず、フロックコートは勿論入る、甚しきに至つては燕尾服も入る。そして宴會〳〵で日も維れ足らぬ。こう困しくなつて來るとお役人と雖も十人が

十人皆廉潔ではない。隨分如何はしい話も此生活難の中から出て來るのである。

又軍隊と警察との確執といふものが、いふにいはれぬ有樣である。從て一般の文官武官とは決して調和しない。例へば土匪の征伐などの時は、弘い部面に向て小人數を働かすのであるから左より追へば右に逼げるといふ有樣で、頓と奔命に憊れる。それで思はしく行かぬ、と文官より捗々しくないとて苦情が出る。軍隊の方では面倒臭いといふので、ドシ／＼やつけるといふ事にすれば不幸を殺すといふ事になる。さうすれば軍隊は亂暴で行かんとて又苦情が起る。昨冬統監が歸られた時、統監も隨行員も、餘程土匪が減つたといつて喜んでゐたやうだが、冬から春にかけて土匪の減るのは當り前である。何故なれば隱れ場がない。草が長く延びて來ると又ボツ／＼殖える。そんな事も御存知なさ相だのはどうしたものか。今の處では土匪の全滅とか屛息とかいふ事はなか／＼六つかしい。況んや產業地の安全などいふ事は當分駄目である。產業地各自に自衞する外はないのである。各自の正當防衞の爲めに武器を持つといふ事は統監府の最も嫌ふ所で、何も彼も統監府に任せて置け、打殺されても任せて置けといふのであるが、任せて置けば安全かといふになか／＼さうではない。居留民の產業の進まない一理由もこゝにある。

韓國には親日派と號する二百萬の會員を有する一進會があつて、何故其樣な事を防ぎ切れぬかを疑ふ者少くはない。一進會も亦統監の保護を受けつゝあることであれば、多少の義務もある。然るに之に當らぬのは一疑問である。然しこれは一進會なるものゝ性質をよく考へて見れば分ることである。

一進會

一進會といふものは、廿八年の金宏集内閣以前からの親日派である。其前身は東學黨である。東學黨は崔時享といふ人が居て、侍天敎といふ事をいひ弘めたのより起つたのである、侍天は天に侍べるの義であつて、

日本の神道一派に似て、木を植ゑて置けば自然に天の化育を受けて、材木となつて家屋や何かを作るによくなる。禾を植ゑて置けば自然に肥え實つて食物となる。天がかく肥らすものを助けなすは侍べるの義であるといふ。基督でも孔子でも老子でも共に此義を離るゝことなき故に三教は一致するといふ學派のものが東學黨を作り、其結果、其行の上にも所謂民族説を出し、日本人と朝鮮とは同じ血を享けたもので、白人とは大いに異るものだ。東洋は東洋で自ら一致せねばならぬものだといふ主義の上から日本に親むやうになつたのである。朝鮮は自營自立が出來ぬから、例の事大主義の習慣上親日主義を鼓吹したものである。金宏集一派の殘黨も其意義が合つて親露派とは反對となり親日派なる一進會を組織したものである。當時崔時亨は邪説を唱へるといふので刑せられ、其後東學黨の亂に李用九は一方の首領で大に戰ひ負傷した。日露戰爭當時韓國の後送任務が非常の困難を極めた時に、一進會が死力を盡して日本に加勢し、北韓軍の爲めに大いに便宜を與へた。然るに日本は其後此會に向て保護も報酬も與へなかつた。それから統監府時代となり統監府も初めは別に之を助けなかつたが、伊藤が困り切つた時に宋秉畯を入れねばならぬ事になり、彼を入れたけれどもが、一人の宋秉畯を入れ、一摑みの金を一時やつた位では二百萬の會員を動かすになか〳〵追付かぬ。それでも保護は保護、錢を呉れるは呉れたのであるから、今少し之を利用するの路はあつたのである。陸軍部内の某子爵の如きは大いに一進會の効を認めて保護を與へんとしたこともあつた。處が伊藤は公平といふ名の下に、金升文事件などに關係した奴共をドン〳〵地方官などに採用する。其一方に日本に盡した事と、官吏とは別問題であるといふので、一進會からは餘り取らぬ。李容九や宋秉畯の二人も、まア餘り矢釜しくいはぬやうと會員を取鎭めて居た傾がある。今度の宋秉畯の辭職は彼は決して快く辭職したのではない。又伊藤統監の宋秉畯を誠り方は、私一個の見る所では、立派な、血もあり、涙もあるといふ切り方ではない。そこで今後

一進會員の向背はどんな風に變化するかは別問題として、一朝事ある時の事は隨分考へなくてならぬと思ふ。私の見る所では遠からず支那に一問題が起るといふ事は免れぬ。滿洲の租借期限滿期までには必らず無事には濟むまいと思ふ。其時に一進會が果して統監府の意のまゝに動くであらうか、自分の地盤も地位も顧みず只親日派なりといふ主義の爲めにのみ動くであらうか、人間は主義主張に拘らず多くの場合に感情で動きたがる。韓人には殊にそれがひどい。其の他の排日派の團體と、排日派の機關新聞、それから白人の宗教關係、これ等は分析して見れば實に劣惡なる分子である。こういふ事をすれば、又言へばいくらになるかといふ事ばかりに眼をつけて居るものが多い。て現在に於ても統監府は成るべく白人の感情を惡るくせぬやうに心掛け、其他の事は等閑府といはるゝ程暢氣な統監府も白人の事といへば戰々兢々として其事に當る。鑛山なぞでも日本人では六つかしいのを白人ならば直ちに許可するこて今では白人の惡い奴は、おれにいくらか寄起せばおれの名義で願つてやるといふやうな風になつて居る。宗教の衣を着て居るに拘らず、宗教關係の白人などは大抵さういふ奴共である。實に厄介至極の事である。

新統監に擬せられつゝある曾根の人物

伊藤統監の大政治家であり、エライ人であり、コワイ人であることは韓人悉く之を知つて居る。三歳の童子までも知つて居る。然しそれと同時に伊藤統監といふ人は歐羅巴のことといへば鼠でも蠅でも恐がる人だといふ事もみんな知つて居る。前述したる如き統監政治の實情、何人か聞て嘆息せざるものあらんや。私はかゝる實情を來せる所以を以て、全く統監府が韓國の歷史、人民及び實際を知らず、又餘りに外人の評判のみを碎て掛けたる事より來れるものと認める。此雜誌の市にあらはるゝ頃には多分發表さるゝてあらうが、今度伊藤が統監を廢めて曾根が其後釜に据るといふ事である。曾根は副統監としてやつた所を見、又曾根には伊藤公の如き宮中の御信任もなく、従て一般の權力もな

きことを思へば、第二の統監として如何なる程度まで仕事をするだらうかといふことも略ぼ想像される。本來曾根といふ人は世間でも知つて居る通り山縣系の一畸才である。けれども此人の頭腦は一局部に發達して一局部には發達せぬのである。曾て品川子がいうた事がある「曾根は馬鹿ではあるが俗物ではない」と、此評が非常に當つて居る。彼が副統監として且つ山縣系の附目付として韓國に行つた以來の事を見ても實に途方もない馬鹿げた事がある。餘りいふと氣の毒だから其二三點を擧げれば、橋本といふ道具屋を助けておかしな事を爲出來かし、又前科者の大垣丈夫などを近つけて之に羽翼をつけてやり、韓人の一政社と意外な結果を見、夫れから太王から毎度騙されて、或時は太王の傀儡になつた時もある。之れは多分李完用の手に乘つたのであらう。李完用は極めて利口な奴で禮節も操守も全く知らん男だ。先年、菱のやうな井上侯をも自由自在に切り廻した奴であるから曾根を掌中に丸め込むなどは平氣の平左である。曾根の馬鹿な事は今の內閣の連中も一通りは知つてゐやうが、それほどとは思うてゐまい。て今度統監にするのも先づ伊藤の顏を立てる爲めで、伊藤の干渉の餘地を與へておくのであらう。曾根よりエライ奴が行けば伊藤の干渉の餘地がなくなるからである。て曾根ならば大抵い丶加減の所でやり損ふだらう位の調子で居るらしい。迷惑なのは日本國民である。日清日露の兩役の戰費、子弟の生命、韓國に注込める費用、是れ果して何の爲めに用ひられたのであるか。私の見る所では現今の統監政策なるものは全く時間も構はず金も構はずといふやり方としか思はれぬ。讀者よ、韓國の問題は單に統監府のみの問題でない。實に日本全體の問題である。私の見たる所を正直に陳述して大方の士の參考に資せんとする所以である。(完)



現在に於ける海外一切の状勢殊に我國と緊密の關係ある歐米諸國等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

新支那を紹介す

青柳篤恒

諸君支那を知る乎、想ふに多く知る所あらざる可し、否、餘りに多く知るを欲せざる可し、究めんとする所、歐の雲、米の山。切つても切れぬ緣にしある支那大陸の事に至りては、多く知るを望むの念すら之れ有らざる可し。

吾同胞も亦全く支那を知らざるに非らず、而かも知る所の者は老ひたる支那のみ、過去の支那のみ、現代支那、覺醒せる支那、新支那に至りては之れを知る者幾んど稀なり、支那の最も明確に吾邦に紹介せられたるは日清戰爭の當時に在り、現代の支那を視ること日清戰爭當時の支那の如く、現代の支那人を以て日清戰爭當時の支那人と同じとなす、亦固より怪しむに足る者なし、近時歐洲には新支那に關する "Awakening of China" 等の新刊書尠からず、吾邦には未だ此種の新著あるを聞かず、孫呉の兵法に言はずや、人を知り己れを知ると、日本新支那を知らず、百弊是より生ぜん。

孝欽顯皇后と德宗景皇帝とは日を隔つる僅に一日にして晏駕せられたり、東洋通の豫言は相去る遠からざりき、是に於て乎、支那是より滅裂せんとの第二の豫言も亦隨つて命中すべく期待せられたり、而かも所謂「氣味の惡るき平和」は來れり、天氣は引繼き快晴なり、氣味惡るしとは支那の新支那たる所以を深く解すること能はざりし吾人不明の責なり、西太后以外に支那大陸の運命を支持すべき一大勢力夙に既に成立ち居りしなり。

袁世凱氏の退引は辭職に非らず、上諭の本文に據るも明らかに免黜なり、外交の局面一變に就ての杞憂は四方に起れり、北京公使團は聯盟して干渉を北京政府

に容れんとせり、吾邦にても氣早やなる人は「政變」など大袈裟なる名詞を附する者ありたり、而かも此一幕は袁氏一人の放逐にて閉され、政治の大局はガタリとも言はず、袁世凱氏以外に北京の政局を支持すべき一大勢力夙に既に成立ち居りしなり。

清國目下の政治問題は立憲準備より急且大なるはなし、宣統八年憲法を發布し國會を召集する迄九箇年間に準備すべき政事年表は昨光緒三十四年八月一日國會開設期限及び憲法大綱、議院法選擧法要領と共に發布して國民に宣誓せられたり、光緒三十四年度卽はち一年目は既に過ぎたり、此第一年目の成績如何は實に九箇年間全部に亘れる立憲準備事業の成敗を観測するの重要の關鍵たり、第一年目に屬する科目九箇條及其成績大略左の如し。

其一　各省の地方議會たる諮議局創設の件　此科目は昨光緒三十四年六月二十四日の上諭を以て諮議局章程十二章六十二條及び諮議局議員選擧章程百十五條を發布せられ、各省共章程到着の日より向ふ一箇年内に開設すべき旨命ぜられたるを以て、近畿各省は清曆本年七月頃には是非共開設せざるべからず、遠隔にして交通不備なる各省に在りては、最も遲き者、章程到着まで三箇月を要すとして、清曆本年九、十月の交迄には全部開設すべき次第なり。

此科目は各省官民の最も熱心に計劃する所にして、各省に於ける組織一ならずといへども、省城に諮議局籌辦處を設け、總辦、協理、參議、書記等の職を置き、布政使、提學使、按察使の三司及び道員等の外、鄕紳間の重望ある者を網羅して議事に參與せしめ、以て全省の開事設務を總理し、所屬各縣には選擧調査事務所を設け、司選科、法制科、文牘科、庶務科等の分科を定め、監督官、司選員、調査員、管理員等の公職を置き、所屬の選擧事務を分掌せしむる等、用意中々に怠りなし、今左に最も遠隔の地に在り開設最も遲かるべく思はるゝ省に就て開設豫定の日割表を掲げ參考とす。

一、所屬附廳州縣へ選擧準備の通告	光緒三十四年十月一日
二、役員の任命	同年同月十日以前
三、初選擧の告示發布	宣統元年正月十日以前
四、選擧人名簿の調製	同年二月廿五日以前
五、選擧人名簿の發表告示	同　年三月末
六、初撰擧執行	同　年五月十五日
七、開票、當選人名及得點數發表告示	同年同月二十一日

八、複選擧執行　同年七月五日
九、開票、當選人名及得點數發表告示　同年同月六日
十、總督巡撫、議員の氏名を資政院及民政部に通告す　同年八月十五日
十一、議員省城に集合　同年同月二十五日
十二、諮議局成立　同年九月一日

京師に近接せる各省は既に選擧を執行せり、選擧に慣れざる國民としては其成績比較的良好なり。

其二　城鎭鄕地方自治章程發布の件　此科目は淸曆昨年十二月二十七日を以て城鎭鄕地方自治章程九章百十二條及び選擧章程六章八十一條發布世られたり、政府は第一年目準備科目に就て國民に食言するの責を負はん事を慮んばかり歳末押詰りて急に之を發布したる者なる可し。

其三　戶口調査章程發布の件　此科目は民政部の立案に因り十一章四十條及び表五件を定め光緒三十四年より第一年目十月以前に各省の戶數を、第五年目の十月以前に各省の口數を夫れ〳〵調査して民政部に報告せしめんことを奏請し、陰曆昨年十二月十日裁可を經て該章程を發布せり。

其四　財政整理章程發布の件　此科目は昨年十二月二十日の上諭を以て度支部、憲政編査館の立案審議せる淸理財政章程三十五條を裁可し之を發布せり、該章程に據り度支部に淸理財政處、各省は淸財政局を新設し、度支部淸理財政處正提調以下の官は既に任命あり、度支部より各省に特派して財政整理監査役に充つべき各省正監理官亦悉く任命せられ既に夫れ〳〵任地に向け出發せり。全國財政整理の方針中

一、各省の官署は宣統二年以後毎年二月内に次年度に屬する歳出入豫算表を調製し、當該省淸理財政局及び總督巡撫を經て、五月中に度支部へ進達すべし
二、中央の各官署も亦右に準ずべし
三、各省豫算の內、地方行政に屬する經費は度支部より總督巡撫に移牒し諮議局の議決に附するを要す
四、中央及各省の歳出入は宣統三年正月元日以降豫算表通り實行す
五、各省の官署は宣統四年より毎年前年度歳出入を決算し同年三月以内に其省の淸理財政局及び總督巡撫を經て六月以内に度支部に進達すべし

六、中央の各官署も亦右に準ずべし
七、中央の各部及び地方各省に於て外債を募集するの已むを得ざる時は度支部の承認を經て外務部と共に上奏裁可を得、度支部の名に於て之を借入れ各部各省に交附す、爾後各部各省は共に獨立して外債を借入るゝを得ず

等は箇條中の最も重要なる者なり。

其五　變通旗制處を設立し八旗の生計を謀り滿漢の融和を圖るの件　此科目に關しては、變通旗制處既に創設せられ、溥倫貝子、載澤公の外、那桐、寶熙、達壽の諸氏該處大臣に任命せられたり。

其六　簡易識字課本編輯の件　此科目は目下學部に於て編輯中に屬し、第二年目の科目として同教科書を頒布すべき豫定なり。

其七　國民必讀課本編輯の件　此科目は目下學部に於て編輯中に屬し、第二年目の科目として同教科書を頒布する豫定なり。

其八　新刑律修正の件　此科目は目下修訂法律館に於て修正中に屬し、修正の上、第二年目の科目として憲政編査館之を查定し、第三年目の科目として之を發布すべき豫定なり。

其九　民法、商法、刑事民事訴訟法等の法典編纂の件　此科目は目下修訂法律館に於て編纂中に屬し、編纂の上、第四年目の科目として憲政編査館之を查定し、第六年目の科目として之を發布すべき豫定なり。

清國立憲準備第一年目各科目成績の良好なる概ね前述の如し、吾人は更に民智の啓發、民力の發展に就て概觀せん、一昨光緒三十三年九、十月の交、江浙の間に起れる蘇杭甬鐵道敷設權回收問題は實に新支那に於ける文明的國民運動の先驅なり、當時國民は政府の英國債一百五十萬磅借入に對し熱烈に反抗し此英債借入契約の破棄を迫りたり、而かも沈着の態度を守りて暴虎馮河の勇を戒しめ、人々踴躍して囊底を敲き、奮つて該鐵道株金の募集に應じ、瞬く間に三千六百萬元を得て英國債一百五十萬磅よりも其金額に於て優に超越せる財源の豐富を示し、以て英債借入の不必要なる所以を具體的に證明せり、爾來民力ひたふるに展び、今や政府は國民の輿望を餘所にしては何事をも爲す能はざるに至れり。曩日本邦に駐劄する考査憲政大臣李家駒氏は大隈伯邸に開ける我早稻田大學在學の清國學生卒業紀念大會に臨席し卒業生に對する訓示に於て言へり、曰く、諸君の多くは卒業後中央政府に入りて樞要

の地位を占め維新の大政に參與し以て青雲の志を展ぶるを以て其理想となすなるべし、而かも余は諸君業成り歸國の後は身を民間に置き、諸君が先進諸文明國に就て學び得たる新知識を發揮傾盡し、以て政治に教育に實業に直接國民の針路を指導することをも併せ思はれんことを切實に希望す、蓋し我清國憲政の實施近きに在り、今後清國の運命は實に國民の負擔に待たざるべからざるを以てなりと、余は清國士大夫と前後二十年の交際に於て始めて此の如き國民的思想の發表を大官の口より聞き、輓近清國民力の發展に就て大隈伯爵高田博士等の諸先輩とも語り合ひて驚喜の念禁する能はざりしなり。現に清國中央及地方の政府には學を外國に成せる新進の秀才樞抽の局に當れる者既に鮮からず、殊に日本出身の青年政治家を最となす、我早稻田大學出身の民政部右參議汪榮寶、民政部郎中陸宗輿、法科大學長林棨、直隸諮議局總辦金邦平、直隸洋務局會辦唐寶鍔、帝國大學出身の警視總監章宗章、度支部主事錢承誌、工科大學長何燏時、日本駐箚公使館一等書記官吳振麟、中央大學出身の外務部右參議曹汝霖、成城學校出身の民政部右丞延鴻諸君の如き其錚々たる者なり、清國の政局は今や漸く此新知識新思想に富める新進の青年政治家事實に於て之を支持し之を操縦せんとするの勢既に成らんとしつゝあり、更に新進の青年にして身を民間に委ね政治に教育に商工業に各方面に於て直接立憲國民の指導者を以て任ずるあらば隣邦の前途寔に樂しく喜ぶべきの限なり、欽すべき哉。

吾人は新支那の政治的方面に就て其梗概を窺ひ得たりと信ず、更に眼を轉して聊か社會風俗の進化變遷に就て觀ん、社會風俗の進化變遷は形式的ならぬ實質的革新の眞相を吾人に紹介するに於て適確なる資料となる者なればなり、外國に遊學中の清國青年が衣冠を變易し辮髮を絶つもの頻々として然るは人の多く知る所なり、然るに近時に至りては官吏にして斬髮の儘再び蓄髮せず其上に支那服を着くる者鮮からず、外國に駐箚するもの丶内には大官にして斬髮し外客に接する時に限り假辮子を着くる者すらあり、守舊主義の人或は眉を蹙むる者あらんも吾人は寧ろ之を歡迎す、蓋し思想上の革新は必らず先づ物質的革命之れが先驅をなさゞるべからざるを以てなり、余は昨秋の北京行に於て彼國無業の遊民の著るしく其數を減じたるを見たり、是れ產業の勃興を吾人に語る者なり、一般支那人間に通用せらるゝ貨幣の、一文二文の錢銅時代既に去りて、

今や一錢二錢の銅貨時代に入れるを見たり、我國の社會進歩し物價騰貴し貨幣の價下落して寛永通寳や天保錢や何時何處ともなく其影を收め此頃は五厘錢すら其數探す程減少せるに似たり、清國の銅貨流行、文錢の驅逐は適切に社會の進歩を吾人に紹介する者なり、余は更に又支那人の生命とも謂つべき毛筆の漸く粗製に流るゝを見たり、毛筆の粗製は鉛筆ペンの流行を意味し、清國の新文明は漸く湖筆徽墨時代より去りて鉛筆ペン時代に推移せんとす、吾黨支那趣味の一なる文字の雄渾優美なるまで次第に滅ぶるなくんば幸なり、开は兎に角、吾人は毛筆の粗製を見て端なく新文明の浸潤漸く深く、新教育の普及意外に敏速なるに驚き且つ喜こべり、算へ來れば清國新社會發展の新現象一にして足らず。

我邦の政治家敎育家實業家の清國視察を爲す者、多くは皆清國の政治組織は如何、敎育制度は如何等、外觀の視察に専らなる者比々皆然り、社會の狀態は如何、風俗の變遷は如何等に至りては之を研究する者幾んと稀なり、是れ地上に打建てられたる建築物のみを仰いで地下に打据へられたる基礎を究めざる者と一般、眞相を得る事頗る難し、歐米の東洋學者亦其最も長ずる所は支那の歷史研究に在り、其最も難しとして研究不十分なるは支那社會の實相、支那人氣質の變遷に在り、吾人新支那を知らんと欲せば、現代の政治、敎育、實業、軍事各部面の研究の外、支那新社會の變遷、新風俗の流行に就て深く留意せざる可らざるなり。(五月二十一日燈下所稿)

海外消息

四月三十日巴理より

無念庵

○謹啓　春の女神が大なる綠の翼をひろげて天地に舞塞がるてふ五月も、明日は愈々其第一日と相成巴理のサッパープスは其風景を一變致し候ウエンター、シーズンに於て一堂の下に掻き集められたる人々も郊外に蒔き散らされて、綠蔭の下に氣を吐き戀を語る事と相成候、出來冬のシーズンに成つた戀は不愉快なる聯想多く、五月に出來た戀は一生樂しき思出を遺すものとか云へば、之からは外交の季節にあらずして、戀の季節に候はんか、呵々、

●波斯の難局　此處等邊の騷動は乍麼成つても構はぬものに候

も、排英感情が愈々昂じて、加ふるに國民黨の勢力が益々加はるとすれば、累を英國より延いて佛國にも及ぼす事と相成るべく、自然雲煙過眼視する譯にも參るまじく候か、さもなくば左したる事も無之かるべく候しかし何れにせよ、近來不穩の報は好ましからず、テーラン來者に依れば、國民黨はタブリッツに包圍せられて糧道を斷たれ、數十の男女將に瀕死の境にありといふ。之れ固より針小棒大の報なるべく、英兵が上陸したりと傳ふるも敢てさしたる事にては無之候。國民黨の勢力が次第に萎縮して行く有樣にては、世界を驚かす程の大騷動起すが如き事は萬一にも無之と見て宜しかるべく候。

●土耳古の大動搖　併しながら土耳古にては然らず、青年土耳古黨と稱する精神的大團體ありて、土國興敗の樞機を掌握し、何時にても土帝の廢位位は極めて無造作に遣つて退けらるゝなり。

▲青年土耳古黨　抑も此青年土耳古なる一團は如何にして起れるかといふに、(本號第二十二年第十一號參照)其名稱は先々帝の苛政を改革し、土國を累卵の危きより救ひ出せし元老黨の一團にあやかりて、彼等、自からが名けたりしものにして土國人中最も新知識を有せる名の如き青年の一團に候、然かも其勢力の根據は土國軍隊内にあるを以て、軍隊を其唯一の後援としつゝあるサルタンは勢ひ其左右する處とならざるを得ざる譯にて候。

▲協同期成委員會　又彼等は其別働隊として「協同進歩期成會」なる者を組織し、彼等の團隊より大多數の委員を出し、内外の政治に參與せしめつゝあり、此程巴爾干問題の折衝に敏腕を揮つて列國の畏憚を博したる老宰相キャミル、パシャーの如き、單に期成委員會多數者の意見に背きて、陸軍大臣を任免したりといふだけにて内閣を顛覆せられたる位なれば、以て如何に彼等が實際政治の方面にまで大威力を振るひつゝあるかを推知し得べく候。

▲青年土耳古黨の勢力　而して彼等は又コーランを其背後に負ひつゝあり、コーランは日本の所謂天子の錦旗なり、之に叛く者は、皇帝と臣民と論なく、悉く逆賊にして、其名の下には廢位、弑殺其欲するまゝなり。兵權を掌握し政治を左右し得る者が、之に加ふるに宗教上の後援あるといふに至つては、天下に恐らく之れ以上の勢力はなかるべし、土國の如き宗教至上主義の國にありて殊に然りと云はざるを得ざるべく候。

▲動亂の起因　今回動亂の起因はキャミル宰相役の内閣員との間に種々なる感情の衝突のあるありしに初まりしと雖も、要するに其主たる原因はサルタンに對する軍隊中の不滿にありと云はざるべからず、今回陸軍異動の導火線は、軍隊中の仲間割れにあるらしく思はれる即ち軍隊中の自由派が期成委員會の專横を憤りたるに起り新に起りし同教協會が之と脈絡を通じたるに於て火の手は俄に燃え上がり、更に種々の行掛より他の方面に物議を起し、騎虎の勢事件は更に大に發展したるものゝ如く見受けられ候。

▲動亂の經過　四月十三日司法大臣は、期成委員に味方せりとて突然罷

害せられ、海軍大臣夾て殺害せられんとせしが、辛うじて之を免かれ得たり、彼等は十三日拂曉二個大隊を以て議院を圍み、下院議長の免職を要求し、更に內閣の總辭職と及びエドヘム、パシヤアをして內閣を組織せしむべき事とを迫りたり。土帝は一も二もなく暴動派の要求を是認し、內閣は其日の中に總辭職となり、テウフキク、パシヤアを宰相に、エドヘム、パシヤアを陸相とせる、彼等の希望通りの新內閣は組織せられ首府は一と先づ靜穩に復し候。

▲然るに、サロニカにある軍隊中の青年土耳古黨員（進步期成委員會派たる）等は之を見て甚だ快からず、新內閣を否認し、アドリアノープルの軍團と相應じて、首府を攻圍せん態度に出でたり、多數の人民は、之に味方し僧侶も之に加はりて、前に倍する不穩の狀態となりたり。　皇帝は彼等が皇帝及び新內閣員が憲法政治に誠實ならざるを怒りて此擧に出でたるものと見て取り、直にセラミックの會場に行幸仰出され、衆人喝采の裡に憲法擁護の宣誓をなしたり。

▲サロニカ軍の前進　されどサロニカ軍は遂に十五十六日を以てサロニカを出發したり。六千の兵を先陣とし、最も完全に訓練せられたる八千の兵を之に續かしめ野戰砲二十四門を揃へて首府コンスタンチノープルの西約三十哩ばかしの地點に野營せり、皇帝は土國の前途を思ひ、憂悶に堪えず、深く後宮に入りて新首相のみを引見し何事か協議しつゝありしが、首相はサロニカの立憲軍が君府を去る十八哩の處にまで押寄せ、各所の兵士等之に應ずるもの多しと聞き、皇帝の憲法擁護に誠實なる事、及び新內閣員等は彼等と平和的協議を試みんため、彼等の到るを待ちつゝありと宣言したり。

▲土帝の廢位　茲に於てか君府攻圍軍司令官チエプケット氏は非立憲新內閣の罪を問ひ、土帝親衛兵の撤去等頗る難問題を持ちかけしが、土帝は早くも其眞意の廢位にある事を知り、再びセラミクの禮拜堂に到つて、憲法擁護の祈願を凝らしたりしも、大勢既に如何ともすべからず、サロニカ軍は皇弟レシヤド、エプエンデ親王と協議したる後、之を擁して愈〻君府進擊を開始し、二十四日午前五時君府の要塞守備兵と戰端を開きたりしが、官兵は各戰線悉く敗亡し、西軍の殺傷算なく、市民の驚愕爲す處を知らず、皇帝は同日午後四時に到り、全くサロニカ軍に降服せられたり。茲に於て皇帝レシヤド親王は市民歡呼の裡に入城し、國民議會又眞土帝廢位、新帝即位の決議文を可決し、之を兩者に通告したり、

▲新帝即位　親王はアルハニヤ義勇兵に護衛せられて、陸軍省に至り、首相、陸軍司令官及び上下兩院議長の最敬禮を以て迎へられ、コーランと立憲政治の擁護を宣誓し、心なる祈禱をせられたり、君府の市民は新帝の即位を歡迎る處の禮拜堂に於て其祈願式を行ひたり。さしもに頑冥不靈なりし土帝アブダルハミッド陛下も、最早此處に至つては如何ともすべからず、悄然として嬪妃十一人を從ひ、サロニカに護送せられ、終生幽閉の身とはなり申し候。

▲以上は土耳古暴動の顛末に候が、以て如何ばかり青年土耳古黨が專横を極め居るか、思ひ半ばに過ぐるものあるべく候。

▲露國海軍論の眞相　一前年平和會議熱の熾なりし頃は、軍備は防止に必要なる程度に於て必要なるも、之が爲め列國々交の協調を來すが如きは不當なりと云ふ議論が多數を制し居たりしが、近年に至り追々列國の之に對する態度も變じ來りて、昨年以來全く無準備、不充實の軍備は自己の平和を害するのみならず、反て列國の平和は協調を來たさしむるものに外ならず、軍備擴張は全く世界平和の特權に最も缺くべからざるものなりといふ意見は、獨逸より出でゝ英國より佛國に及ぼし、列強の主唱者が公然海軍の充實を宣言するに至り候。

▲最近露都發の電報は頻に露國政府の海軍再造新計畫を報じ來り候が、之に關し、佛國非職海軍少將にして最も海軍部内の事に通曉せる某將軍は語つて曰く「之れ露國政府が、獨逸に威壓を加へんとする結果に外ならず、何故に露國は斯くするかといふに、バルカン問題が全然墺國の成功に歸して、周圍のスラヴ族は全く墺國の蹂躪せらるゝに至るべきのみならず、墺國は陸路地中海に出づべき進路を得て東歐の將來聊か杞憂に堪えざるものなきにあらず、且つ一方に於て獨逸は鋭意英國と海軍擴張の競爭をなしつゝあるより、墺國の南下を防止せんには、先づ背後の後援たる獨逸をして不安を感ぜしめざるべからざるを見たるが故なり、最近數箇月に於ける露國の外交は餘りに消極的なりき、あまりに消極的なる外交の反て平和を維持する所因にあらざる事は從來の經驗に徵して明確なり、露國は之を知る、知ると雖も猶事毎に消極的なるは、財政上の不安にあらず、全くは其心の奧底に對馬海峽の悪しき記憶を潛め居るが故なり、換言すれば自國海陸軍の技術、に聊か不安なるあるが故なり、露國が時々海軍擴張を言ひ觸らすも、之に外ならず、露國海軍の再造は近き將來に於ては到底實現せられ得べからず事情及び其他の事實より以上の事實を考ふる時は、吾人又一片の同情なきを得ず云々」と、

▲以上の議論は稍々不穩當の箇所なきにあらずと雖も、然し能く味ふべき言なりと存じ候匆々。



現代人物評論（十七）

大浦兼武論

△大浦兼武論

無名氏

世の中に大浦程誤解された人は少いであらう。一方に於ては大悪黨のやうに買被られ、一方に於ては大有力者のやうに買被られた。けれども彼をよく知て居るものゝ眼から見れば、彼は勤勉精刻なる廉吏といふに過ぎぬのである。一體彼は極く低い處から鰻上りに上つて行つた。征韓論の騒ぎ以前は牛込の警察署に居つた。征韓論て罷めて國に歸り、臺灣の役では義勇軍として出て行き、又元の警視廳へ戻て、十年の役には警視隊として官軍に加つた。そして其時中尉になつた。て其中尉の肩書は今でも九鼎大呂の如くにして持て居る。

彼が今日までに立身した所以が何處にあるかといへば、彼は其位置に於て何時でもインヂスペンサブル、マンになつて居る。何故にインヂスペンサブル、マンであるかと立入つて考へて見れば、彼には學問があるでもなく、活眼があるでもなく、又大手腕といふもの[illegible]があるでもない。けれども彼は勉强家である。職[illegible]忠實である。又目先が見えてなか〳〵氣轉が利く。彼を使ふものは、さういふ點に於て何時でも滿足する。彼は間に合ふ。役に立つ。然し彼が今日までに至つたのはそれ計りではない。今一歩進めていへば彼には頼母しいといふ點がある。上にも頼母しいし、下にも頼

母しい。彼を使ふ人のみならず又使はるゝ人も頼母しいしとて彼を推す。之は彼が人氣あるが爲めか、同情心に富んで居るが爲めか、若くは又非常に温かなるハートを以て自己の周圍に接するが爲めか。恐らくはさういふ意味ではなからう。一言にしていへば責任を重んずるといふ點である。其責任の輪廓は役目丈けの責任にあらずして、役目よりも一層も二層も擴大されたる責任を重んずる。例へば彼を警視總監として使ふ時は、總理大臣が警視總監として彼にエキスペクトする以上の仕事をする。彼を長官として戴くものには、長官として彼にエキスペクトする以上の事を盡して遣る。だから到頭頼母しいといふ事に歸着する。之が彼の今日までに至りたる主もなる理由である。彼の今日あるは異數ではあるが決して不思議ではない。彼の本當の勢力と實力とでやつて來たものと私は信ずる。

以上は主もに彼の美點についていうたのであるが、若し遠慮なく其缺點を擧ぐるならば、彼は著しく無學である。メン、オブ、カルチユアといふ事はちつともない。薩摩の芋掘の少し進化した位のものである。薩摩人には多少文學の素養がある、が彼の男に限つて文學などはテンデ分らない。又字を書くでもない。彼は天下無類の悪筆で、字といふよりは寧ろ埃及のハイログラフヰックに似て、讀めるものでない。又書畫骨董の道樂があるでもなし、園藝養花の趣味を解するでもない。碁は打たず、將棊は差さず。又酒を飲んで女と戯るゝでもない。只刀劍を拈くる位が關の山であらうが、然し其刀劍に對する知識とても極めて幼稚なものであらう。明けても、暮れても政治――政治もハイアー、ステーツマンシツプではなくして彼の所謂政治――である。彼の如きは本當の政治道樂である。過を觀て斯に仁を知るとてもいつてよからう。又一體鹿兒島人はアブノルマルなものだ。西郷人道の如きはアブノルマルの大隊長である。近くは河島醇の如きは種々の新知識を吸收して居るが、矢張りアブノルマルなので、あの才を抱いて空しく北海道長官位で居る。處が、大浦には其鹿兒島人の缺點たるアブノルマルな所はな

い。何處までもノルマルである。些とも調子が抜けてゐない。五分の隙もない。非常に寸尺の伸びた建物ではないが、一通りの造作は整ふて居る。彼は非常なる成功は出來ぬとしても、大なる失敗も亦爲樣としても出來ないやうな性格の男である。

て更らに同僚として、下僚として、若くは長官としての彼はどうかといふに、彼には一つの美點がある。それは前にいふた責任を重んずるといふ點であるが、それを今一層委しく話して見れば、彼は自ら犯さゞるの罪を蒙つて默つて居る事の出來る男である。更らに切にいへば彼は人の身代りの出來る男である。天下の善は皆同僚に歸し、天下の惡は皆自分に歸することの出來る男である。何處の家でも掃溜が必要である。彼は自ら掃溜になることを辭せぬ。又何處の家でも俎板が入用である。彼は自ら俎板たるに甘んずる。又如何なる戰爭に於ても敵の目標になるものが入る。彼は壕場から半身を出して、敵の射擊するに任せる。而して彼は之を同僚に誇りもせず。又强請りもせず。こういふ事をするのは自分の當り前だと心得て居る。さういふ男であるからして、若し彼に百の缺點ありとするも、一所に事をするには缺くべからざる人であることが明瞭であらう。彼が二度までも內閣に入つたといふ事は、彼の智惠を以てでもなく、又術策を以てでもなく、恐らくは今の意味に於てインヴァイトされたのであらう。

兎角政治家はヴァニチーの爲めに事を誤まるものであるが、若し彼に强てヴァニチーありとすれば、ヴァニチーを持たないといふヴァニチーであらう。總ての事にプレテンションを持たぬといふ事を得意として居る。家も高等官の三等か、精一ばいで二等位の處に居り、衣服も木綿、人が來れば恭謙にして諄々として說き、如何なる田夫野人でも慇懃に送迎して、其說を盡さしめる。彼は田舍の郡役所の書記程の見識も張らずに居る。こゝらが彼のヴァニチーかも知れない。然しこういふヴァニチーは大きい程よい。決して世を誤り、事を誤るのヴァニチーでない。桂內閣の遣り手だとか

いふ事を鼻の先にブラ下げるやうな事は毛頭ない。彼に若し今一つの缺點ありとすれば、それは自ら見るの明は甚だ多いが、人を見るの明が多くないといふ事であらう。之は彼が學問があるでもなし、天分が高いでもなし、世故に錬磨して百折撓まずして來た丈けの人であるから止むを得ぬ事であらう。然し彼の周圍に來る者をば兎も角も收容して行く道は知つて居る。時としては玉石混淆の事もあるが、自分がチャンとしてゐるから、其累を受けることは絶えて無いとはいへぬが比較的に少い。若し彼に人を見るの明あり、世界的政局の智識があつたならば、それこそ鬼に金棒であらうが、そこは彼の長所ではない。彼は何處までも闘將である。敵に對しては激しく味方に對しては優しいのは彼の處世の方針である。彼は八方美人ではない。然し彼は自ら好んでアンネセッサリー、エネミイを作るやうな馬鹿ではない。如何なる敵にも恭敬の禮は失はない。又調和すべきものとは調和するの道も知つてゐる。彼を直情徑行の人とするのは誤りである。猪武者と見るのは當らない。智惠で戰ふべき時には智惠で戰ひ、術で戰ふべき時には術で戰ふ事も知つてゐる。然し一視同仁で敵も味方も吞み込むやうな大雅量は彼自らも期待する所でない。彼はさういふ事を以て寧ろ男子の恥づべき事としてゐるであらう。彼は現在の自分の居る處に安んじてゐるに相違ない。總理大臣などにならうとは決して思ふてゐまい。ノー、ザイセルフといふ言葉があるが、彼は最もよく自ら知る男である。(完)

△大浦兼武

三宅雄二郎

大浦氏は兼て民間から注意人物として見られて居たが、漸く昇進して内閣に入り、動もすれば實權を手はんとする樣になつて來た、他の大臣と違ひ、單に首相を助けるとか一省の事務を舉げるとかいふのみではなく、別に自ら地歩を占め活動しやうといふ跡がある、首相を助けたり省務を董督したりすることは別段[illegible]

に富んで居らぬが、幾何か經驗を積んで普通の大臣に劣らぬ方である、けれども之だけでは必ずしも必要の人物とはせぬ、有るも無きも差支は無い、地方官に勢力を及ぼす處は何か便利が有る樣だがそれとて別段言ふ程でない、が一種有力の人物と見られて居る樣である、何かに付け働が現はれるものとせられて居る、又實際どれ丈か現はれたに相違ない、が屬官から上つて大臣となつたといふのみならば特に言ふを要せぬ、詰らぬ話である、

氏の異なる處は黨派心に富み、黨派を以て爭はんとする處にある、政黨とする心得であるか、政黨の何たるを解して居るか、その邊は別として兎に角黨派を作らうとして居る、氏の下に一の黨派が出來て居る、がそれが何處まで成長するかと疑問である、氏には確に一の黨派を率ゆる能力がある、只自分の生計を豐にし、邸宅を宏壯にして滿足し居りはせぬ、人を集むるを好んで居る、識つたものを世話する、その點に於ては面倒を厭はぬ、實に一つの道樂となつて居る、之がその黨派を作り得る所以である、何か餓鬼大將めいた道樂が無くては黨派を作り得るものでない、黨派は紙の上では作れぬ、生れついて之に適して居るものが有る、氏は確にその一人である。

薩摩人は由來多少此道樂心を持つて居つたらしいが、近來次第に金を作るに傾き、それだけ子分といふが如きものも少くなつて來た、大浦氏の頻に客を結ぶのは孰れかといへば珍らしい方だらう、けれどもその道樂心より出でゝ而かも政界に勝敗を決するの具となさうとする黨派が何處まで發展し得るか、今日までの處は所謂鷄鳴狗盜の雄と見做されて居る、同鄕の者が概ね只財を樂み居るに、鷄鳴狗盜を養つて居るなど面白いと云へぬではない、鷄鳴狗盜だとて左樣容易に集められるものでなく、況して中に幾人かそれ以上の者もあれば、一寸感心しても善いが形に現はれたものは即ち大同倶樂部であるとしたならば又餘りに力に乏しと言はねばならぬ。

曩に新政黨の企て有つた時氏が幾分の關係あると考

へられた、併しその企は成らうとして遂に成らなかつた、却て大石犬養二氏の爭となり、大石派の敗北と見做すべき事となつた、此邊大浦氏は如何いふ考を持つて居るか、果して新政黨を起すの意あるか、起すの意あれど出來損ひをしては困るとの點で控へて居るのか、或は政友會員の感情を損ふのが内閣の不利益だとして控へて居るか、若し新政黨を作らうとするならば、何故それ相應の道を踏まぬか、種々の事情もあろうが、既に小なりとも一の黨派を率ゐて居る以上、いつその事成るべく之を大きくする方が宜しくあるまいか、此方に心掛けあるならば何故自ら進んで犬養氏及びその他の一派の領袖連を訪問し胸襟を開いて團結を圖らぬか、犬養氏からして氏を訪問し事を謀るが如きは斷じて爲し得ぬ所である、大浦氏は徒に自ら高く止まつて居る方でなく、官僚の割りに勿體ぶらぬ處があるやうなれば、氏から頑骨の犬養を訪問しては如何がであらう、一回で得されば二三回もする、三顧といふ事をする、それで遂に意志疏通せぬかも知れぬ、併し又するかも知れぬ、他の領袖連に對しても働かする、中には遣り損ふ事もあるであらうが結果は案外見るべきものが有るかも知れぬ、鷄鳴狗盜を養はずばそれ迄だが、既に之を養つたからは一つ雄飛を試みて然べきであるまいか、併し氏には之が出來るか如何か、氏の價格は茲に定まらう。

何にせよ氏は只ものでない樣に考へられて居る、が何處迄伸びるか、今の儘ならば特に見るべきありとも思へぬ、氏は性格に於て一種面白い處がある、多年官吏生活をして何程か性分を枉げられたらうが、只人によつて事を爲さうとはせぬ、自ら大に活動せうといふ念を失つた事がない樣である、けれども今迄の處は少し許り面白いは面白いにしろ、何處となく輪廓が小さい、小さく出來上つて居る、鷄鳴狗盜の輩若くは稍々之に優つたものに過ぎぬ、その儘で内閣の一角に據り、早晩首相と共に辭職し後或る機會を得て更に一二回內閣に入る位が精々であるまいか、畢竟するに平々凡々に終りはすまいか、曾て大臣の名を得て今忘れられた

ものが幾人有るか知れぬ、氏も亦其列に入るのであるまいか、氏は功名を無視する程に達觀し得ようもない、寧ろ功名心の燃立つ方であらう、すれば何故に今一と奮發して黨派の擴大を圖らぬか、それで一つ運試しをするが善いではないか、若しそれを敢てし得ぬとならば、官僚が如何にあるとも、畢竟多く言ふに足らぬ、事は氏の心掛次第である。

△大浦の人物を評す

匿名氏

大浦の人物を談ずるに先つて、循吏と酷吏との別を明かにせねばならぬ。日本でも從來支那式の見方に從つて循吏を大變よいものにして來て居る。が循吏に合格すべき人間の性格は如何なるものかといへば、至て俗で、至て凡庸で、自己といふものはなくして人の說は總て感心して聽く。感心して聽くのは自分に極まつた者がなく、麥藁のやうな頭を持て居るが爲めである。一言にしていへば命維れ從ふといふのが循吏である。酷吏は全く正反對であつて、あどけない子供のやふな處がある。滅法界にいたづらをする。いたづらに乘じて止まぬといふ處がある。一朝此奴が怪いと見れば何處〳〵までも叩きつけるのである。て酷吏は案外正直なものである。よい人である。智者は決して酷吏にはならぬ。

大浦さんの觀察をするについては先づ、當年の巡査警部時代の大浦さんと、縣知事局長時代の大浦さんと、警視總監の大浦さんと、國務大臣の大浦さんと、又微なりと雖も爵を有つてゐるから貴族たる大浦さんと極めて多方面から見なくてはならぬ。巡査警部にも合格し、縣知事局長にも合格し、警視總監にも合格し、大臣にも貴族にも合格し、合せて人物の範を後に垂るなどいふ事は如何なる聖人と雖も困難なる事に相違ない。況んや武德會長たる大浦さんがそれに合格するや否やに至ては極めて面白いもので、あの人の面目躍如

たるものがあらふと思ふ。

それで巡査警部時代は暫らく措き、縣知事局長として大浦さんの遣つた跡を見るに、力が餘り過ぎて居た樣な傾があつた。若い角力取が相手を投げて了つて、自分の餘つた力で、自分も土俵から飛出したといふやうな傾があつた。然し警視總監時代の大浦さんは案外昔の酷吏といつたやふな風があつて若し司馬遷が生きてゐたならば、酷吏傳中のものであつたらふと思ふ。けれとも大浦さんの酷といふ中には血もあり涙もある所がある。それで功を擧げた事も速かにしてよかつた。治績も頗る上つたが、怨を買ふた事もそれに從てひどい。前後二回の國務大臣たる大浦さんを見ると存外見上げたものだ。自ら重鎭の形がある。そして重鎭たるのみならず極めて人を容れ、又人の說を聽く丈けの雅量を持つた人であつた。警視總監時代に酷吏たる人がどうしてこうなつたかと疑はるゝが、然しよく考へて見れば酷吏なればこそ今日のやうになり得たのである。往時の仕事の遣り口にはいくらか宿場女郎のやうな所があるが、大浦さんにはそれがない。又愛嬌がない。極めて端直純一である。そして政客をよく引く。只恨む所は己れに同ずる人は極めてつまらん雜輩をも愛し、之を愛する結果はいろ／＼な事を持て行て頼まれると、斷はり切れぬといふ事になる。此人こそ薩摩の本分を備へた極めて正直な人と思ふ。大浦さんは生れ變つても循吏にはなり切れぬ人である。

武德會長としての大浦さんは極めて眞面目で、昔の劍術遣ひ——今の破れ士族のお爺さんを撫育して之を尊敬して居る。だからよく武德會員の心を收て居る。一言にして大浦さんを評すれば現內閣第一の正直坊と私は認むる。大浦は權謀家だなど人はいふが、大浦さんは權謀のある人ではない。

一寸面白き話を一つ附け足して置くが、世間では「二六」と大浦といふものは猿と犬の樣な間柄だというて居る。然るに鈴木天眼は「二六」の秋山の親友で、其私交は非常に厚いものであるが、其鈴木は大浦に大變推服して居る。のみならず大浦攻擊の張本人たる個斗

甫と鈴木天眼との交際も亦非常に親密なもので、兄弟以上だ。そして大浦と鈴木との間も舊歡を改めずに居る。之れは大浦の人格が正直で血もあり涙もあることを證明する一節だと思ふ。（完）

△大浦兼武男

櫻街山人

○現に存在せる人を捕へて批評するは一寸困難てある、誰でも知る所に阿り、好む所に僻するは異とに人の情として止むを得ぬからてある。

○併し眞面目に批評を試むるなら、最も公平謹嚴に是を是とし、非を非とし、斷じて私情を挾んで曲直を轉倒し、又曲筆舞文して人を庇護する如き事は避けねばならぬ、此の見地よりして吾輩は今の農商務大臣大浦兼武男を批評する、開き直て批評すると謂ふた者の人の眞相は容易く知れる者て無い、是を以て批評と謂はんよりは只吾輩の知れる大浦男は如何なる性格の人か位ひの雜話を書て見る。

○大浦男を惡く謂ふ者は「蝮の兼」など丶毒語する者も有るさうなが、之は餘りに酷だ、男には決して夫程の毒惡の分子は無い、眇たる一邏卒より身を起して遂に今日の地位に上れるには確かに凡人に卓絶したる性格が無くては到底出來ぬ事て「蝮の兼」など謂れる分子が何處かに抱藏して居たら知事にもなれなかつたてあらう。

○味方として信頼するに足る程の人物なら、敵としては復た非常に怖る可き者に相違ない、男の味方となつて居れば、是れ程信頼し傾倒し得可き人物は一寸見當らぬが、夫と同時に敵となつたら如何に薄氣味が惡いだらうと思はる丶點は確かに有る、「蝮の兼」といふ酷評は恐らく男の敵となつて大に虐められた手合の言かと思はれる。

○其の人に接せずして單に其の名を聽き、又世間の批評を綜合して大浦といふ人物を考へると峻嚴な相貌を爲し、容易に近づく可からざる者と誰でも想像するて

あらう、吾輩も見ぬ前には何だか氣味の惡い陰險な人の樣に想像して居た、然るに逢て見ると是は意外、言葉に多少の薩音を帶びては居るが、始終ニコ〳〵して落ち付き拂て極めて鄭寧に話す處は好個の老爺で、若い時には定めし好男兒であつたらうと思はれる。

○此のニコ〳〵して應對する好個の老爺の肚裡には是で善しと確信した以上は鐵壁をも貫かずんば止まぬといふ怖る可き大勇猛心が伏在して居る、此の大勇猛心が一たび發動すると青天の霹靂となり、一代の耳目を聳動せしむる樣な大活劇を演出する、其の大活劇を知らぬ顏で遠く眺めて例の如く莞爾として居る、之が正しく大浦流じや。

○前の桂内閣の時に『燒打ち事件』といふ千秋拭ふ可からざる大騷動を兆發せしめた張本人は誰れあらう時の遞信大臣なりし大浦兼武氏で有た、當年の日比谷公園附近の光景を追想しても今尚ほ慄然とするが、其張本人たる大浦氏が暴徒の荒れ狂ふて血腥臭き真っ只中を自から馬車を御して平氣で通り拔けて大藏大臣官舍に於る米人某の招待會に臨んだ勇氣は一寸人をして敬服せしめる。

○其の翌朝になると暴徒の一群は公園の彼處此處に昨日來の疲勞で眠て居る、其處等を鳥打ち帽を眉深に被り馬に跨りて悠々として巡視し、馬首を返へして木挽町の遞信大臣官舍に歸る途中とある電柱に『今夜遞信官舍を襲擊せよ』との張り紙がして有る、群集は黑くなつて見て居る處へ馬蹄輕く近寄りて電柱の張紙を見莞爾として從容不迫寬々として官舍に歸りて知らぬ顏をして居た大浦氏の沈勇は話を聽ても面白いてないか。

○近くは農商務大臣となるや、四十五年に開かる可き大博覽會の到底至難なるを見るや、何人にも告げず、斷乎として殆と無期延期とし物論の囂々たるを少しも知らざる者の如く泰然として動ずる色なく、百萬の敵と雖も我れ行くの慨を示したる果斷決行の勇に到ては人をして快感を起さしむるのである。

○是の如く觀察すると大浦男の長所は勇氣に在る、男

着る人は果斷に富む、果斷に富めるは政治家たるに必要なるは謂ふ迄もない、男が常に不言實行を標榜して沈默して駄論を吐かぬ所は確かに政治家たるの資質ありと謂つて善からうと信ずる。

○今の政治を談ずる者は男を目して官僚派の頭目とし、政黨内閣の建設に反對する頑固黨の急先鋒とし、立憲制度の眞義を解する智識なき者の如く、男が他日内閣でも組織する樣な時節が來たら、國民は國家の爲に奴隸視さるゝであらうと評する者も有るが、男が夫れ程に時務に迂拙なる人とは信せぬ、が併し今日の政友會の如き多數黨が横暴を逞しふする事は非常に嫌忌して居る事は確かだ、男の理想は少くとも院内に多くの小黨を分立せしめて互ひに牽掣せしむるを策の得たる者と確信して居るらしい、是は從來各政黨に對する態度に徵しても知られる。

○世間では男が常に多くの黄金を散して士心を收攬するに汲々として居る、之れ男の志しの小ならざる所以であると說く者が有る。成る程志は決して小ならぬであらう、又努めて士に降て人心を收攬するに怠らぬのも事實であらう、只其の黄金を散するといふのは受取れぬ話だ、任俠にして然諾を重んじ部下を愛護する事は尋常でない、故に黄金が有れば無論惜し氣なく散するであらうが、男には散す可き黄金は無い、又原敬氏の古河を金穴とし、西園寺侯の住友を資本主とする如き得意先きも無い、此の點に於ては流石の勇猛漢も心中私かに慨嘆して居るであらう。

○黄金は散せぬが隱然たる潛勢力は實に侮る可からざる者で、後藤新平男の如きが七轉八倒したとて到底脚下にも寄り附けぬ、男が斯く多大の勢力を植附た原因は唯一の親切なるに在る、其の昔し警視總監をして居る時代に若し巡査などが職務で負傷でもすると、暗夜私かに訪ねて自分のポッケットから幾何かの菓子料でも贈て懇篤に見舞ふて遣る、此の骨法が今も倘ほ昔の如くに毫も變はらぬ、是を以て警察方面に奉職して居る者で苟も男を知れる者は殆ど親の如くに尊親して居る、今の龜井總監は後藤男の口入れて有ても內心後藤

男よりは大浦男に畏服して居ると謂ふ噂さの有るのも最も至極と思はれる。

○此處に一寸面白い話が有る、今の農商務次官押川則吉氏が富山縣知事をして居た頃政友會に欵を通したといふので男の爲に馘られて浪人となつた、西園寺内閣の時に原敬氏が押川を熊本縣知事に任した、然るに男は押川の用ふ可きを知て、前に馘た奴を直ちに引上げて、省務一切を委かす次官に任用したので、押川は男の度量に痛く感激して居るといふ事である、大浦流の人心を收攬するに妙なる。實に此處に在る。

○惜むらくは好個の老爺、未だ學ばず、是を以て政治的憤鬪の外に何等の趣味も嗜好も無い、品行方正で酒一滴口にせず、書畫骨董を弄するでもない、強て求むれば刀劍を愛する位の者だ、夫も深く研究して居るのではない、只ピカ／＼する長いヤツを時々ギラリと拔て鍔の附かぬ手入れをする位ひが關の山だ。

○大浦兼武と云ふ名を聽くと如何にも强健の人の樣に思はれるが、其の實極めて蒲柳の質で非常に衛生に注意して居る、いかな日でも朝は必ず五時に起きて冷水磨擦を遣り、夫から村長然とした風をして一里位ひの道を散歩する、鎌倉の別莊にでも行くと朝々暮々、運動するの外に餘念はない、且つ細心で秩序を紊さず、其の上無類の勤勉家で有る、今の大臣中の秘書官で男の秘書官が一番骨が折れると謂ふ事だ、さうであらう。

○斯んな事を書けば幾らでも有るが、此の邊に止めて置く、序でに記して置きたいのは男にも雅號の有る事だ、其の雅號が金竹といふのじや一寸振つてるじやないか、兼武を訓讀すればカネタケだ、則ち金竹の雅號有る所以だ、何處迄も大浦式だ。

△大浦兼武論

田川大吉郎

大浦君を私はよくは知らない。顔を見て親しく話をしたのは今度の議會が初めてゞある。其以前は全く知らなかつた。本年の議會に於ける彼の態度について私

の眼に映じた所をいへば、今度の内閣大臣の中ではよく出來た方と思ふ。平田内相のやうに謹嚴一方でもなし、又た後藤遞相のやうに傲岸にして飄逸を衒ふといふやうな事もなしに、寧ろ其中間を行て臨機宜しきに適ふといふやうな趣があつたと思ふ。後藤君の議會に不評判なりし一つの理由は、自分の所管事務については殆んど細目に至るまで自分で引受けて話したのにある。大浦君は勉めて大きな方面のみをいひ、細かしい點は一切政府委員に讓らうとした。若し議員の中に細かい人があり、條項を立て、計數を調へて大浦君に質問したならば、大浦君は必らず窮したゞらうと思ふ。けれども現在の議員の頭はさう細かくない。寧ろ漠然たるものを喜び迎へるの風がある。だから大浦君の態度は議會の希望に添ふたのである。或點から云へば後藤君の方は議會に親切で、大浦君の方はさうでなかつたかも知れぬけれども、大浦君の態度が今の議會に適した事は疑ない。大體のみをいふのであるから、迫らず、焦らず、落付いて議院の嗜好を窺て其れに投じて行き、驅引自在の趣があつた、それで彼は議院で評判がよかつた。私は其點よりして大浦君は今日の衆議院に對する政治家としては、よき程度の政治家であると思ふ。貴族院に對しては衆議院に於ける如く多數の人を滿足せしめ得るや否やを疑ふ。これが私の今議會に於ける大浦君に對する大體の觀察である。

從來私は大浦君に對して二樣の報告を受取つて居つた。一は極く彼を卑しんで陰險頑迷なる探偵的政治家といふのである此事については各方面から聞いた事が多かつたが、殊に私は「二六」に親しく交際して居る人があるので、其人から「二六」を迫害する非常識的にして苛酷なることを聞き、又當時の「二六」社員の耳に入るあらゆる大浦君の惡評を聞いた。つまり其方面の批評は大浦君を以て陰險姦邪の小人といふのであつた。

今一つ私は彼の幕中の人に知合があつて、さういふ人からも時々大浦君の噂を聞いた。それは、行の正しい、規律の正しい、質素にして其周圍に親切な平和な人物だといふのであつた大浦君の事に就て聞く所斯の

如く相反して居つた。で今年初めて彼を見、彼に接した所を以て考へて見ると、表面の陰險な探偵的政治家であるといふ方面は短月日の間に確かめることは出來なかつたが、內部の平和な規律正しい人だといふ幕中の人の評は私をして頷かしめた。彼は外、嚴なるが如くにもして、而かも近く接すれば、笑ひ崩れんばかりの愛嬌を有することを初對面に知つた。

私の彼についての知る所、議會に於ける彼と、幕中の人を通じての彼と、二六社同人を通じての彼と、此三つの方面しかないのであるが、此三つの材料を綜合して考へて見ると、私は彼を古風の武士の魂を以て今日の政治に適用して見やう、武士的根性を以て今日の政界に處して見やうと考へてゐる人と思ふ。古武士の性格に大變よい處のあるのは勿論であるが、彼等は其古武士たる特權を維持するに骨を折り、百姓町人などを侮り抑へるといふ事になつた。大浦君の政治觀を見るに、警察、軍人、官人―廣くいへば官僚のみが政治の特權を維持すべき階級であつて、其以外の人民、政黨員、有志家などは遙かに階級が違つて、政治に當る資格のないもの丶やうに見る傾がある。彼自ら官僚に對して有する考は決して卑しくはない。昔の武士の百姓町人に對するやうなもので、自ら特權を専有すると共に、其面目を維持せんとして、品行を謹み、自重しなくてはならぬと思ふて居る、少くとも彼自身は、其身を持することを極めて峻嚴である。然されば他に對して官僚を保育するとか出來ぬとして居る。故に私等が先輩政治家の亂雜無秩序なるに向て屢々抱くやうな愁は彼に對しては除く事が出來る。此の點に於て彼は美しい、清い、面白い處がある、けれども彼は今いふやうに或一派の階級の特權を重んじて其面目を維持せんとする偏狹なる人であるから、萬事を淡泊に打明けて國民の多數と政治を議するといふ大度量もなく、又た公明なる識見もない。夫れ丈け彼は今日の時代的精神に通じない。此廿世紀の政治が――立憲政治が、昔の階級的政治と異る所以の精神を理解し又は之と同化する見識と趣味がない。此論點を分り易くする爲めに一

例も藉りていへば、例へば今世紀に處する政治家としては社會主義の何物たるかを解する智惠がなければならぬ。之を實際に行ふべきや否やは別問題であるが、社會主義の起る所以と其社會問題を解釋せんとするの方法を理解するの識見がなければならぬ、少くとも其れが無くば歐羅巴の今日の政治は分らない。例へば獨逸で強制保險をやるとか、英吉利で勞働仲介所を建てやうとか、佛蘭西で、郵便官吏の同盟罷業で辟易して居るとか、各國で、老人、勞働者、病者等の生活を保障せんと努力する運動が盛んなりとかいふ精神はちつとも分らない。大浦君はさういふ外國の狀態に注意する人か否かを知らないが、若し注意するとすれば、大浦君の頭には英佛獨の政治家などはつまらぬ事をするものだと映じやう、多數の愚者に媚びる爲めに無用の力を勞して居るものと思ふであらう、それ位彼は當世の智識、當世の理想精神に遠ざかつてると私は思ふ。內行の德は彼に於て備つて居る。時代の精神を解するの力は彼に於て缺けて居る。立憲政治家の最大特質たる光明と、赤心を國民の腹中に置き國民と共に萬事を計るといふ點は彼に於て毛頭も見出すことが出來ぬ。彼をして今日の歐羅巴にあらしめたならば私はどうしても警視總監以上の人でないと思ふ。彼をして大臣たらしめたるは日本の政治界の幼稚なる爲めであらうと思ふ。けれども日本の政治界を今日以後急に進步させて歐洲のそれに等しき程度にすることは期し難い事である。故に日本の政治界はどうしても當分は立憲政治の名に於て、舊時代の政治の實を行ふことを免れまい表面は萬機公論に決するといふて、內實は少數政治を行ふといふ、半面は明るい處あり、半面は暗い處がある。此場合に於て彼は時代の適者である。

私は今日の日本に政黨といふものはないと思ふ。若し政黨に類する、政黨に庶幾きものありとすれば、それは第一は桂黨と思ふ、第二は星黨と思ふ。世間に政友會といひ、進步黨といひ、或は又新會といふ、政黨的團體はいくつもあるが、其實は同志の間に何等の結合もない。崇拜する人格に對する結合もなく、又主義

政綱の一致より生ずる結合もない。其結果極めて薄弱にして時と場所と人物とによつて、如何樣にも變化する。其間にあつて桂黨と星黨といふものは一種の堅い結合がある。其堅い結合は或人の人格によるか、主義政綱によるか、抑々又利益關係によるか別問題として兎に角一種の堅い結合がある。例へば他の黨派では黨人の身の上の浮沈に關しては更らに顧る處がない。けれども桂黨と星黨とは黨員の身の上を考へる。これは年來の遣り口にして、恩義を感じ合ふことが深い。此意味に於て、此結合は他より毀はすことが出來ぬ。これが此二つのもののみ他の團體よりも結合の鞏固にして、又此二黨派の發達する所以てある。

で、大浦君は外、時代の要求を解せざるも內、自ら持することと嚴正にして、且つ其交る所に親切を盡すといふ美しい性質を有して居る爲めに、今日の位置に達したのてあるが、其上、今日に於ては只一個の黨派ともいふべき桂黨の中心に居るから、彼の位置は私は久しいと思ふ。彼の如きものをして日本の政界に長く雄飛せしむるは日本政界の恥辱てある。然しそれにも拘らず彼は長く雄飛するてあらう。彼を知れる友人、同志の爲めには彼あることを喜ぶ、けれども日本政界の光明なる發達、立憲政治の健全なる發達を希望する私としては彼の有力なる將來を悲む。彼はどうても一部少數者の友てあつて、國民全體の味方てはない。（完）

△大浦農相

早川鐵冶

大浦兼武は極、下級の警察官から出て、昇進して、地方の警部長を勉め、それから警保局主事縣知事警視總監、遞信大臣農商務大臣と次第に經上つたのてある。何も學問があるてはなく、固より海外へ行つて外國の學問をして來たてもないのてある、が役人としては相應の力があり、決して普通以下の方てはない。

けれども此種の人はまだ多い、敢て大浦一人に限つた事ては無い、伊東己代治の如きも亦然りて、彼は少

時長崎の英學校に入つて低い程度の英語を少し學んだ丈、直に官途に入り、後は官歴で今日の聲望までに漕ぎ付けたのだが、而かもその間の勉强で今では英語も讀めれば獨逸語も一通り行く、その他法律學の如きも公法學ならば普通の大學生程にはやれる、といつた風に格別の學歴は無くても力量を備へて居るものがある、大浦の如きも亦た此部類の人である。

知らず〳〵の間に、長き彼の官歴は彼をして行政事務に練達せしめ、役人として心得べきことの限りを一渡り呑み込ましめてしまつて居る、それに彼の綿密なる性質は、如何なる事にも能く注意をし、能く研究する、從つて融通の利く方である、商人としても下らぬ丁稚ではなく、銀行や會社へ入つても御重役位にはなれるのである、况んや行政事務に於てをや、此中に人と爲り此中に老いたのであるから、大學出位のホヤ々々が試驗を受けて一足飛に高等官となつたなどいふ經歴のものに比べれば、大浦の方は如何程上手であるか知れぬ、

大浦は細事に注意する、職務に熱心である、その代に多少偏狹といふ謗は免れまい、然しながら謹嚴己を持して財利を營まんとするの跡なきことは、今の腐敗せる官海に於て甚だ偉とすべきのみならず、又大に他を規箴するに足ると思ふ、位置によつて隨分役人などいふものは私腹を肥すことが出來る、そして遞信省や農商務省は最もやり易い處であらうから、大臣として其任に居りたる大浦が一毫私を抱くなら隨分うまい事もやれるのだ、けれども大浦に曾てその事あるを耳にせぬ、彼の同人中にはそれで金を作り居るものも頗るあるが、彼だけそれをせぬ處は喜ばしい、從つて平素質素を旨とし簡樸を尊んで居る、私宅を見た丈でも直に知れる、彼のそれは何々局長といふものの程にもない。

職務に勤勉に、操行は廉潔に、更に頭腦は冷靜てあるが、只此三要素だけでは、決して彼の今日の位置には行けるものではない、然らば何があるか、彼は如才が無い、人をそらさぬ應對振がある、といつて必ずしもおベッカの領域に入る程のもので無い、これも確に

彼の成功を助ける一つてあらうが、まだまだ此要素のみていかぬ

大浦には随分勇往の意氣があり、奮闘の精神がある、現に彼の若い時の事だ、大阪に兵隊と巡査との葛藤が起り、事態甚だ容易ならぬ眞際中、彼は拔刀して單身猛り狂ふ兩勢の中に躍りこみ取鎮めたといふ話がある、やるとなると随分水火の中をも辭さぬ男てある、此等の諸要素が相依り相助けて彼をして向上せしめたのてある。

けれども大浦は決して大政治家にあらず、世界の政治を達觀してそれよりして自己の意見を立て、内外に折衝して巧に鹽梅するといふ樣な事は、元來が無教育だから出來はせぬ、彼の能は内閣の一員として一部の省務の整理位を立派にするといふ處にある、それが關の山てある、

が大浦は今ても政界の一角に雄視し、宛然として一勢力を爲して居る、それには上來述べ來つた諸要素の外に尙ほ一つの要素を有して居る、彼は善く士を遇するものてある、政客を助けるには思ふ存分にやる、それ故子分は意外に多い、官海の中にもあれば學校出身のものにもある、就中警察出身のものなどは最も多い、即ち彼の下には多數の子分がある、子分の上に擁立されて彼は自ら勢力を爲して居る。

が總括して彼の器を言へば、眞面目に、勤勉に、冷靜に處り周匝に考へて、多數の腐敗せる政界の中に、獨り能く節を保つて腐敗せずに行くだけの男て、其他は學問が無いから望む事は出來ぬ、若し彼に相應な學識ある立派な顧問が有つたら如何か、彼の爲に今はそれが欲しいと思ふ丈てある、ても半面には如何しても規模偏狹の點が伴つて居るから能く大を成す事は如何か

我輩の農商務に居た頃には、大浦は中央官廳に在官の日が多くないから遂に一所に机を並べた事もなかつた、又官を去りし時には、我輩は大隈系統と誤認されて居たが爲に爾來長く相背いて相識るの機が無かつたのてある、それ故細しき處は分らぬ、玆には單に彼の官界に居つた事蹟等からして少しく語つた迄てある。

（談話筆記）

△大浦兼武男

富士見亭主人

大浦男といへば、岡引の隊長て、頗ぶる背の高いキ

びく〳〵した剛のある人と想像されるが、逢て見ると、悠揚とした大黒顔て、締りはあるけれど莞爾〳〵して大に愛嬌のある人物なので、甚だ意外の感に打たれる、単に容貌から判断しても、先づ大臣たる器量は争はれぬ

曾て目白臺の山縣邸で、多くの名士が集會した時、銘々に道樂とする所を言立てたことがある、或は詩とか歌とか、能とか謠とか、碁圍とか、書畫骨董乗馬銃獵とか、種々の嗜好を並べたが、唯だ大浦男丈けは、官吏として事務を視るのが何よりの樂みて、此の以外何の慰みもないと言つたので、一座驚嘆したといふことてある

成程男の趣味は政治以外に無い、嗜好も何も政治の外にない、政治は實に男の生命であるらしい、随つて政治には非常なウイクネスが有て、苦闘惡戰もする、且つ機を視る事が敏て、其の運動の素早いことは、電光石火、目にも留まらぬばかりてある、其の動作も中々端倪し得ぬ所がある、常に好んで機先を制するといふ語を繰返すのを視ても、其の性行の一端が推想される

男には曾て鹿兒島に隠居した老母が有た、東京に迎へて侍養しやうとしても肯はぬ、金を送つても受取らぬ、何かコツ〳〵働いて至極質素に暮して居られる、男は位階が昇つたとか、勳章を戴いたとか、宮中よりの恩賜たとか、芽出度ことのある毎に、母堂へ貢ぐと共の時ばかりは悦んで受納されるが、他は寧ろ末子の某の面倒を見て貰ひたいといつて、一切受付けられぬ、此の末子の某なるものは、男の實弟て法學士だが、男とは正反對の才子肌てはあるが頗ふるの放縦家て、大分高利貸に悩まされ、其の都度男に厄介を掛けるので男も母堂への孝養として嫌な顔もせなんだが、此の某氏今は夫人と共に北米の田舎に在て、ピユーリタン的活動をして居るので、男も、彼れ斯くすると十年早からばといつて居るとか、

男の生活は極めて質素な者て、其屋敷は四百坪とない、曾て隣家の安川繁成氏が大臣ともあらうものが、責めて八百坪位ゐの屋敷がなくてはと、親切に肝煎つたけれど、男は鹿兒島藩ては我々如きものは三百坪以上の屋敷に住ひ得なんだといつて、今の窮屈な處に滿足して居る、農商務大臣として其の官舎に住はぬのも、實は生活の贅澤に流れるのを恐れてのことてあるらしい

併し男は金錢を貯蓄する程に小成に安んずる人でない、随分清廉潔白て、他を賑はすことはあつても、自から奉ずることは貧薄、而して幾んで擔石の貯も持たぬやうてある

男はまた職務を神聖として深く之を重んずる、其の唯一の介息の如き、現在住友銀行で判任的下級であるけれど、中々生帳面に勤めて少しも倦色がない、父君たる男の薫陶の然らしむる所で男の主義も窺はれる

男はまた身を持する謹嚴で、此の一事頗ぶる當世の珍である、伊藤公は勿論、山縣公すら風流情事に富んで居る、今の閣臣中でも、桂侯は伊藤公にも負けぬ位ゐ、小村伯も後藤男も屢々艶名を傳へる、岡部子は其の夫人のお惚けに人を壓する程の通人だから、妓と談笑して凝滞せぬ、齋藤男も勿論である、寺内子は更に申す迄もない、小松原氏とても其の夫人の前生を洗へば文句はない、唯だ大浦男と平田男とは、石部金吉金兜で、今の顯官中では双珍と稱すべきである、先年或る新聞が大浦男と戰つた時、ワザ〳〵京坂迄人を遣つて、古いヿまで探らせたが、何等の情事をも求め得ぬで、却つて古い妾に子供まであるなど、夢のやうなヿを書いて物笑ひと爲つたヿがある、當時男は、余を品行の方面から攻撃しやうとする彼れは實に戰ひを知らぬものだと笑つて居たといふ

男は又自然に他の死心を得べき德を有する、其の警視總監時代には、巡査の職務に斃るゝものある毎に、自から弔い其の私宅に往て、自分のポケットマネーを香奠に贈るを例とするので、斯くと見聞する警察官は感激して男のために死するを辭せぬ程も、今も此の方面に於ける男の勢力は牢乎として拔く可らざるものがあるらしい

男は又能く部下を愛護する、是は山縣系統の特色で桂侯も然りである、殊に男は然りて、時としては牛瘦馬勃敗皷の革まで愛惜する、或は自から累する程のヿがあつても頓着せぬ位ゐだ、今の次官押川氏は、長野縣知事の自由黨に內通したといふので、男の發議で馘られたものだから、頗ぶる男に銜んで居たが、突然次官に擢んでられたので、氏は男の膽玉の何處まで太いか測られぬといつて、酷く感服して居るそうだ、近來はヤクザな人間を近けずに、汎く俊髦を拔かうとして鋭意士を迎へる風が見へる、其の志の小ならぬと共に漸くにして大臣の大なる所以を成すやうになるらしい

以上は唯だウッスリと男の性行の一端を書いたに止まる、其の深酷な批評、イヤ一歩を進めた批評は、之に基いて讀者の自由に下さんヿを望む、余は今日是れ以上に筆を進め得ぬものである、桂侯、後藤男等と齊しく、男は尚ほ多くの未來を有する人物で、其の批評を下すには、未だ聊か早い、唯だ政界一方の雄鎭として、一種の花形人物たるがために、敢て斯う書いた丈である

此廣告により御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

八十大家署名執筆

哲學大辭書

内容見本進呈

西洋哲學、哲學史、論理學、認識論、東洋哲學、東洋倫理學、印度哲學、神道哲學、佛教哲學、基督教、猶太教、心理學、兒童研究、倫理學、宗教學、美學、社會學、法理學、言語學、教育學、生物學、人類學、精神病學、生理學、東西哲學者史傳、其他哲學宗教に關聯する限り一切の方面に亘りて五千有餘の大項さ數万の細目さを密行細字の大判二千五百餘頁の大紙面に收め各項一々英、獨、佛、希臘、羅甸、印度、梵語、巴梨波斯等の原語を付し八十餘名の大家各々其の擔當項目の下に署名して執筆せられたる責任ある大辭書にして搜羅の富有、攷據の精詳、識解の淵博、説明の愼嚴、洵に驚魂して駭魄すべし殊に(一)其の東洋哲學、印度哲學、佛教哲學幷に神道に關する者の如き歐米の如何なる哲學辭書さ雖も竟に本書に及ばざるこさ(二)大約一千の肖像、遺跡、墳墓、其他の精密なる挿畫を以て説明を助けたること(三)殊に第一冊中に挿入せる印相の圖の如き密教の秘奥さして其の傳授は從來單に師弟の間に限られ秘中の秘として如何なる經典にも載せられざりしを特に斯道深解の阿闍梨に就て之を得たる者なるが故に一たび本書を繙へさば直ちに其の妙奥を證るを得べく龍樹南天の鐵塔を開くが如きこと(四)全部完成の上は最も詳密なる内容索引及び英和、獨和、佛和、希臘、羅甸、梵語、巴梨、人名、劃引等の各種大索引を附錄さし縱橫自在の活用を得せしむること等は總ての點に於て完備せる本書の特色中の大特色さして必ず諸君の稱嘆を博すべきを確信す此の明治最高の文獻にして將來數十年間之さ光輝を爭ふ者決して出でざるべき本書は今や極めて暫時の間最低の特價を以て遍く有識の諸君に提供せらる但し同文館は何等の試驗を經ず此の提供を受納せん事を諸君に强うる者に非ず本日直ちに郵劵四錢を送りて先づ詳密美麗なる内容見本を請求せらるべし

第一冊七月十日より御申込順に從ひ送本

特價發賣 最低價 好條件

假製五冊に分ちて發行し全部完成の上は製本實費金二圓を申受けて脊革美裝全二冊に合本

東京神田區表神保町

同文館

振替貯金東京一二三

假製全 五 冊
定價金 二十三圓
特價一時拂十二圓
特價六回拂十五圓
郵税は別に申受く

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達を致し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一金七圓五拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ツ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸臺三ツ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同徑四寸丸　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸　同目方正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品類
金銀時計類同附屬品

商玉寶堂

東京市下谷區池之端仲町二十九番地
（電話下谷特九六五 一二四四）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし

●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり

●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり

●當會社は掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限內ニ死亡セバ）の新法を用ゆ

●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり

●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし

●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角　（電話　七貳貳番）　**京都本店**

東京市京橋區南槇町壹番地　（電話本局五壹八番）　**東京支店**

大阪市東區大川町御靈筋角　（電話東壹貳五參番）　**大阪出張所**

長崎市榎津町六十五番地　（電話　七貳六番）　**長崎出張所**

廣島市紙屋町（秦　忠兵衛方）　（電話　六〇八番）　**廣島出張所**

信用なき店舗及粗惡なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

丸善新着案内

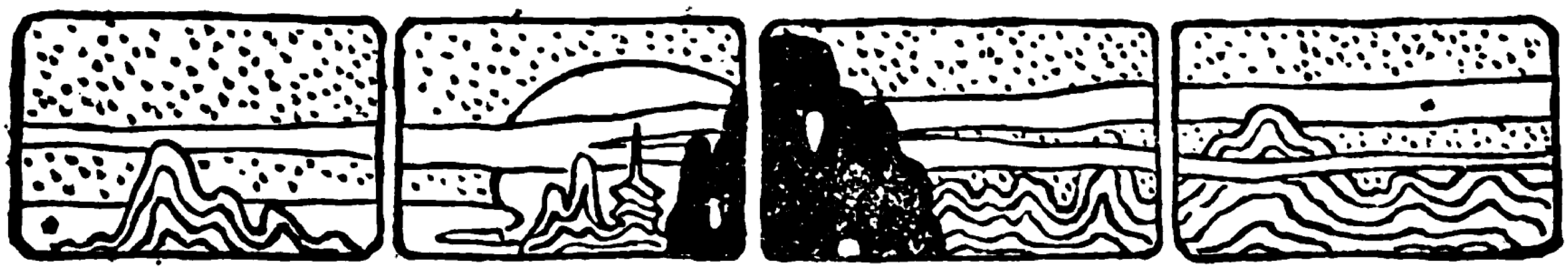
	PRICE Y. S.
Taylor, I. E.—Essays Theosophy	1.35
Roose, P. W.—Death—Life's Birthday	3.00
Ingle, Wm. R.—Personal Idealism and Mysticism	2.00
Davies, R. & C. Hunt.—Stories of the English Artists	4.15
Ireland, A.—The Far Eastern Tropics	4.15
Whipple, W.—The Story Life of Lincoln	3.50
Bazin, R.—"This, My Son."	2.50
The Whole Family	3.00
Hall, G. S.—Aspects of Chils Life	3.[illegible]5
Mackaye, P.—Ode on the Centenary of Abraham Lincoln	1.65
Chandler, W. M.—The Trial of Jesus. 2 Vols	10.00
King, H. C.—The Laws of Friendship Human and Divine	2.65
Salisbury, Wm.—The Career of a Journalist	3.00
Stanford, E.—American Tariff Controversies in the 19th, Century. 2 Vols	11.00
Hichens, H.—Egypt and its Monuments	13.25
Kirkpatrick, E. A.—Fundamentals of Child Study	2.75
Dansen, M. M.—The Business of Life Insurance	3.00
Welpton, W. P.—Principles and Methods of Physical Education and Hygiene	2.25
Godkin, E. L.—Problems of Modern Democracy	4.00
Villari, P.—Studies Historical and Critical	8.25
Harrison, F.—The Meaning of History	2.25
Hertz, G. B.—British Imperialism in the 18. Century	3.25
Holt, E.—The Secret of Popularity	1.50
Launay, L. De.—The World's Gold	3.25
Avebury, L.—Peace and Happiness	3.00
Harrison, F.—Memories and Thoughts. Men-Books-Cities-Art	4.65
Lang, A.—The Maid of France	6.85
Hird, F.—Victoria. The Woman	4.15
Pillsbury, W. B.—Attention	5.75
Crowe, J. A.—A History of Painting Italy. 3 Vols ......Each	11.50
Mwrriam, C. E.—Primary Elections	2.75
Loysen, M.—To Jerusalem Through the Lands of Islam	5.00
Pratt, J. B.—What is Pragmatism?	2.65
MacDonald, R.—Mind, Religion and Health	2.65
Hanscom, E. D.—The Friendly Craft	2.65
Graves, F. P.—A History of Education	2.35
Hoyt, A. S.—The Preacher. His Person, Message and Method	3.25
Meredith, G.—The Novel of	2.75

大阪市心齋橋筋 丸善大阪支店 (振替口座大阪七四番)

東京市日本橋通 丸善株式會社 (振替口座東京第五番)

京都市三條通リ 丸善京都支店 (振替口座大阪一七三番)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



姉の妹

小栗風葉

一

妹のお兼は今年七歳になる女の子を連れて、上野から向島と花見に歩いて、夕方明の點く頃、埃塗れになつて姉の家へ歸つて來た。

姉のお徳は今年加つて二十六と云ふ女盛を、後家で暮らして居る。三年前に死んだ亭主は〇〇署の刑事巡査であつたが、其頃は夫婦して不見目な暮しをして居た。亭主は非番の日にも何か知ら内職を缺かさぬし、お徳も所體を崩してセッセと賃爲事なぞ爲たものだ。所が脚氣衝心でポックリ亭主に死なれて了つて、其當座お徳はガッカリ氣拔けのやうになつた。全七年と云ふもの苦樂を共にした其亭主に先立たれたと思ふと、追憶の涙は留度も無く流れる。儚い遣瀬無い思で胸は一杯だが、何所か又、永い間の重荷をしたやうな暢りした氣持もあつて、何とは無しにホッとした。其中に、何ういふ後盾が

あつたか知らないが、今の商賣を始めて、若い曖昧な女を四五人も食はせたり着せたり爲て居る。自分は毎も瑞々しい銀杏返に結つて、小肥りに肥つた體をチンと長火鉢の前に据ゑたが、夫婦懸向ひの時より色澤も好くなつた。身邊も小ザッパリとして、年よりも若やいで見えた。

妹のお粂が歸ると入違ひに、天神髷の小作りの一番若い女が、此の濕氣に粗い大格子の黄八丈の書生羽織をゾロリと引被けて、薄暗い入口の土間で下駄を搜して居た。

「時間限り貰つて歸るんですよ！今夜は立込むから。」とお德は長火鉢の前で彌喧しく言含めて居た。

コソ〳〵と女の出て行つた後て、始めて妹の方を和こり見遣つて、

「何うだつたね、然ぞ人が出たらうねえ。」

「えゝ、上野は遲かつたけれど、向島は大變な人出よ。二三年東京の花も見なかつたものだから、何だか最う厭として了つて、全て田舍者なの。」と然う言つて、お粂は熱つた頰を兩手で抑へる。

瀧縞の寐恍けたやうな鼠絲織の小袖の擴かつた褄を其まゝ、ペタリと長火鉢の向前に坐つた。消炭色の絹縮の薄片な羽織が肩を滑り懸けて居る。圓髷の鬢が縺れて、後毛が襟首に張着いた。姉と三歳違ひの二十三である。

「お飯は？」とお德が聞く。

「歸りに、淺草の奴を奢つて。」

「然う、それはお馳走だつたね。喜ちやん、面白かつて？」

「えゝ。憊れたわ。」と女の子は正直な事を言ふ。

母親の膝にグッタリ寄懸つて、横坐りに坐つた足の指を弄くりながら、氣怠さうに生欠をして居る。

「湯にでも行つて來たら何うだね、憊れが休まるだらうから。」

「然うねえ……今夜は最う億劫だから。喜代も睡さうだし、直ぐ最う寐させて遣りませうよ。」

其所で、お德は嫗やを呼んで、次の間に親子の寐床を取らせた。子供は横になると直ぐ最うスヤ／＼睡入つた。お兼は子供の脱棄てた着物や帯を一々丁寧に疊んで重ねて、それから自分も羽織を脱いで袖疊にする。

ランプの影に、凝と見て居たお德が言つた。

「兼ちやんの其羽織も、隨分久しい物ねえ。染返したの？」

お兼は默つて頷いて、寂しさうに笑つて見せた。

「税關の方は相變らずなの？」

「去年の暮に二圓だけ上つたの。」

「すると、十八圓になつたんだわね。十八圓で親子三人ぢや、何ぼ兼ちやんが内職をお爲だつて無理ねえ。」

「來年から又、喜代を學校へ行らなきや成らないし、姉さん、全く遣切れないわ。」とお兼は沁々言つて、

「未だまあ、内のが那通りお酒は飮まず煙草を吹はず、お錢の懸らない人だから可いけれど。」
「でも、何時まで那樣ぢや爲やうが無いぢや無いか。喜代の學校も學校だが、其中に又後が出來ないとも限らないし、四人口にでも成つたら何う爲ようと思つて。」
「ですから、子供なんか最う産まないと決めたのよ。姉さん、私本當に姉さんのやうな獨りが羨ましいわ。亭主も子供も何にも要らない。這麽所帶にばかり係けて、何一つ樂しみも無しに生きてるやうなら、寧そ最う尼にでもなつた方が增しだと然う思つてよ。」

二人は其限默つて了つた。長火鉢の鐵瓶がクラ／＼煮立つて、部屋の中は凝とり汗ばむほど暖い。媼やは臺所で居睡をして居るらしく、コトリとも音が爲ない。近くの待合で音緊の弛んだ三味線が聞える。

其所へ、何とか云ふ家から名指して女が聘つて來た。女は皆出拂つて一人も居ない。明が點いて一二時間といふ今が、丁度客の立込む時だ。那方這方から引續き口が聘つて來て、お傳は口の酸くなるほどお氣毒樣を繰返して居た。

「大變な繁昌ねえ。」
「粂ちやん、物は相談だがねえ、」と間を置いてからお傳は、改つて妹の顏を凝と見た、「何うだね、お前今夜だけ手助を爲てお下れて無いか、極内で。濱へ歸る土産代ぐらゐ何でも無いよ。」
「まあ、姉さん！」と取外したやうに大きな聲をしたお粂は、瓜と赤くなつて無理に笑つたが、小聲になつて、「厭ねえ！ 這麽最う皺なんか寄つてる者を捉まへて。」

「いゝえさ、それが好んだよ。故々髷に結ふ女さへ有るんぢや無いか。」

お兼は今日まで思つて居たとは、全て人の違つた怖い姉のやうに思つた。

二

お德は客の身元の分つた、一番種の好さゝうな座敷を妹に向けた。並の抱では無い、少し身寄の者だぐらゐに迎ひの小女に言含めて一緒に行かせた。

店明を避けて、町の片側を伏目になつてお兼は行つたが、先に立つた小女がガラリと格子を開ける音に、ハッとして顔を擧げた。電氣の光が仄となつて、湯氣やら煙やら靄々した狹い中に、多勢忙しさうに立つたり坐つたりして居た。這方へと疊の小女に促されて、蹴込の低い階子段を昇る時、お兼はガタ〳〵脚が顫へた。二階の廊下に並んだ何の部屋も襖になつて、中から皆自分を隙見して居るやうだ。那方でも這方でもポツ〳〵話聲が聲える。と、一方の襖が開いて、お兼は明るい電燈の下に眩しく据ゑられた油でも落したやうに、一座はパット鎭つた。入口に小くなつて坐つたお兼は、自分の俛れた頸に、多勢の目がチカ〳〵刺すやうに集つて居るのを感じた。生際から冷たい汗が流れる。

「姐さんは、何時から那所へ？」と聲の皺嗄れた女中がお兼に問懸けた。

「つい未だ――今日。」と口の中で答へる。

「今日――道理で。」と獨りで合點して、「姐さんの名は？」

「喜代。」と自分の子の名を偶と言つて了つて妙に氣が尤めた。

「喜ちやんか。さあ、最つと這方へお寄り。」と男の和かな聲で言つた。

女中も同じやうに促して、お兼が真似だけ膝を躙らせると、

「さあ、奥さんが揃ひました。皆さん、些と盃を行やらせたら如何ですよ。」

それから、座敷は彈んだ。客は三人、何れも可也な年輩の連中で、自分の外に若い葉出作りの女が二人、と云ふ其以上には、客が甚麽男で、女が甚麽扮振であるか、座敷の引けるまでお兼は知らなかつた。何か恁う明るい晴がましい、身内の黒子一つも隠す事の出來ない大姿見の上にでも、自分一人坐らせられて居るやうで、ジヨ〳〵と脂汗の浸染み出るほど慾かつた。

お兼は姉の家に獨り寐かして來た女の子の事が胸に泛んで、急に席を遁げて歸りたいほどに思つた。それから、横濱の自宅に、男獨りてポツ然と留守をして居る亭主の事を思出すと、頭の中がヒーと冷たくなつた。

皆に強ひられて、お兼は飲めない酒を盃に五つ六つも飲まされた。

三

お兼が歸つたのは十一時過であつた。飲めない酒を飲まされて、苦しく酔つた後の厭な醒心地で、顔の色も蒼い。

長火鉢の前には、彌張お德一人坐つて、小判の取つた帳面に何やら書入れて居た。抱の女は座敷から未だ歸らぬのも有る、歸つて又別の家へ行つたのも有る。家の中はシンとしながらも、明るいランプの

光と鐵瓶の沸りとが、宵の口のやうに賑かに思はしめた。

「何うだつたの？」とお德は和とりして聞いた。

「お冷水を。」と言つて、お兼は蒼い顏を明に背向けながら、水揷の水を湯呑に注いで一口に飮んだ。

「ちよいと、何うだつたの？早かつたのね。」

「姉さん、喜代は？」

「能く睡て居るよ。」

「然う。私お先へ失禮してよ。」と然う言つて、お兼はツイと次の間へ立つた。

お兼は枕元の有明の影に、凝と我子の寐顏を見入つた。柔かな圓々した二の腕をヌイと疊の上へ突出しながら、蝶の羽風のやうな優さしい寐息を立てゝ、スヤ／＼と罪無く睡つて居る。お兼は着物を着更へたが、寐衣に寬いだ自分の肌滑な體を觸ると、身内の居竦むやうな不安を感じた。而して自分の事とも人の事とも付かず、唯激しい嫌惡の情が身の中の血を鉛のやうに澱ませた。酒が醒めてゾクゾクする。

お兼は自分の其の不安な體に、聢り我子を抱き緊めると、涙が獨りでに零れた。

翌朝、お兼は我子に起されて目を覺した。白粉の剝げた、寐不足の蒼い顏をして外から歸つて來る女もある、手廻し好く朝湯へ行つて、それから懸り付けの醫者へ出掛けるのもある。各自に臺所へ入つて、煮朽たつた味噌汁の打注け飯を搔込んでから二階へ寐に行く。其等の女が何れも自分の顏ばかりジロジロ眺めるやうで、お兼は體の竦むやうに覺えた。明るい朝の光に照されて、何にも知らぬ我子にまで顏

を見られるやうな氣がする。

「姉さん、ぢや私、お暇してよ。」と出拔けにお兼は言出した。

「何だね！兼ちやんは。緩くり爲たら可いぢや無いか。一時間懸りや大丈夫歸れるもの、急く事は無いやね。」

「だつて……」

「何が、だつてだらう。朝御飯も食べずに、喜代だつて飢じからうぢや無いか。今朝は御馳走するから、さあ、まあ湯へでも行つてお來てな。」

お徳は石鹼に糠袋、湯札まで添へてお兼に渡した。お兼はグズリ〳〵支度をして、子供を連れて錢湯へ出掛けた。而して間も無く、湯揚りの顔を澤々させながら歸へつて來た。

子供を中に、姉妹は餉臺に向つたが、昨夜の事は何らからも言出さなかつた。

歸際に、お徳は紙に包んだ紙幣を默つてお兼に渡した。お兼も默つて受取つた。

四

お兼が横濱の自宅へ歸つたのは、其日の午少し前であつた。亭主の定造は税關へ出勤して、門は戸になつて居た。

お兼は兩隣へ挨拶して、それから家へ入つて雨戸を開けた。二疊の玄關を合せて三間、其の六疊の一間には寢床が敷散しにしてあつた。色の褪めた夜具の煎餅裏と、グタ〳〵の括枕と、明るい晝の光に曝

立つて汚れが見えた。酸ぱいやうな脂臭いやうな男臭い寐床をお粂は手早く押入へ疊込んだ。四疊半の茶間の長火鉢の横に、虚の飯櫃が持出して、汚れたまゝの箸と茶椀とが貧しげに載かつて居る。臺所の七輪には炭を加いだまゝ熾して無かつた。

午後四時の退勤を可也遲れて、亭主の定造は歸つて來た。毎も見慣れた稅關の制服を着て、ポカリ〳〵と古靴を重さうに引摩りながら、門を開けて土間へ入ると、然もガッカリしたやうにトタリと上框へ腰を落したものだ。毎もの癖て、機嫌よく迎へる意りの我知らず厭な顏をした。

「姉に引留められて、つい私、遲はりまして。」とお粂は言つたが、口の重い定造は唯うんと頷いた限で、

「あゝ腹が空つた、今日は辨當を持たなかつたものだから。」

「お午餉を、それて召上らないの、まあ!。」と呆れて、充らない我慢をしたものだと云つたやうに、定造の靴を脫ぐ後姿を突立つたまゝ見下して居たが、氣が付いて、「ぢや、直ぐ夕御飯に爲ませう。」

お粂は然う言つて臺所へ入つた。

旋て支度出來ると、茶の間に釣ランプを明く點した下て、親子三人、それても睦しさうに夕飯を始た。

「何うだ?喜代、花見は面白かつたか。」と定造が聞く。

お粂は丁度口まて持つて行つた箸を留めて、我子と亭主の顏とをチラと見た。

「怖かつたわ、醉漢が多勢居て。」

「酔漢か？馬鹿だなあ。それぢや花を見ずに酔漢ばかり見たのか。」と獨りで笑つて、今度は女房に、「姉さんの所はお變りは無い？」

「え、何ですか……、相變らず」と曖昧な返事をして、お兼は伏目になつた。頬が赫とする。

定造は晝の疲れと朝が早いのとで、毎も九時を打つと寐床へ入る。お兼は一緒に子供を寐かして置いて、それから長火鉢の前に獨りポツ然と坐つて居た。例の姉から貰つた紙幣の包、晝間着物を着更へる時に、茶簞笥の棚へ載せたまゝ忘れて居たのを思出して、慌てて其れを取つて、暫く遲つて居たが、密と開いて見てゴクリと咽を音させた。中には一圓紙幣が二枚あつた。

「おい、お兼、」と次の間から定造が聲懸けた。

お兼は色を變へて、急いで包を隱した。が、隔ての襖がピッシャリ閉つて居るのに、ホッと安心した。

「好い加減に最う寐ないか、明朝又早いよ。」

「え、……些いと私、湯へ行つて來ますが……」

「湯は最う遲いぢや無いか。」

「でも、僬れて居ますから。本の汗を流すだけ——直ぐ歸つて來ますから。」

今日東京で朝湯に入つたにも拘はらず、お兼は恁う言つて又近所の錢湯へソ、クサ出掛けた。而して一時間の餘も長湯をして、漸と歸つて來ると、亭主も子供も他愛なく睡入つて居た。

お兼は湯から歸つてからも、又長火鉢の前で暫く考込んで居た。

翌朝お兼は案の如く寐過した。几帳面な定造は遅刻を恐れてアタフタ出掛けたが、亭主の留守中、お兼は何にも手に付かぬ風で、お喜代を對手にノッソリして居た。

「喜ちやん、お前東京の伯母さん所へ又行きたか無いの？」

「行きたか無いわ。」

「何故？那麼に旨しい御馳走があつて、家より餘程好いぢや無いか。」

「だつて、阿父ちやんが居ないもの。」

「おや、お前阿父ちやんと待つて居るね、阿母さんは一人で行くよ。」

「厭だ！阿母さん行つちや。」

「おや、阿母さんと一緒に喜ちやんも行つたら可いぢや無いか。」

「ぢや、行くわ。」

親子して一日這麼押問答で暮らしたが、それでも二日目からは、以前通りお兼が内職を始め出した。内職は外國行の絹ハンケチの縁縫である。お兼は可也手に入つた方で、問屋でも並より増賃もして下るのだが、何を云ふも女の手内職。朝から寐際まで、三度の飯拵への外は手を休めずに根を詰めて、れて漸う十錢から十二三錢ぐらゐの手間賃にしか成らぬ。

「あゝあ、厭になつて了ふねえ！」と獨言ちては、時々お兼は縫臺の前にウットリして居る事がある。

「お前、何所か此節惡いのか。」と終に怪しんで、或晩定造が訊ねた。

お兼はハッとして答に詰つたが、

「さあ……何だか何うも……血道かも知れません。」と何氣無げに言つた。

五

此月も最う後四五日と押迫つたが、お兼の内職は一向捗が行かなかつた。月末に問屋から受取る手間賃を略と算つて見ると、一圓を五十錢と出てない。東京へ花見に行つて、其時三日と云ふものを打抜いて遊んだが、それにしても毎月の稼高に比べて半分にも足らない。月の二十八日、定造が稅關から受取つて來た給料の十八圓と合せて、二十圓足らずて此月を越さねばならぬ羽目になつた。

親子三人暮しの儉やかな所帶だから、二十圓有れば月は越される。然し生憎と移更の時候だ。花の梢も何時か靑葉になつて、布子の垢が目に立つ、袷の一枚づゝも工面せねばならなかつた。

其所で、お兼は嘗いぞ是まで金談をした事の無い姉に、今度だけ賴んで見やうと言出した。口數利かぬ定造は、好いとも惡いとも言はなかつた。が、お兼が翌日子供を連れて東京へ行くのを、敢て留めやうとは爲なかつた。

姉のお德は、突然妹の訪ねて來たのを不審がつた。お兼が言惜さうに言出すまで當りが付かなかつたが、其れと聞くと、——和やりとして言つた。

「十圓て可いの?」

「え。」とお兼は勝手の違つたやうな顏をして姉を見た。

「十圓ばかしの事……可いともさ。」と快く頷いた。長煙管を取揚げて一服吸つたが、氣忙しさうにトンと其れを拂いて「時に兼ちやん、先達てのお客ね、那の翌晩も來て、是非又お前さんをと言つて那所の家でも困つたさうだよ、那所ぢや大切なお客なんださうだからね。誰か代りを當合はうと氣を揉んでるんだが、何の女を出して見ても駄目て、二三日前にも那所のお上が家へ來て然う言ふのさ。這方の身寄だと云ふ話だから、何とかして最う一度呼還す法は無いものか。那の女に出て貰へるなら、並の倍の玉を拂つても可いつて——い〻え、全く！兼ちやんも凄いねえ。」

お兼は仄と赤くなつて聞いて居たが、

「姉さん、お舍しなさいよ。私那事を言出されると、身が竦むわ。」

「何うして！内のに濟まなくて？」

「え〻……だつて、子供まであるのに、何ぼ何でも氣耻しいね。」

「何が氣耻しいものかね。是が色戀の沙汰ぢや無しさ、稼なんだもの。私なんか是で二歳三歳も若けりや、自分でも遣るよ。」

「姉さんは子も無いし、おや、遣つたら可いわ。」

「然う、私も兼ちやんぐらゐの容色に生れて來たら、無論遣るとも！」

「あら、厭な姉さん、」とお兼は生娘のやうな態をした。

其日の夕方、飯が濟むとお兼は言つた。

「姉さん、晝間あの、お願ひした事ね――私餘り遲くならない中に歸りたいと思ふんですが……」

「何だね！偶に來て置いて。今夜は泊るのさ。ねえ喜ちやん、喜ちやんは歸るの？今夜活動寫眞へ行くんだつて、媼やと晝間約束したのは歇めなの。」とお德は障子越しに聞いた。

お喜代は次の間で、媼やと二人で筍の皮を剝いて居る。

「歸らないわ、伯母さん、私今夜活動寫眞へ行くの。」

「だわね。」と調子を合せたお德は、妹の方を向いて、「御覧な、折角樂しみにして居るんだから、歸るなんて言はないで。媼やだつて樂しみにして居るんだから、二人を遣つて、お前は湯へでも行つてお來でな、よ。」

結局お兼は、今夜這方に一泊する事になつた。それでも有繋に家の事が氣になるからして、亭主へ宛てゝ端書を出した。それから、媼やに連れさせてお喜代を活動寫眞へ出してやる時、

「喜ちやん、早くお歸りよ、ね。早く歸つてお下れよ。」と小聲で繰返した。

それから、お德に勸められて湯へ行つた。姉にも一緒にとお兼は誘つたが、最う晝の中に行つたし、それに何時口が聘つて來やうも知れぬから、日が暮れてからは家を空けられぬと言ふ。で、お兼は獨りで行つた。

三十分ばかりで歸つて來ると、お德は待ちかねたやうに、自分で濡手拭なぞ受取つて、

「まあ速いと、爰へお坐りな、話があるから。」と長火鉢の向前に座布團を直した。ね、兼ちやんが出掛

けると直ぎだつたの、先達ての家ね、那所のお上が丁度又遣つて來て、那時のお客が今夜も亦來て居るんだつて。何うだね、粂ちやん、今夜始めてのお客ぢや無し、一度でも顔を知てるんだから、何うせ泊つて行くものなら、遊び半分にお喜代の小使でも稼いで見ちや。私、略方受合つて返したよ。」

「あら、本當?」

お德は目で笑つて頷いた。

「困るわねえ。若しかして内のにでも知れると……」

「何知れるものかね、東京と濟とだもの、お前さへ喋らなけりや知れる譯が無いやね。現に今日遊びに來た那人なんか、那れて相應な勤人の奥さんて、子供の二人も有るんだが、それで何うだね、此最う三四年も家とは馴染だらうぢや無いか。」

「へえ、まあ、那の奥さんも矢張?」

「あゝ、だもの、お前だつて少しの間、家を手傳つてお下れな、贓着の二三枚や、小金の三四十は屹度私が殘して上げるから。」

六

姉は此前と同じ客のやうに言つたが、行つて見ると違つて居た。見ず知らずの始めての客であつたが、お粂も最う此前のやうにオド〳〵しない。客の顔も眞面に見られ得た。前の客よりは年も若く、何うかすると自分より一歳二歳下かも知れない。名高い辯護士の若様て、大學の學生さんだと女中が耳打をし

た。お兼は結句此前の客よりも氣詰りてなかつた。
お兼は今日横濱の家を出る時、髷を束髮に結直して來た。女中が、
「姐さんは此前と見ると、今夜は若く見えてねえ、髮の所爲か知ら。でも、此間の丸髷も能く似合つてよ。」と言ふと、
「だつて、私未だ髷が似合つちや可哀さうよ。」とお兼は這麼事を言つた。
客に年を聞かれた時、貴方はと問返したら二十一と答へた。お兼も同じだと言つた。然うは言つたものゝ、矢張弟か何ぞのやうな氣がして、這方から心置かずに打解け得られた。女中が居なくなつて差向ひになると、男は一層淵くなつて了ふ。一向未だ人擦れない事がお兼にも分つた。お兼は大膽に其れを弄ぶぐらゐに爲向けた。男が自分の言ふまゝになるのが面白いと思つた。而して亭主の事など全然忘れて居た。
其客は宵の口に歸つた。歸る時に、
「近い中に是非來て下さいな、可い事?」とお兼は熱心に呼いた。
姉の家へ歸ると、お喜代は活動寫眞から歸つて、獨りで最う寐て居た。嫗やに抱かれて、大人しく機嫌好く寐たさうだ。
「子供は罪が無いね。今夜も嫗やと寐ながら何を言ふかと思ふと、伯母さんの家の子になるから、毎晩活動寫眞へ連れてつて下れだつて。邪子は活動寫眞さへ見せて貰つたら、獨りでも寢るつてさ、阿母さ

んなんか歸つても可いさうだよ。」と姉は然う言つて笑つた。

其晩十一時頃に又別の家から口が聘つて、お兼は翌朝歸つた。歸ると直ぐ朝湯へ行つたが、昨夜の睡眠不足に體は綿の如く疲れて、午後三時近くまでグッスリ睡つた。

起きて見ると、お喜代は嫗やに連れられて淺草へ遊びに行つたとか、家には居なかつた。お兼は椽側に蹲んで楊枝を使ひながら、ショボ〳〵と小雨の降る庭をウットリ眺めた。家並の込んだ廂間のやうな痩地にも、行く春の慌忙しい風情が動いて居る。緣日物と見える陳つこけた霧島躑躅の花が、紙屑と一緒に若葉に貼り付いて、瓣の色も褪せた。シットリ濕つた黑い土には、青い小さな芽や、柔かな赤い莖が零れたやうに生へた。それが見て居る中に殖えても爲るやうで、お兼は凝と目を放さずに居ると、直ぐ前でポツン〳〵と稽古三味線を彈き出した。おや！と顏を擧げると、垣隣の梅の若枝のスイ〳〵と小氣味好く伸びたのが目に入つた。骨ばかりになつた三文紙鳶が梢に引絡つて居る。鰌々と呼んで表を通つた。

「あゝ然う、明るい中に今日は歸りませう。」と然う思つて、お兼は手早く顏を洗つた。

「兼ちやん、何爲てるの？些いと爰へ來て御覽。」と茶間で姉が呼んだ。

茶間には吳服屋が來て居た。紋織や、縞物や、友禪や、目の覺めるやうに廣げられた。

「ねえ兼ちやん、此の米澤、些いと柄が變つて居て好いぢや無いか。袷にでもして、些い〳〵着て出るに好いと思つて、お前のに取つといたよ。」

「あら、私那樣……」
「まあさ、可いから私に任かせてお置き。それから此友禪ね、お喜代の單に何うだらう、少し華出か知ら。」
「お喜代なんかに那樣……困るわ。」とお兼は目を見張つて、泣出しさうに言ふ。
「可いやね、何うせ要るもんなんだから。お前のは那れて氣に要らない事は有るまいね。ぢや番頭さん、今度來る時に、此人の夏物に向きさうな、阿召か何か二三反見せて下さいね。」とお德は獨りて取謀らつて了つた。
呉服屋の歸つた後て、お兼は凝と撓めて居た心を、ホッと溜息に洩らして言つた。
「姉さん、私何うするのよ！」
「何だね、大丈夫だよ、私に任せて置きな。」とお德は笑つて對手に爲なかつた。
お兼は又溜息を吐いて考込んだ。怖いやうな、然し又樂しみな心持もする。
「喜代は遲い事ね。」と思出して言ふと、
「何ち道最う日が暮れるから、喜代が歸つて、それから支度を爲たりする中には夜さ。最う一晩お泊りよ、泊つて晝間歸る方が可いぢや無いか。」
お喜代の歸つたのは、明りが點いてからてあつた。一日遊び廻つて、小い體は憊れ切つて、湯にも行かずに睡りこけて了つた。お兼も爲方無しに泊る事にした。然し二晩も家を留守にして、然ぞかし不自

由をして居る亭主の事を思ふと、恐しく心が尤める。今夜はお喜代と二人で大人しく寐やう、何と言つて姉に勸められても、今夜は客なぞに出まいと決心した。が、矢張出た。口が聘つて來て、「兼ちやん、何うするね。」と姉に相談されて見ると、晝間の呉服屋の義理もある、何うにも厭とは言はれなかつた。

それに、お客は昨夜の學生だと聞くと、些つと出て見たいやうな氣もした。

座敷へ出て、其の若い男の顔を見ると、お兼はパッと初心らしく赤くなつた。而して突踣されたやうにペタ／＼と坐つた。

七

翌日も雨は歇まなかつた。横濱の留守宅から、何時まで浮か／＼遊んで居るのだ、早く歸つて來いと云ふ意味の端書がお兼に來た。

お兼はハッと胸を刺されて、濟まない！と思つた。近所の何やら稻荷へ詣りに、抱の女に連れられて行つたお喜代を迎ひに、急いで媼やを遣つた。すると、其入違ひにお兼へ口が聘つて來た。

此朝端から何うしたお客だらうと思ふと、其れはお兼が此前始めて座敷に出た、其晩の客であつた。昨夜來て、一足違ひてお兼を餘所の座敷へ取られた爲め、今日の雨を居續ださうだ。若し體が塞がつて居れば玉一本でも可い、差繰つて是非出て貰ふやうに、迎ひの小女が言含められて來た。

「那言つて來てるんだから、些いとでも顔を出してお出でな。今日お午までに濱へ歸へれば可いぢや無

いか。歸際の駄賃に些いとお前、一時間ばかりも顏を出して來りや、それ丈で土産と汽車賃ぐらゐ稼げるぢや無いか。」

「でも……最う少しね、何うか云ふ客だと何だけれど——私、商人なんか向かないわ。」

「おや、此人は！兼ちやん、お前最う客好みなんかして、呆れるよ！」

て、朝前に些つと二時間ばかり座敷を勸めて、客に小使錢まで貰つてお兼は歸つた。歸ると丁度十二時、お喜代はと聞くと、一度歸つて、又何所かへ媼やと出たさうだ。此の降るのに——姉が故と出して遣つたに違無い。餘り人を操り過ぎると思つてお兼はムッとしたが、蟲を抑へて、ブイと湯に出掛ける。今朝とは別の湯屋へ遠廻りをした。何うも家の事が氣になり出して、オチ〳〵洗つて居る空は無い。尤も朝から二度目でもあるし、略と流して歸つたが、お喜代は未だ歸つて居なかつた。

「お前、那樣に家の方が氣になるなら、喜代を措いて行つちや何うだね。那子は獨りだつて大丈夫だよ、家の者に馴れ切つて居るから。若しか又、お前が居ないつて歸りたがつたら、誰か附けて送り歸したら可いぢや無いか。」とお篠は言つた。

「然うねえ……」

「大人しけりや泊めて置くし、ね、然うしたら又迎ひに出て來るさ。」

「然うねえ。」

て、何時まで待つて居てもお喜代は歸りさうも無いから、お兼は到頭措いて行く事にした。

横濱の家へ歸つたのは午後の二時頃であつた。今日は日曜日で、亭主の定造は火の無い火鉢の前で、呆やり鼻毛を拔いて居た。掃除も爲ない家の中は、雨降りだけに仍薄暗い。石炭殼の零れた狹い庭には、張板が隣の羽目に立懸けたまゝ雨叩きになつて居る。

「雨が降つたら、取込んで置いて下すつたら可いのに。」とお兼はブックサ言つた。

「那樣事より、早く飯の支度を爲ろ！」

「あら、何時の御飯！」

「俺は未だ午飯前だ。」

「まあ、呆れた！最う追付け三時ぢや有りませんか。私が居ないたつて、御飯ぐらゐ何うなりとして食つたら可いのに。」と言つたが、有繋に濟まないと思つた。

お兼は急いで近所の鰻屋へ行つて、定造の何より好な鰻丼を二つ誂へた。而して歸りに米屋の拂殘りを濟して、更に一圓だけ注文して來た。

「何だ、大奮發だな。」と定造は丼の來たのを見て言つた。

「私はお午飯を濟ましたんだから、二つとも貴方お食んなさい。」

「二つ？何ぼ好だつて、那樣に一人で食へるものか。」と和こ〳〵して言つたが、それでも定造は二つもペロリと平げて了つた。

「何うだらう、那のガツ〳〵して食ふ樣子つたら！」とお兼は口を歪めて見て居た。

定造は食ふ物を食つて了ふと聞いた。

「喜代は措いて來たのか。」

「えゝ、歸るのは厭だつて言ふものですから、二三日預けて來ました。姉や皆がチヤホヤ可愛がるものですから、家より面白いんでせうよ、子供は正直だから。」

「だが……」と定造は難しい顏をして、何か考へるやうな目をしたが、「正直なだけに、直ぐ何でも染込むからな。」と然う言つた。

お粂はギヨッとして亭主の顏を眺めた。無口で何にも言はぬけれど、此人が那樣事まで考へて居るかと思ふと、空恐しいやうな氣がした。

定造は一月餘りも刈らず剃らずに居るのを、お粂は勸めて床屋へ行かせた。亭主を出して遣つた後で獨り火の無い火鉢に凭れて凝と考込んだ。あゝ、取返しの付かない事をして了つたと思ふと、ホロ〳〵涙が零れた。一昨日の晩から今朝へ懸けての光景が、一々胸に浮んで來る。自分の腕！唇！體の總てを何うかして了いたいやうだ。自分は眞の生娘で定造に嫁いた。嫁いた當座は寧ろ亭主が怖かつた。が、怖い中にも亦懷しい所があつて、半年と經ち、一年と添遂げる中に段々夫婦の情愛も分つて來た。而してお喜代が出來た。お粂は情愛の最も乘つた其頃の事を考へた。其頃の事を考へると、あゝ、何うして這麽氣になつたらう、と沁々今の自分を怪しんだ。姉が怨めしい。然し又亭主にも不足が無いでは無い。お喜代は最う七歲にもなるのに、那限後が出來ないでは無いか。

「だけど、無理は無いわ。是までのやうな貧乏世帶て、後が出來ちや私が不見目だもの。」と獨言ちて涙を拭いた。

雨は相變らずシヨボ〳〵降り續けて、家の中は最う疊の目が覺束無いほど暗くなつた。

其夜お粂は厭な夢を見た。

自分は體が切なくて成らぬ。で、人に見て貰ふと、慥かに姙娠だと言ふ。然う言はれて始めて吃驚して氣が付くと、成程腹が重い。然かも胎の兒は一人て無い。二匹！三匹！四匹！あゝ、畜生腹！と思ふと、定造に搖り起された。

「何うした？夢でも見たのか。」

「あゝ、怖かつた！」とお粂は密と自分の腹を撫てゝ、「何か譫言でも言ひまして？」

「何だか苦しさうに魘されて居たよ。」

「何か言ましてと？」一同じ事を聞いた。

「いゝや、唯魘されて。」

お粂はホッと息をして、其限默つたが、涙が獨りてに浸染んだ。

「怖い夢でも見たのか。」と暫くしてから定造が又聞いた。

「怖いて言へば怖いやうな‥‥だけど、ねえ貴方、貴方は能く私に厭氣が催しませんね。」

「何が？」

「だつて、私のやうな我儘な女房は有りませんもの。」
「夫婦はお前、情愛で持つてるものさ。心さへ變らねば情愛に變りは無い……」
「でも……勘忍して下さいね！是までの事は。」と言つて、お兼は枕元の明りを消した。
最う鷄が啼出した。雨は歇んだらしい。

八

朝も未だ白々明にお兼は起きた。飯を焚いて、味噌の吹揚つた頃定造を起して、辨當の菜には卵子と氣取つて、機嫌好く送出して遣つた。自分も飯を濟して、洗物も片付け、隅から隅まで念入りに拭掃除もして了ふと、お兼は通へ買物に出掛けた。

昨夜の雨はカラリと霽つて、雲片一つ無い青天は濃く輝いて、全て梅雨晴のやうな照心地だ。雨の後の乾揚がる土の匂が蒸すやうで、澤々しい新綠の梢は仄と水蒸氣を帶んだ。小石の洗出された町を、人は輕さうに素足を運んで、俥の輪が躍るやうな音をさせて走る。お兼は重荷を下した後のやうな暢々した心持て、イソ〳〵歩いて居たが、通りすがらに偶と藥屋の店を覗いて、何か思出したやうに急に顏を曇らせた。が、左も右くも思立つた其の呉服屋の店まで行つて、亭主と子供と而して自分と、三人の袷地を三反求めた。無論木綿物てある。

て、歸りにお兼は前の藥屋へ寄つて、萬一の用心に「月さらへ」を一服買つた。次手に忍冬を一袋。其れの煎汁を毒消しだと云つて、姉の家の女が皆呑んで居るのを思出したのであつた。

障子を開放つた明るい座敷の眞中に、疊紙や針箱を持出して、お粂は先づ亭主の袷を裁つた。生温い風が、何所からとも無く青葉の匂をフハリと持つて來て、瞼を萎やすような薄ら眠い日だ。久振に針を持つて見たが氣が乘らない。動もすると放心して、ウツトリした目を庭へ遣つた。石炭殻の敷き零れた庭にも、雀が漁りに降りて、所々青い物も芽ぐんで居る。日は眩しいほど噴やかに射した。

「ちよ！面倒臭い。餘所へ頼ん了はう。」と呟くと、行成布片地を掻寄せた。

其れと一緒に、自分のも子供のも一纏めに風呂敷へ包んで、而して長家の奥の、其れて暮らして居る後家さんの所へ仕立を頼みに行つた。午は西洋料理を取つて、其の後家さんにも振舞つた。

四時の例刻に定造が歸つて來ると、お粂は出抜けに這麽事を言つた。

「ねえ、可い氣になつてお喜代は遊んでるんでせうから、手紙を出して、誰かに送つて來て貰ひませうか。」

「さあ‥‥それも餘り勝手過ぎるぢや無いか。向うも忙しい中を氣毒だ。」

「然うねえ。ぢや、まあ、二三日那して措きませうよ。飽きたら自分で歸るつて言ふてせうし、何とか其中に姉から言つて寄來すでせう。」

て、定造は例に依て機械のやうにコツ〲税關へ通ふ。お粂は留守の一日を永く暮らして、買食をしたり、隣近所へ油を賣つたりして、三四日は事も無く過ぎた。すると、其れは土曜日の午後であつた。定刻より早目に税關から歸つて來た定造は、浮かぬ顔をして、

「困つた事が出來たよ！」と當惑さうに言つた。
「何うなすつて？」とお兼が氣遣はしさうに聞くと、
「今までの稅關長が今度大藏省へ轉任して、後釜へ長崎から署長が來たんだ。」
「何うそれで貴方が困るの？」
「それで實は、急に話が決つて、今日五時から歡迎と送別とを兼ねて、署員一同の宴會があるんだ。何うも後々の爲めにも、俺一人出ないと云ふ譯には行きかねるので。」
「ぢや、出たら可いでせう。」
「所がお前、會費が二圓五十錢と云ふんだもの、馬鹿氣切つてるぢや無いか。」
「二圓が三圓だつて、交際なら爲やうが無いわ。ぢやね、私此間姉さんから借りて來たのが有りますから、それを上げませう。」と快く言つて、お兼は自分の財布を捜したが、中は何時の間にか小錢ばかりになつて居た。
「あら、最う有りませんわ！てら。」と笑ひながら逆樣に振ふと、小錢がバラ／＼と零れ落ちた。
「然う／＼、貴方や皆の袷地を買つて了つたつけ。可いわ、私の何か曲げませう。」
お兼の拵へた三圓を持つて、是もお兼に拵へて貰つた新しい仕立卸しの袷に、ペンペラ物の紋附羽織を着て、暗くなつた路地をコソ／＼と定造は出て行つた。羽織だけ絹物の拔衣紋になつた、其の撫肩の見窄らしい後姿を凝と見送つたお兼は、旋て深い溜息を吐いて、

「あゝ、厭だ〳〵！」と思餘つて口に出した。

九時頃、定造は毎に無い上機嫌て、酔つて歸つた。お兼は明りも點けぬ眞暗な中に布團を引冠つて居て、お歸りなさいとも言はなかつた。

翌日は日曜て定造も一日家に居た。お兼は氣分が惡るいと言つて午過まて寐て居た。すると、午後三時の配達て、お兼へ宛てゝお德の手紙が來た。故と端書て、喜代が急に歸りたがつて爲やうが無いから、直ぐ迎ひに來て下れと云ふ簡單な文句だ。而して末の方に、仕立が出來て來た、と小さく書添へてあつた。

「私、是から迎ひに行つて來ますよ。」

「最うお前、行つて來る中に日が暮れるよ。明朝行つたら可いだらう。」

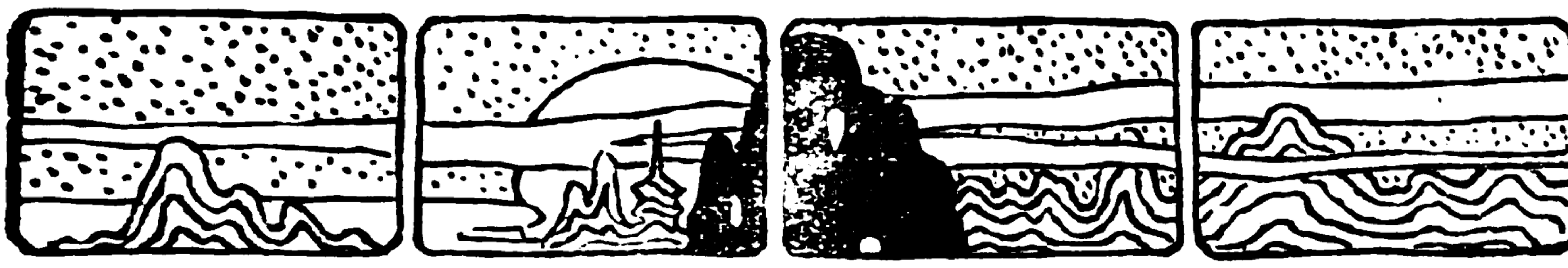
「だつて、那樣に歸りたがつてるものを、可哀さうてすわ。」

お兼は手早く身支度をしてソハ〳〵出掛けた。明るい中に姉の家へ着いたが、お喜代は歸りたさうな氣振も無かつた。酒が始つて居る。

「兼ちやん、能く這麽に早く來られてね。」とお德は和こりして、自分の持つて居た盃を獻した。

傍には○○座の壯士俳優だとか云ふ若い色白の男が居て、如才無く銚子を取つて酌をした。

（完）



幻

水野葉舟

一

其は東京の中であつたが、土でも家でも、臭い人間の息や、垢が泌み切つて居る、袋の奥のやうな處だつた。薄黒い、腐つた瓦斯が立籠つて居た家のやうに思はれて居る。これが、私の一番古い記憶に殘つて居る自分の家であつた。

目を閉つて、ぢつと考へて見ると、ぼつと厚い曇つたガラスでも漏れて來たやうな、どんよりした日の光が始終その家を照らして居たらしい。其の埃が黄く立ち迷つて居る町の中で、私は誰かと遊んで居た。

私は如何言ふ事を思つて、誰と、何をして遊んで居たらう？…その時の一日は如何して過ぎたらう？…私は一度、縁側に何處で捕つて來たのか蜻蛉の首を一列に並べて居た。加藤清正の朝鮮征伐だと言つて、お玩にして並べて居ながら、首をぢつと見て居ると、よ

と、その首が青く光つた。十ばかり並んで居る小さい玉だが、一時にギラッと光つて、生きて私の顔を睨めた。

私はワッと泣いて、夢中にその玉を手で拂ひのけた……其時、私と並んで見て居た子供がも一人居たが……

私は其時、たしか六つであつた。

二

この時も、まだ其家だつた——

私は誰かに負ぶはれて、外から歸つて來て、椽に降ろされた。と、家の中が暗い。窓などは戸が閉めたなりになつて居て、中が空き家のやうに濕めつて冷めたかつた。

私は何とも名付けにくい、氣味が惡いので、椽から中を覗いて見た。すると、一間おいた奥に、此方に脊を向けた人が二人居た。

處に、誰か來て私の手を引いて、その室に連れて行つた。そこに行つて見ると、薄暗い室の中には私の大切な祖母さんが寢て居た。その室に入ると、冷いやうな藥の香が顔に當つた。

「お祖母さんが!……」と、急に恐ろしさが心に響き渡つた。その少し前まで、一所に抱かれて寢て居た、祖母さんの肌のぬくみを思ひ出した。すると、私は何時か魚屋の店にあつた皮の色の灰白い大きい長い……口が腹の方に向いた處に付いて居る魚が目に浮んだ。

其迄、立つた儘、恐さうな目付きをして、ぢつと祖母さんの顔を見て居たが、私はソツと、
「祖母さん」と呼んで見た。
祖母さんは重さうに目を開けて私を見たが、何にも言はなかつた。

三

私の家は何時か、もうその暗い家では無かつた。
午後の日光が、目がまばゆいやうに家の中を明く見せて、疊でも、唐紙でも、壁でも新しく卵色をして居た。食卓が室の中に置いてあつた。その上の陶器が白いけばけばしい色をして居た。私は其卓の前に坐らせられた。
やがて、牛肉と魚が皿に盛つて出された。其魚には皮も骨も付いた居た。それを見ると、私は其を食べなかつた。
と、父が、
「其を食べナ」。と言つた。私は魚の臭ひと、舌に觸る油のぬらめくのとを思ひ出すと、腐つた死骸に口を付けねばならぬやうに、思へて、首を振つた。と、又父が、
「食べナ。何故嫌だ? ‥」と、やさしく言つたが、ぢつと私の顔を見た。
私はその目を見ると慄えた。けれど、如何しても魚を食ふ氣にはならぬので、默つて居た。
父は、

「其を食へ！」と、怒鳴つた。「さう言ふものをドッサリ食ふと、身體が丈夫になるんだ。お前見たいに、蓮や人參ばかり食ひたがる奴があるか。坊主見たいな奴だ」。……

私は腐爛した肉を口に入れるやうに思つて、嫌や〳〵一口食べた。父はそれをぢつと見据えて居た。

私の胸に一番早く刻み付けられた父の顏は、この顏だつた。

その家の前には川が流れて居た。淺く瀨が立つて……方々に埃が固つて引つかゝつて居た。

一度、雨が降つた時に、其川の水が增して、埃が流れて來た。其濁つた水の中に、大きな赤い魚が泳いて行つた。私はそれを見ると聲を上げて、その川緣を走つた。

この家で、私は種々な人の顏を覺えた。顏の長い、口の大きい隣のオヂさん。……その家は廣々とした庭があつて、朝顏の花が咲いて居た。川の向ひには伯父の家があつた。伯母さんは肥つた目の小さい女で、その身體に近よると妙な臭がした。私をよく抱いたが、すると身體を其香で包まれるやうに思つた。それとも一人、私は女の兒とよく遊んだ。家はやはり川向ふだつた。狂人のやうに瘦せた子で……その子は赤い帶をして居た。

その家も、種々な人の顏も、やがて私の目から消え去つた。私は又別の家に居た。

四

この家はお寺のやうな家だつた。裏の庭が廣く、それに何にも使はぬ大きい石が幾つか轉がつて居た。その間から盛に草が生えた。その中に、草と同じ色をした蜥蜴が居た。これは私の寶だつた。

玄關には横に棧の亘つた戸が四枚はまつて居た。外から入つて來ると、道に沿つて石垣があつて、石の階段を上つた處に門があつた。何て覺えて居たか知らぬが、其がお寺の門とよく似て居た。四邊がただ日に乾き切つた砂埃りの土のやうな色をして居た。

その時には、もう私には妹が居た。髮の赤い口の廣い兒で、キーキーと耳に鋭く響く聲て泣いて居た。私は自分がもうすつかり大人のやうに思へて居た。其妹が非常に小さい兒に見えた。阿母さんは肥つた人だつた。が、私には阿母さんの顏が分らぬ。ただ白い肉付のいゝ胸から乳の處が見えて居た。其胸に私はそつと自分の顏を押し付けた事があつた。その時にはぽつと煖かい肌のぬくみが、何とも言はれなく快いにほひを持つて居た。其が實に懐しかつた。一度でも其胸に顏を押し付けると、離れられなく思つた。そして前には私は始終、其胸に顏を埋めて居たやうに思はれる。……

そこに近よると身體がすくむやうだつた。庭には大きい樹が繁つて居た。けれども樹の陰には汚れたじめじめした氣味の惡い蟲が居る。私は樹の陰が大嫌だつた。

裏の庭の垣根の處に立つて居て、私は幾度も蝸牛の爬つて居るのを見た。この蟲も、私には氣味が惡かつた。歩いた跡に一條、ぬらぬらッとしたものをつけて行く。私の手が、其蟲の近くに寄ると、そのぬらぬらしたものが、身體中に付いてはなれないやうに思はれた。すると私は身體が俄かにだるくゆるんでしまつて、力が無くだらつとなる。そして、四邊から、毛蟲やら、蝸牛やら……氣味の惡い蟲が、私の

身體を取り圍んて爬ひ上つて來る‥‥

夢に襲はれた時のやうに、聲を立てようとしたが、身體が自由にならなかつた。

或る日、私は丈の高い男に連れられて、弘い街頭に立つて居た。日が其街頭から、町の屋根から、空から一杯に照らして居たが、もう欠伸でもして居るやうにもう午もすぎて居た。

私を連れた男はぼんやりとその街頭に立つて居た。私はその男に手を引かれて、ぢつとその日の當つて居る町を見て居た。

「歸らう‥‥」私はさう言つたらしい。けれどその男は默つて返事もせずに立つて居た。

男が默つて居るので、私はもう家には歸られないのでは無いかと、ふと思つた。すると、街頭が俄に廣くなつて茫と、街き放されたやう‥‥私は、

「おぢさん。歸らうよ」。と言つた。

「うん」。と答へたが、その男は私の手を引いて歩き出した。私は足がすつかり疲れて居た。何處まで行くのか分らなかつた。默つて手を引かれて行くので、歩いて居た。と、坂にさしかゝつた。それからは如何したか、私は覺えて居ない‥‥

私はよく夢を見た。そのお寺のやうな家の奥の間に寢て居て種々な夢を見た。

私は賑やかな女の居る中に居た。繪で見たやうな綺麗な衣服を着た女が居て、私を眞中に取り廻はして居た‥‥さう言ふ夢を始終見た。私は獨りでこの砂埃りでまぶされたやうな家に居るのが寂しくつて

たまらなかつた。

或る時に斯う言ふ夢を見た。私はこのお寺のやうな家に一人て殘されて、家の人は皆何處かに行つてしまつた。私は日がぽつと照らして居る玄關の前に立つて、もう家の人達は歸つて來ないと思ひながら、外を見て居た……私の手は色の白い皮の柔らかなしなやかな手てあつた。

或る日、午頃の人通りの無い時に、私はすぐ近くのやはり私の家のやうに、石垣のある、白く塗つた學校の家から出て來て日の光がキラキラと乾いた道に反射する中を、一人て歩いて來た。手には菓子を包んだ紙包を持つて居た。

學校の室には人がまだ一杯居た。私はそこから出て來たのだが、何か學校の事を考へながら歩いて來た。何だか自分一人が一同と別になつてしまつたやうて妙な氣がした。

日の光が路や石垣の石に燒け付くやうにカッと照らして居た。石垣の間から生えて居る草が、蒸されて凋れたやうになつて居る。その傍をフラリフラリ歩いて來ると、私は人がすつかり眠つた、眞夜中に廣い野の中を一人て歩いて居るやうな心持がした。目には鮮かに、細い路と、石垣とが見えて居た。が、四邊は寂然となつて、何にも動いて居るものが無い。

家の前にたどり付いた。日に燒けた石段を上つて門を入らうとすると、玄關の戶がすつかり開いて居た。そして、幾つもの大きい箱が其處に積んてあつた。私が門を入つて、そこから上らうとすると、中ては誰かが大きい聲をして話をして居たが、二人の人が箱を一つ抱へて出て來た。

家の中が一杯、散かつて居て、何だか、ひどく忙しさうだ。

私は汽車に乘つて居た。私と向ひ合つて、祖母さんが坐つて居た。祖母さんの隣にも、私の隣にも知つた人が腰を掛けて居た。汽車は勢よく走つて居た。

と、祖母さんが、私の肩をついて「正ちやん、正ちやん、ホウ海が見えるよ」と言つた。窓から青黒い廣い處が見えた。海だ。海だ。遠くの方には船も見えた。「ヤア、海だ!」と立ち上らうとする處へ、シユー!、と言つて、黒いものが擦(す)れ違つた。その拍子に私は目がくらくらつとした。そしてその儘、腰をついた。身體が廻り出した。

「如何した?」と頭の上で言つた人がある。何時か祖母さんに抱かれて居た。

私は目を閉つてぢつとして居た。すると、グワッと言つて汽車が何かの中に入つて止まつた。私は降された。晝間だけれど、奧の青煙が籠つて、薄暗い處だつた。そこて降りて私は何處か知らぬ處に連れて行かれた。

私は小さい船に乘つて居た。その中には祖母さんも居た。

船には人が一杯乘つて居た。私はお祖母さんの膝にもたれて居たが、首を振り向けると、重くものを含んだ、青い水が目に入つた。その水が油が動くやうに搖れて居た。

その中に船が、黒い見上げるやうな大きいものに近寄ると、その縁(ふち)に止まつた。其ふちに小さい梯(はしご)がか〻つて居た。私はそれを上つた。歩く度びにその梯(はしご)はグラ〳〵する。そして板の隙(すき)から下を見ると、

足の下には碧黒い水が見えた。
　私は誰かの手にしつかり捉まつてしまつた。

五

　私達は薄暗い、幾つも重つた、一番下の箱のやうなもの中に寢た居た。私は其箱の中の通り道によつた疊の上に轉がされて居ながら、目を閉つて見ると、頭がズウットと上つて、又スッと下る。その度に頭がクラクラとなる・・・・
　私の傍には母が寢て居た。髮が解けて其疊の上に亂れて居た。顏が青く、目が恐いやうになつて、衣服の胸がはだかつて瘠せた乳がだらつとして見えて居た。
「苦しいよう！」と、私は母の顏を見ながら言つた。だけど、母はぢつとして動かなかつた。處へ、ぬつと大きい腕が見えた。目をその方に向けると、顏のすぐ上に頰骨の尖つた疎らな髮の生えた大きな顏が、ズッと出て居た。黄い顏だつた。私の目がその方に向くと、私を睨み付けて、頭の上で私の菓子箱をがさ〳〵言はせた。私は恐くつて、その顏を見返す事は出來なかつた。
　何處かでグッと言ふ聲がした。
　私は頭に重い鉛を付けられたやうに、身體を自由に動かす事が出來なかつた。
と、耳のわきで、
「正ちやん、如何したい？」と言ふ聲がした。見ると、何處から來たか、箱の外に一所に來た叔母さん

がしやがんで居た。脊には妹を負つて居た。
私は起き上らうとして、叉疊の上に重い頭を落してしまつた。その時に母は私に背を見せて居たが、母の懐て妹――二番目の妹が泣き出した……
私は叔母さんの顔を見て居た。すると其顔が暗くなつて、私は目の前が晝だか夜だか分らなくなつた。
私は又小船に乘つて居た。其時にはもう祖母さんは居なかつた。私は船の舷に坐つて、水を見て居ると、碧い水が底の方まで見えた。そしてその中に小さい黑い魚が群れて靜かに泳いて居るのが見えた。
私は其を見て、東京で金魚を抄くふ手網… 伯父さんの家にあつたのを思ひ出した。
「あれがあると、すぐ捕れるだがナ」と思つた。
と、初めて四邊の景色が目についた。何だか目の前に押し付けるやうに、大きな黑い山がある……
幾つもの船が往つたり來たりして居る。
私は祖母さんの事を思ひ出した。毎晩必ず抱かれて寢た人が居ない……私はたつた獨りて何處かにやられてしまふやうな寂しくつて堪らない心持がする。
船が陸に着くと、知らない家に入つた。
奥に長くついて居る上り口の板が栗色に美しい艶をして軒の深い土間て光つて居た。
私は行處に行くんだらうと思つた。そこに入つた時には父は見えなかつた。
暫くすると、冷や冷やした心持のする、奥の深い處のやうな室に入つて居た。

小さな窓があつて、そこで妹と並んでその窓に向つて居た。その後に母が忙しさうに出たり入つたりして居た。

あゝ！私は何處に來たのだらう。

私は妹と二人で車に乘せられて居た。母の乘つた車がすぐ前にあつた。そして何處かへ行つた。暫くすると、松林の中に來た。身體がむされるやうで汗が出た。やがて、大きな門のある明るいしんとしたお寺に來た。

其寺の庭を歩るいて行くと、赤い小さな草が美しく生えそろつて日に照らされて居る。

私はそこで初めて胄と言ふものを見た。黑い鐵だつた。其を見て居ると自然と恐くなつて來た。

六

小雨が降つて、風が强く吹いて居た。私は父と二人で車に乘つて、其風の吹く中を家を出て行つた。眞白に塗つた凉しさうな西洋造りの家の前で車を降りた。家に入つて行く道には小さい石がしつくり敷いてある、其が雨に濡れて居た。

家に入ると、そこに居た男が先きに立つて廊下に出た。と、風に吹かれてさッと波の飛沫が來る。海は其日の風で濁つたやうな色になつて波が激して居た。沖の方には大きい船が波の間に二つばかり見えるきり、小船の影も無い。海が廣々として波が狂つて居た。——この家は海の中に突き出たやうにして建てられた家だ。

私は海から吹き付ける風で呼吸をはづませながら、父に引き沿つて、廊下の壁に身體を押し付けるやうにして歩いて行つた。生れて始めてこのやうな恐ろしい景色を見た。

廊下の突當りの處にある小さい室に入ると、風にあほられる戶を、バタと閉めた。私は初めて安心した。そして父の顏を見た。父は人を待つて居るやうに室の中に立つて居た。

と、奥から、大きな金の光つた徽章を付けた帽子を冠つた、白い服の人が出て來て、父と二言三言話した。そこへ母と妹とが、風に吹き込まれるやうになつて入つて來た‥‥

七

私は父に起されて目を覺ました。夜はもう明けて居た。私達の乘つて居た船は停つて居た。

起されると、私は父に手を引かれて、小さな梯を上つて行つた。廣い處に出ると、目の前には泥のやうに海が濁つて居た。そして遠い方に黑く町が見える。

「父さん、降るんですか?」と、私は聞いた。父は默つてうなづいた。

濱は泥のやうな色の砂だつた。上つた處に、大勢の人が立つて居て、口々に大きい聲を出し、呼んで居る。何か全で聞き馴れない言葉であつた。

濱に立つと、嗅ぎ馴れない土の臭がした。父の手につながつて、如何なつて行くか分らない心持がして居ると、父が思ひ付いたやうに、

「ここが博多だよ。遂々着いたんだ」と言つてくれた。その時に私は今度、この博多に來たのだと言ふ

心持が湧いて來て、何となく安心したが、急に寂しくつてたまらない氣持に襲はれた。

やがて、私達は…母も叔母も妹も亦知らぬ家の奥まつた室に坐つて居た。私はその庭に立つて居た。庭に立つて、私は其處らに爬い廻つて居る蟹を捕へようとして居た。蟹は卵色をして透き徹るやうな小さいので、砂地の庭を縦横に爬つて居た。

「ね、母さん、金魚に似た蟹が、これ御覧なさい！」

と言つて、其を捕へようとして居た。心には東京で金魚屋が、桶のやうなものに、蟹を一抔入れて賣つて居た――蟹はその桶の中でうじよ〱して、互にガチョ〱音をさせて居た…その有様を思ひ出して居た。

私は蟹を見て嬉しくつて、心が湧くやうになつて居た…キャッキャッ言つて、その跡を追ひ廻はして居たが、ふつとその氣が變つてしまつた。何かもの足らぬやうな氣が心に起つた。急に泣き度いやうな、心細いやうな氣がする。私は立つた儘て、ぼんやりして家の中を――母の顔を見た。妹が叔母と向ひ合つて坐つて、何かして遊んで居る。私はだるさうな聲を出して、

「母さん！」と母を呼んだ。

八

私は一番初めに入る時から、其家が恐ろしく薮の中のやうな薄暗い家に思はれた。

蟹の多く居た家に幾日居たか知らぬが、何時かこの家に移つて居たのだ。この家は町から、すつと入

り込んで居る。古びた屋根のある門が道街に向つて建つて居た。その門から玄關に行くまでに、小さい門が一つあつた。其の奥は兩側とも孟宗の竹藪で、その奥が薄暗く、晝でも私は恐ろしいものが居るように思つた。

庭の眞中に、庭一杯に枝を弘げた大きいザボンの樹があつた。

此家に居る中に、私は不思議な事を思つた。家の中の何處かに人が居る……家の人の知らない處に、何か居る、とさう思つた。

如何して斯う思つたか分らない。だが、私には斯うたしかに思へた。それで、私は、或る時、晝間だつたが、その人が何處に隱れて居るだらう……と思つて家の中を見て廻つた。室から室と、入つて見て、私はぢつと耳を澄ませて考へたが、さうすると、人が居るなんてそんな事はない。まるで僞だ!。と言ふ氣になつたが、坐敷に入つて見ると、ふと、「それは天井の上だらう!たしかに何か居る」と思つた。

私、何故か急に身體を引きしぼられるやうな氣がした。「もし、果してその誰かが居て、それを見付け出したら、私は如何しやう?……」私は斯う思つて恐ろしくなつた。一方では、如何しても、その誰かを見付け出さねばならぬように思つて、坐敷と並んだ六疊の……母の居間に入つた。

入ると、先づ戸棚の唐紙が二寸ばかり開いて居るのが目に入つた。私はぞつとした。入口にぢつと立つた儘で、その室の中を見入つて居た。今にも、その唐紙が開いて人が――男が顔を出しさうだ。私は襲はれるやうな恐しさを感じながら、滿身に力を入れて、ぢつと其處を見詰めて居た。

誰かゞ來て、或る時門から入つて來る道に鷄頭を植えた。其が何時の間にか私の丈よりも高く伸びて赤い毒々しい……血の腐つたやうな色の、長い垂れる花を付けた。その草が、夏の日に照らされると、草が吸つてる赤い水分が湧いて居るやうに、熱蒸（いきれ）が肌を襲ふ。

その中を通つて家に入つて來るのが、私は嫌だつた。處が、遂々、其鷄頭に毛蟲が群をなして居るのを思付け出した。私はその前を、もう通る事が出來ない程身體がすくんでしまつた。

私は學校に入つた。教場には私と同じ位の小さい子が一杯居た。その中で私と並んで居たのは何とか言ふ姓の、目の黒い圓い顔の女の子だつた。

私は次第に教場に馴れて來ると、その女の子に何とかものを言ひ掛けた。その子は振り返つて、私に答へたが、その言葉が聞き馴れない、博多の言葉だつたので、私は何だか他（よそ）の人のやうな心持がした。

もうそろ／＼夏になつて來た。

私の家に來る人の中で、肥つた顔が埋る程、鬚の生えた山口さんと言ふ人が、或る夕方、馬に乗つて庭に入つて來た。父が椽に出て其人と話をして居ると、山口さんは馬から降りて鬚だらけの顔で笑ひながら、私を抱いて其馬に乗せた。自分も一所に乗つて、父や母と笑つて挨拶しながら、門を出て行く。

私は默つて馬の脊に乗つて居た。すると、幾つも幾つも曲つて、或る家に來た。そこで降りると、家の中から、非常に痩せた小さな女の人が出て來て迎へた。――これが、この山口さんの家であつた。

この人は、よく朝早く私の家に來た。すると、父と母とは、寝て居る私を起して海に連れて行つた。

私の家の裏の町を出ると、蒸すやうな潮の香がする。細い砂の道を踏んで行くと、道の傍の草の中に赤い花の百日草が時々一輪位咲いて居た。その花を見付けた時には、私は何よりも嬉しく思つた。

それから、砂の上に衣服を脱いで、皆て海に入つた。私は母と二人て、腰程の處に入つて、足がフワリと浮くやうな心持をしながら、手をつないで遠い沖の方を見た。すると、父や其山口さんはどん／＼沖の方に出て行つて、黒く頭だけが見える。

處へ、濱へは外の男や女も集まつて來た。互に挨拶をして、海に入つた。夏の朝の水蒸氣を含んだ潮風を吸つて、私は靜かな遠淺の海に母と手をつないて入つて居ると……私は嬉しかつた。そして沖から歸つて來た人はよく二つも三つも大きな實の入つて居る貝を持つて來てくれた。私は何處かに大勢の人と一所に遊びにでも來て居るやうに思つた。

だか、暫くして互に分れて家に歸つて來ると、私は何となく息のつまるやうな氣がした。

斯うして學校が夏の休みになつた。

その中に竹藪は切り拂はれてしまつた。私の入る事の出來なかつた處は、廣々とした遊び場になつた。そこに壞れかゝつた垣根があつた。その先きは、他の家の裏て少しばかり畑が作つてある。畑の持ち主は血の氣の無い大きい顏をした爺だつた。私はその爺を恐わがつて居た。

何時だつたか、私達は四五人その垣根の處に集まつて、頻りに遊んで居た。その中に一人が垣根から畑の中の花を取つた。と、その爺が畑の傍に立つて居て、ぢつとそれを見て居た。

ワッと聲を立てゝ、その四五人が馳け出した。私はその爺を怪物だと思つて居た。

私は父に抱かれて居た。母が其前に泣き臥して居る。それは母の居間だつた。私は寝て居たのを引抱へられて目を覺したのだつた。夜も餘程更けて居た。

私は慄えて居た。父は押し靜めたやうな、强い聲で何か言つて居た。すると、泣いて居た母は急に身體を起して、

「ぢや私は東京に歸ります」。と言ふと、父は「行け行け」と怒鳴つた。戸棚を開けて白つぽい色のショールを出した。そして、ぽかんとして居た私の手を取ると、「正一は私が連れて行きますから……」と言ふ。私は手を引かれてよろよろした。と父は堅く抱いて、

「正一は此處に置くんだ」。と言つた。

私は父に力强く抱かれたのが、泌々と嬉しく心强く思つた。母の顏は泣いて荒れたやうになつて居た。

私は漸くやうに心細くなつた。今迄、忘れてまぎれて居たが、此處は私達が落ち付いて住んで居る處では無い。私は又、何處かに連れてかれるんだ。と、頻りと思はれた。

泌々、私は泣き出した。何故泣いたか知らぬが、大泣きに泣いて、母に抱き付いた。

母は東京には行かなかつた。

此家て、一度私は斯んな夢を見た。夢ては無かつたかもしれない。私はその後も何時までもそれが夢て無いらしく思はれてならなかつたから……

夜中だ。私は誰かに呼び出された。それはたしかに私の敵て、恐ろしい妖怪だつた。私はもう心は恐ろしさに慄えて居たけれど、スルッと戸の間から外に出ると、その敵に向つた。

敵は空の上に――空は藍に白かつた。――黑い影のやうな姿をして、私に向つて來る。其に向ひながら

私も次第に空に浮き上つて行く……

と、家が開いて叔母さんが出て來た。

その夢を見たのは何時だつたか知らぬが、私は如何も今にさう言ふ事があると、思はれてならなかつた。

或る時、私の家の奥の間に、病人が枕を並べて寢て居た。叔母も居た。妹も居た。私が學校から歸つて來ると、病人の枕元には、夏密柑やら、ザボンやらの皮が散らかつて居た。室は熱と汗との臭ひがした。

その中に叔母さんが居なくなつた。すると十日ばかり、家の中は誰も落ち付いて居る人が無くなつた。私は毎日ぼつ然として室の隅に坐つて居ながら、何か大變な事が起つたのだと思つて居た。

と、叔母が死んだ。

十

誰かに連れられて、私は抜け道を歩いて其家の前に出た。二階のある家だつた。

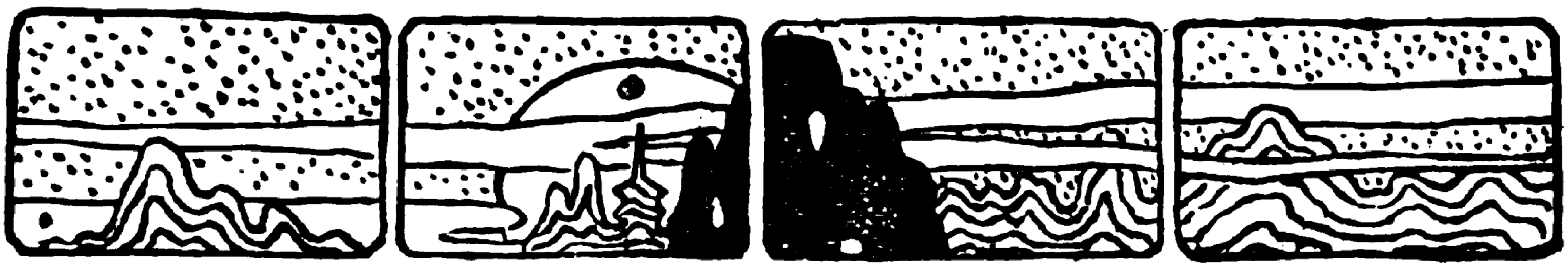
中に入ると、居間らしい處に、母も、此度來た年の若い祖母も妹も其處に坐つて居た。

母は病後の青い顔をして、新しく生れた赤兒を抱いて居た。

そして誰が言ふとなく。

「あゝ、晴々した！。あんな家つたらありはしない」と言つた。

今度の家の庭には、丈の高い牡丹の木が一株、枝を繁らして居る。その枝に、赤い大きい花が十も十五も、パッと鮮に日に照らされて咲いて居た。（完）



亭主の留守宅

岩野泡鳴

お里の繼子勉の不勉强はいつ直るとも見込みが付かず、馬鹿げた惡いたづらばかりがます／＼つのつて行つた。

美術家たる素質が多少あつたかして、畫を書かして置けば、いつまでも机に向つてゐて、外出などはしなくてもいゝ樣子だ。して、習はせもしないのに、物の形を割合ひによく書き現はすことが出來るのは、いつか母のお里のヒステリ面が甘く出來てゐたので分つてゐて、その時はお里自身はむきになつておこツたはおこツたものゝ、跡で考へて見れば、せめてその畫才だけでも發達さして、所夫の留守をあづかつてゐる間の申しわけにしやうと思ひ付き、勉の爲めに、餘りかねの入らない畫の敎師を探した。

この家族の住まひは芝西の久保の神谷町だが、その山手に仙石屋敷がある。そこの借家

に、畫の上手な先生があつて、近處の子供にそれを敎へてゐることを聽き、お里は勉をそこへ弟子入りさせた。一般から見ても、大した先生ではなかつただらうが、それでも、蘭とか、竹とか、猿の腰かけなどを覺えて來る樣になつた。その代はり、學校のことには一層怠りが嵩じて來て、近處の子供の話しを聽いても、人聽きの惡いことばかりだ。

けふも森の勉さんは敎場で先生に叱られたとか、放課時間前に運動場へ出て辨當を喰べてゐたとか、某女敎師の便所へ行つたところをのぞいて見たとか、到底、お話しにならない。それに、時々、年下の子をそそのかして、菓子を買ふ錢を貰つて來させたり、相手の持つてゐる菓子を奪つて喰つたりするのだ。

學校からは、また注意があつて、勉が、この樣子で行けば、この學年も試驗がおぼつかないと云つて來る。その上、お里が、勉の留守に、敎科書や筆記帳を調べて見ると、殆どべた一面に、例のへのへのもへのは勿論、犬のつるんだところや、男女の局部が書き散らしてあるので、子供だと思つてるうちに、もう、色氣が付いて來たのかとも察しられる。然し、もう、叱りつけるのにも、根氣負けがしてゐるのだ。

どうせ、いつまでも落第するものなら、さう便々と月謝を出してやるだけが無駄だ。早く年期奉公にでも出してしまつた方がいゝと思ふ。お里の心配はそればかりではない、一番先きに立つかねが――臺灣にゐる所夫から、數月前まで飛び〳〵に送つて來たのを、少しづゝ貯蓄して置いたかねが――仕送り

の途絶えてから、喰ひ込んだ爲めに——全くなくなつたので、自分獨りの女腕の人仕事ばかりが手頼りになつた。それも思ふ樣に仕事があればいゝが、實際毎月の入費を出しかねる。お里の心は焼きもきし出した。

さうなると、一厘でも無駄なかねは惜む氣になり、勉を學校へ通はして置くことがお里の一大問題である。——通學さして置けば無駄におかねを費ふ樣なもの、退學さすれば留守の所夫に濟まない。勉をその相談相手にすべきものではないと思つて、お里獨りが、毎日、ひそかに、どうしやう、かうしやうと思案した末、

『勉の不勉强はさて置き、森が送金して來ないのが惡いのだから』といふ理窟をつけ、いッそのこと、勉の學校をやめさせ、どこかいゝ商家の丁稚にやつてしまはうとも決心して見た。然し、また一方から考へると、自分が後妻だから、繼子の世話を厭がつて、亭主の留守にも拘はらず、森の家の名よごしも同樣、丁稚の樣なものに追つ拂ッてしまつたと、世間からそしられるのは心よくない。然しそれも世間が家の事情を知らないからのことゝて、——勿論、この事情は人には云へないが、——森に向つては、自分としての充分な申しわけがつく筈だと、また考へが跡もどりする。

いッそ勉に相談して、勉の望む通りにしやうかと思へば、勉はまた夜遊びに出て行つて、まだ歸らないのに氣がつく。

勉の「つ」の字を思ひ出しても、お里の顏には心配と癇癪との青筋が現はれるのだ。その上、こんな

時のおもな相談相手たるべき所天の不人情な無音信に思ひ至ると、かの女の心は引ッくり返るほど燃え立つて來る。

夢中になつて、長煙管をふりあげたかと思ふと、お里はわれ知らず火鉢の猫板の上の相馬燒きを打ち毀してしまつた。

碌々眠ることも出來ないまゝに、幾夜さを過ごしてゐるうち、勉が畫を書くといふことを聞き込み、通り向ふの空罐製造所から、罐のおもてへ書く畫を暇々に賴みたいと申し込んで來たので、お里は飛び立つ樣な喜びを以つて受け合ひ、それから儲ける僅かのかねから、勉の月謝と家の入費の一部とを出させることにした。勉も面白半分にその受け合ひを勵み、時々、母には內證で學校を休み、一日その工場て暮すこともある。お里はそれを知つてゐても、もう何とも云はないほどにその心が他の心配の爲めにしびれてゐた。

或日、お里が多忙であつたので、隣り町に住んでゐる勉の伯父のところへ口上書きを出した。勉がそれを書いたのだが、口上の書き方が粗末な上へ持つて來て、署名のところに、「お里馬鹿より」としてあつたので、伯父は大變怒つて、下女を以つてつッ返して來た。見れば、わが子の度胸があり過ぎるにもあきれるが、兄の怒るのも尤もなので、お里が自分で出かけて行つて、ひたあやまりにあやまつた。その餘憤を歸つて來てから直接に勉に漏らし、「手前の樣なものは親の面よごしだ！出て行け！」とどなつたが、勉は平氣でちッとも取り合はず、

「おれはおれのうちにゐるんだい。そとから來たものが出て行け！」

「なにイ、手前は假そめにも親たるもの丶恩を知らないか？」

「親なら、親らしくせい、このしみッたれめ！」

「勉！」と、かう、一言、お里は怒つて、聲が顫えたが、勉が柔術の眞似をして抵抗するのを引きづり、引んまはし、無理無體に戸外の闇につき出し、ぴッしやり戸をしめてしまつた。

勉も燒けになつて、そとから戸をどん／＼叩き散らしてゐたが、つひに往生したのか、通りの方へ歩いて行つた樣子だ。それを心で見定めてから、お里は玄關の板の間にあがり、そこに備へてある雜巾で足の裏の泥を拭き、障子を締めて、自分の居間へもどつたが、一生の不安が一時に迫めかけて來たかの樣に、氣がわく／＼して落ちつきどころがない。して、あの子が今自分を『しみッたれ』と呼んだのは、近處の人々や空鑵工場のものらに云ひ聽かされたのだらうが、それが如何にも殘念で、殘念でたまらない。自分がしみッたれに見られるのも、みんなこの森の家を思ふからではないか？それを勉は勿論、つれ添ふ所夫までがかう思ひやりがないとは――ええ、情けないと、泣き倒れた。

その夜も、お里は碌々眠られない。悔しくッてたまらない。第一、わが眞の子とまで愛してゐるつもりの勉が、かうも不孝で、母たる自分を愛敬して呉れないのが腹立ちだ。不勉强で、不孝で、小癪で、いたづらで、まだ涎を垂らしてゐながら色氣づいて來て――と、しッかり指を折りながらその個條を數へあげて見たが、それでは全く馬鹿だらうかと考へて見ると、まださうでもないところがある。當をか

ゝせば、いつぞやの様ないたづら書きにも、母親のヒステリ顔をわれながら呆れるほどそツくり現はすことも出來たし、けふの「お里馬鹿より」の大膽もまんざら知慧のない子には出來やう筈がない。今から、なぜあんなに圖々しいのだらうかと思ふと、行く末が賴母しくない樣で、もう〳〵他人の子などはない方がいゝといふ氣になる。して、自分の腹を痛めない子などの爲めに心配するのは、無駄骨折り、馬鹿馬鹿しいことだと考へた。

「あゝ、眞身の子供があつたら」と、お里は、今更らの如く、產まず女なる自分の手賴りないのを感じて、その感じをさかのぼつて行くと、いつしか自分の若かつた時のことが浮んで來た。父や母が自分をその膝もとへ呼び寄せ、道修町のがらす屋の某さんがお前をお嫁に欲しいと云ふが、行つたらよからう――自分は赤い顔をして兩親の前を無言で引きさがつた。恥かしくもあつたし、厭でもあつたのだ。

　すると、自分のからだが、いゝ氣持ちで、ずッとどこかへ引ッ張られて行く。あゝッと云ふまに、自分は見知らないところへ來てゐる。ちやぶ臺が据わつてゐて、それを中にして、自分とさし向ひ合つてゐるのは森だ――臺灣へ來たのだ。森はいゝ氣嫌で都々一などを歌つてゐる。自分はいつのまにか酌婦になつてるのだ。三味線を執つて、森の歌ふのに調子を合はせるかと思ふと、それは自分ではなく、見知らない女だ。

「この畜生！」と、自分は障子のかげから飛び出したと思ふと、その障子がどたんと音がして、そのまた音て、自分が大きな石を以つて捕さへつけられる樣に胸苦しいのをおぼえた。

「おや、いつのまに眠つてたのだらう？」から思つて目を覺ますと、臺どころの戸が締る音がして、何物かゞ這入つて來たけはひだ。お里はゾッと總毛立つと同時に、簞笥の中にしまつてある物を思ひ出し、それを取られては一大事と、身を忘れて寢床をはね起き、氣丈な女の一生懸命で――一つにはまたあわて過ぎて――勝手へ通る障子を引き明けた。

「どろ棒！」

この懸命な一喝に驚いて板の間へ尻餅をついたものがある。それに氣が付いた時は、お里もこちらで尻餅をついてゐた。よく見れば、勉だ。渠は今勝手口をこぢあけて這入つて來て、こつッそり寢床の方の障子をあけやうとするとたんに、母の一喝を喰つたのであつた。

ふたりは同時に吹き出したが、勉は何にも云はないで褥を取り、無言でそれにもぐり込んでしまつた。

「馬鹿だねえ、お前は」と、お里は云つた切りで、勝手の戸締りを調べてから、再び、勉のと並んだ床に這入つた。然し神經の興奮――胸の動悸――これがなか／＼納まらないので、勉がぐう／＼いびきをかいて熟睡してゐるのを羨みながら、夜を明してしまつた。

翌日から、ふたりは割合ひに仲がよくなッた。お里は餘り繼子を叱るのはよくないと思つたのだし、勉はまた、如何に因業な繼母でも、それを餘り馬鹿にするのは氣の毒だといふ考へが起ッたのだ。して、お里は人仕事を、勉は鑵の畫を、精出してやる樣になつた。

「お母さん、けふは三十錢分書いたよ」とか、「三十五錢分働いたよ」とか、勉が夜おそく誇りかほで歸

つて來ると、お里も悪い氣持ちはしない。節約じみて、薄暗いランプのもとて、仕事をしてゐる手を置いて。

『わたしもけふは二枚出來たよ』とか、『三枚仕あげたよ』とか云ひながら、縫ひ物やら針箱やらを方づけ、茶を入れて勉に飲ませ、自分も亦飲んで一息つき、それから暫く世間ばなしをする。そんな時に限つて、長屋の印刷屋がおそくまでも機械をごと〳〵云はしてゐるのがお里の氣にさはらない。いつもなら、その音をやかましいと云つて癪にさはるばかりでなく、人の根氣よくかせいでゐるのが妬ましくつて堪へられないのだ。

『あの印刷屋の市さんは、若いのに、よく勉強して感心だよ。うちでも、ふたありでしツかりかせいで、少しでもおかねを溜めて置いて、お父さんの歸つた時、世話にはならんでもふたありで立派に暮してゐましたと、意張つてやりたいものだ、ねえ。』

『それも面白からうよ。』

『なんだ、ね、お前は――お前もよツぽど小癪なことが云へる樣になつたよ。』

ふたりはにツこり同時に笑つた。

『もう、寢ようかい、ねえ』と、お里。

『寢ようよ』と、勉。

親子ふたりは、互ひに手傳ひながら、寢床をふたつ取つて眠りに就く。

かういふ風に繼子がおとなしくなれば、お里も亦氣が落ち付くのであらう、半年も以前に歸ると云つてよこした所夫のまだ歸らないで、而も何のたよりもないことに對する不平や心配も、餘り口やかましく言葉にのぼさなくなつた。

さうかうしてゐるうちに、その年も早や暮れに近づいて來て、お里はその支度やお歳暮のことでまた心配し初めた折も折、かの女の家へかの女の心をかき亂だすものが飛び込んだ。それは一人の若い女で、臺灣から今着いたといふ者だ。年は二十五六、顏かたちに云ふべきほどの美點はなく、寧ろ不の字のつく方で、からだばかりはでぶ〳〵太つて巖丈だが、どこか鳥渡意氣なところがあるのを見ると、藝者までは行かないが、酌婦か料理屋の女中かをしてゐたらしい。

『森さんには大變お世話になりました』と稱して、森の添書を示めし、渠の歸るまで一緒に置いて貰ひたいと云ふのだ。氣早なお里はこの要求を聽いて、直ぐきりりと眉を逆立てたが、女のゐる前だと思つたから、それにつかみつきたいほどの怒りを靜めて、無理に禮儀を正す。女も人の女房のところへ押しかけて來た割合ひには遠慮勝ちて、ただ

『森さんがさうお仰つたので、まゐつたばかりです』と申しわけをする。

『一體どうしたわけなのですか』といふに初まり、この紹介手紙ではよく分らないが、如何に森が關係ある女にしろ、女房のところへそれを同居ささうといふ森の理由がない。お里自身に取りても、亭主に妾を持たれたと世間から云はれては、體裁がよくない。親類の人でもないものを家に置けば、世間など

うしてもさうよりほか思はない。よしんば、それは辛抱するとしても、第一、自分が面白くない。あなたも面白がられないところにゐるのは、やッぱし面白くないだらう。面白くない同士が一緒にゐても、お互ひの爲めにならない。それに、もう、暮れに近いから、忙しくつてお世話が出來ない。と、かういふ風に臆面なく、つけ〳〵云ひ放つたすゑ、

「今晩、とまるところがないと困るだらうから、近處の下宿屋へ頼んであげましやう」と云ふ。女もこんな人には頼まないと決心したのだらう、

「それには及びません、――それでは、明日、早く、埼玉の國もとへ出發致しますから」と、暇乞ひをする。お里は、安心だと思つたのだらう、

「まア、いゝぢやア御坐いませんか？臺灣の樣子でも承りましやう」と、暫く引きとめて、女の話しを聽いた。その話しに據れば、お里の推察してゐた通り、新聞でやかましい土木工事賄賂事件の爲めに、森は牢に這入つてゐるのだ、然しまだ豫審獄であつて、證據不充分らしいので、無罪放免になるかも知れないが、賄賂を取つたものゝうちでは、實際、主謀者の一人であつたといふうわさだ。一時は、臺北中の料理屋などで大盡かぜを吹かすものゝ一人であつた。

「不義の富貴は浮べる雲といふ唄があるぢやア御坐いませんか？あなたはその不義の富貴に迷はされたのです、ねえ」と、お里は險ある笑ひを以つて冷かすと、

「さういふわけでもないんです――森さんとは全く關係はないんです」など、曖昧な言葉を殘して、曖

昧な暗闇へと女は出て行つた。

その跡で、お里の押さへてゐた癇癪が一時に頭をあげた。

『人を馬鹿にするも程があらうぢやアないか、ねえ、勉』と、そばで默つて坐わつてゐた勉にその父の不了見に對する不平を漏らす。『如何に亭主だッて、餘り女房を馬鹿にしてイらアね。いゝ氣になるも程があらう。何が月も、何が月も送るべきおかねは送つて來ないで、勝手な眞似をしていたんだ。貰ふべきおかねはこッちのものだから、こッちから借してあるも同前だ。せめてその利子だけても屆けて來るがいゝ。こちとらの心配はどんなものだか、藥にしても飮ましてやりたい。さうすれば、少しやアあの野呂間の土根性が直るだらう。待つても、待つてもたよりがないと心配していると、あんな頓馬なてぶも〜女を利子にして屆けてよこした。ほんとに馬鹿とも、頓馬とも、野呂間とも、助平とも、ほんとに犬だか畜生だか分らないおやぢだ。わたしは、もう、覺悟したよ。この家の身上を方ッぱしから喰ひつぶして、出て行くからさう思つてるがいゝ！』

『さうおこッたッて、お母さん』と、勉は笑ひながら、『こゝにゐないものは仕樣がないではないか？歸つて來てから、しッかり云つてやるがいゝさ。』

『あんな奴は歸つて來ないでもいゝよ。——あの女も女だ、おほ飯食ひの樣な風つきをしやアがッて、よくも平氣で來られたものだ。「森さんがさうおッ仰つた」』と、お里は腭をつき出して口びるの左右に力を入れたが、『どんなつらをさげて、そんなことが云へるんだ！』

「ほんとに馬鹿な女だ、ねえ。」

「馬鹿も馬鹿もおほ馬鹿、さ！あいつ、呼び返して、とッちめてやらう」と、玄關の方へ目を向けた。

勉は氣がつくと、母の目は引き釣つてゐて、そのかほは血の氣が通つてゐないかの樣に眞ッさをだ。ぞッとして、急に眞面目な心を起し、こないだ、工場の夜なべに聽かされたお岩の幽靈を思ひ出し、ランプの光に、部屋中の薄暗いのがおそろしくなり、長火鉢のふちに兩肱をつき、手を火の上にかざして肩をすくめる。お里はまた精神錯亂が起つた樣に身を顫はし、兩手を固く握つて、その一方を勉と相對するかはのふちにかけ、また一方は煙管を持つたまゝ膝の上に置いて、今にも何かに飛びかゝらんばかりの身がまへだ。

目はやつぱし外の方を見つめてゐたが、

「來い、畜生！何と思つてやアがる？こゝはわたしの家だ、わたしの城だ、――だまして取らうたッて、明け渡すものか？何と云つても、渡すものか？――畜生！おほ馬鹿！――二度と再び來るんぢやアないぞ！」

段々その聲が大きくなつて行くので、勉にはその聲が外の寒い、眞ッくらな闇にも響く樣に思はれ、その凄い響きがまた自分の家その物をも振ひ去つて、その跡に闇ばかりの深林が出來て、自分はどこか、から、芝公園の山の奥の地べたにでも坐わつてゐる氣持ちだ。して、母の顏つきを見ると、自分を化した狐または地獄から來た鬼と相對してゐる樣で、おそろしくつてたまらなくなつた。然し、それは鳥渡

の間だ。
「何と思つて來やァがつたんだ！」と、お里がまたつづけ出すので、勉は之を制し、
「お母さん、靜かにおしなさい、となり近處に聽えるぢやァないか？」
お里は鳥渡勉を見たが、
「あゝ、どうしてやらう」と、煙管を以つて思ふさま疊を叩き、坐わつたまゝ身をゆすつて、室内をずし〳〵云はせた。
やがてお里は立ちあがり、羽織をぬぎ捨て、がたッぴしと簞笥をあけて、別な羽織を着かへ、何にも云はないで出て行かうとする。勉は之を見て、たゞさへ凄い心持ちが一しほ物凄くなつた。して、
「どこへ行くんです」と、何物かにうなされる樣な聲が出たと思ふ時は、もう、立ちあがつて、母が玄關の障子をあけやうとするそばに行つてゐた。して、全身が總毛立つをおぼえた。
「敬ちやんのところへ行つて、相談して來る」と、お里は答へた。敬一とは勉の從兄弟お里の好きな義理の甥て、その家は森の兄の家だ。
「何を相談するんです」と、勉は初めて勇氣を得て、母をさえぎり、「相談があるなら、あすでも出來ます。そんな顏をして、見ッともないから、およしなさい。」
お里は勉にかう云つてさえぎられた時、わが子にも自分の所夫の樣なおとなじみた威嚴が出來て來たと、うれしくもまた頼母しく思つた。して、漸く正氣に返つて、

『これては丸て氣違ひの樣だ』とは口て云はないが、ひそかに心てわが身を恥ぢ、わが子のおとなじみた態度に打たれたといふ樣子て、『ぢやア、あしたにしやうか、ねえ』と、しほ〳〵もとの座に立ち返へる。

『あしたにするも、しないもない』と、勉も元に返つて、『つまんない相談なら、見ッともないからしない方がいゝぢやアないか？』

『それもさうさ、ね——相談して見たところて、直ぐ森が歸つて來るんぢやアないし』

『知れてますア、ね。あの馬鹿野郞はくたばッてもいゝ、さ。』

『ふふん。』お里は斯う、をかしいといふ樣子を見せて、『お父さんを馬鹿野郞だの、くたばッてしまへだのと云ふべきものてはないが』と、微笑を含みて、『實際さう云はれても止むを得ないことをしてゐるんだから、仕かたがない。實に困つたものだ、ねえ。』

『さう心配するにやア及ばないや。馬鹿なものア馬鹿なんだから、勝手にさしとくがいゝや。』

『さう思つてりやアかまはない樣なものだが、森の家を思ふと、お父さんの仕うちがわたしの胸に納まらないよ。迷つてゐるんだから、その迷ひを醒ます爲めなら、一つお前も、お父さんが歸つて來たら、女ても拵らへて、仕たい放題の放蕩をして見せるがいゝ。さうすれば、いくら心の箍が拔けてるものても、親なら、きッと自分が惡いといふことが分つて來るだらうよ。』

『そんなことは、おかねもないのに、出來ません、さ。』

『出來ないが、わざとして見せるの、さ。』

『それも面白いてしやうよ――然し、まア、お母さんは心配しずに待つておいてなさいよ。お父さんが歸つたら、わたしがよくやッつけてあげますから。――もう、直き歸る見込みがあるんでしやう、さうでなけりやア、自分が歸るまでうちにゐろと云つて、色女をよこす筈はない。』

『まさか、歸つてまでも、そんな馬鹿はわたしがさせないつもりだが、ねえ――心配すりやア方圖がない。どうも、氣がくさ〳〵して來て』と、お里はからだを反らし、兩手の指さきてあたまの兩側、米かみのあたりを押さへながら、『あたまの心が痛くッて、痛くッて――わたしはまたヒステリが起りかけたんだよ』と、顔をしがめる。『この暮近くなつてから、こんなことぢやア豫算が取れやアしない。』

『なアに、お母さん、わたしもしッかりかせぎますから』とは勵まして見たが、勉はその時母の顔をつく〴〵ながめ、今初めて氣がついたかの樣に、『お婆アさんだ、なア』と思つた。實は、渠は、今まで、友人等の母親のいづれに比べても、自分の繼母の方が若いと思つてゐたので――渠には、女といふものは、若くなければ婆アさんだといふ區別があるだけて、その中間にある年增などのことは、まだそれと判斷をつける眼力も、經驗もないのだ。して婆アさんとさへ云へば、何でも自分よりは四倍も五倍も年上てあるかの如き考へをいだいてゐる。

勉がかういふ考へをいだいて母に向ふと、お里はどうしても若い方の仲間ではない。不斷は、世間體が惡いと云つて、身なりを小ざッぱりしてゐるから、家の部屋〳〵にほこり一つ溜めてないと同樣、母の黑い、つや〳〵した丸髷に鬢にほつれ毛一すぢも垂れてゐない。が、然し、近所のさアちやんやきイちやん、みイちやんや初ちやん、すべて勉が學校や學校歸りの途中やて出會ふたんびに、親しく話をし

たり、またからかッてやッたりする女の子などに比べては、母の顏は色つやが褪せてゐて、小皺だらけだ。

『全體、年を越えれば、この繼母はいくつになるんだらう？』から考へて、勉はひそかに來年になつての母の年から自分の年をさし引いて見ると、なほ殘るのは僅かに自分の年と二三歳とだけだ。やッぱし友人等の母親よりも若い。それがまた今更ら不思議な樣に思はれて、――若いと思へば、また、勉は母をさアちやんやみイちやんの仲間へ入れてしまう。して、そのさアちやんやみイちやんの賑かな笑ひや、そのなつかしい聲を母からも受けることが出來ると想像する。

然し、その想像は成り立たない。母はさう輕々しくは笑つて吳れないし、さう浮き〳〵しては話かけて吳れない。現在、勉の目前にゐ坐わッて、どッしりとかまへ込み、敎師に見る樣な威嚴を持つてゐる。

『中婆アさんに負けてやらうか』と、勉は心で價踏みをしたが、それは、その實暗に三十代の年增の階級があるのを發見したと同じであつたのだ。して、この階級に屬する女でも男を好きだとか、男に惚れるとかいふことがあるのだらうかと、勉は自分で問ふて、自分で答へた。

悋氣とか、燒き餠とかいふのは何かといふことは、こないだから、空罐工場の職工の男や女が話してゐるので分つたが、その悋氣や燒き餠が母にも亦やッぱしあるのだらうか？今のさき、あんな見ッともない女が來た爲めに、氣違ひの樣になるのだもの。やッぱし、悋氣があるのだ、燒き餠を燒くのだ。

それにしても、何の爲めにそんなことがあるのか？

母がお父さんを大切に思ふからだ。お父さんを好きだからだ。お父さんと一緒にゐたいからだ。して、お父さんは男て、お母さんは女だ。かう考へて來ると、急にお里の髮のびん付けのにほひが勉の鼻に

樣な感じを傳へて、わが母ながら、勉はかの女に對し、男としての樂しい血が湧くのを初めてまのあたりにおぼえた。して、母がいつも身をつくろッてゐるのは、單に世間體ばかりてはないと思ふと、勉はそれにさし向ひになつてゐるのが恥かしくなり、われ知らず顏を赤めた。

お里はまだわが子がそこまて色氣づいたのを知らないのだ。勉のやわらかい頰ぺたを初戀じみた血が通り過ぎたのには氣付かないて、簞笥の上にすゑてあるランプの光て、自分の顏がなゝめに映るのをのぞきながら

『わたしはほんとに瘦せた樣だ、ねえ』と、片手て頰をなてゝゐる。『お父さんが若し近々に歸つて來るんぢやア、こんなに病人じみてゐちやア濟まないが、ねえ――』

『何ても心配ごとをおよしなさいよ。』

『さう云つたつて、心配しずにゐられないぢやアないか、ね？』

『喰つて行けないんぢやアないし、のん氣にしていたつていゝんてす。』と、かう、勉は何氣ない樣子を見せてゐるが、母の髮の鬢付けのにほひが一しほなつかしくなり、そてない樣に見せやうとするだけ、そのませた物云ひ振りが顫えてゐた。

『然し、勉』と、お里は思ひ出し笑ひをして、『今の女が若しうちにゐることになつたとして見たら、每日、さぞお米が入るだらう、ね。』

之を聽いて、勉も鳥渡微笑した。母の言葉て父の色女のてぶ〳〵太りを思ひ浮べたのだ。然し、之と同時に、また、世間のうわさ通り、恪嗇な母のさもしい心が見え透かされた樣な氣がして、現に母に對して勉の持つてゐた若草の下萠えの樣な、薄あッたかい心持ちは、まのあたりに消えてしまつた。(完)

和歌　[illegible]選

○　　　　　　　山村龍子

何となき物に足たらひてゆたかにも眞午の海の面眺め居ぬ

はかり得ぬ未來は樂しさま〴〵にうかゞひて泣きうかゞひて笑み

眠る間にかくは明るき朝となる此不可思議を不可思議とせず

人と云ふ重き名もてる我れなりと思ひて心苦しうなりぬ

云はむこととみな後の日のわざはひとなる心地して口閉し居ぬ

幾片の雨雲浮び黒き山大きく立てる夏の曙

淋しきは老いし女の姿ぞと憚りなくも男等は云ふ

世の物のすべてに倦みてなほ生ける己れを日毎疑ひて生く

みづからの心をさへも信じ得ぬ我れを思へば口惜しきかな

脊子にすら時にはものを秘むるこの憎き性をば神うばへかし

御心の底より出てし一滴の涙に生けるこの百日かな

祈り給へ何ぞためらう事やある悔いてはさらに清からむ君

○　　　　　　　百田千里

高く歌ふ壯んなる子にしたがひて物思ふ子はうなだれてゆく

年ふれどふむ人もなき山寺の疊のごとき冷たさにあり

行列のなかに交りてやちまたを走りてあれど心たらはず

春の夜の小路をゆけばとろ〳〵の瓦斯燈の灯もかなしかりけり

わが願その一つだに遂げ得ざるかなしさにまた今日もなげきぬ

泣くところ求めんとして海にゆくあはれなる子

に夜の風吹く
世のつねの人のたぐひとはゞからずいつはりを
云ふ男になりぬ

○　　　　　　　　　　　　　小島ます子

自らの胸より來るさびしさを忘れて居にしなき
てけるかな
うつむけは衣裁つ板に涙おつ春日ぞ生ふる根な
きかなしみ
空の色の變ることとしとあやぶむを病と君は笑ひ
給へど
思ひ給ふかしこき胸ぞものさしをあつるかことと
きこといひし哉
山の宿烟たな引き朝の氣の重きが中にうぐひす
のなく
さりともと待ちにしほどに夜はふけぬ身じろぎ
するも怖しきまて
共にとは强ひしなわがせ指折りて歸り來まさむ
日を待たむのみ
今日植うるはかなき小草女郎花花となるまて君
待たむかも
後の世もかくて樂しくかしつかむ忘れ給ふな君
よみ母よ
今よりは物學ひせむ願をも君にゆづらぬたゞつ
とめてよ

○　　　　　　　　　　　　　三浦曉村

手探りにマッチ求めて深更のつめたき床にわれ
默し居り
何ものかうすくらがりの地の上にわが行くさき
につぶやきて居り
風凪ぎし濱邊の町を何となくあわたゞしげには
しり來しかな
やゝ瘠せし顔を枕におしあてゝすや〳〵寐るが
うらやすきかな
まのあたり人と別るゝ心地して此のゆく春のげ
にもさびしき

○　　　　　　　　　　　　　日下天香

光なき希望なき夜の野の路を生の一路と汗ばみ
てゆく
めしひたる物にもおとり杖とればなほ進み得ず
道にためらふ
何日かまた美しき子と甦かへるその日あるべき
われ半ば死ぬ

宵になくふくろの聲の後の世の人は歌はむわれのこの歌

○　小池相良

醉ひしれて歌ひゆく者うなだれて息つげる者街は暮れゆく

幹なかばうつろとなりし大木の花の少しに春の雨ふる

生きてあらば何をすべきか知らねども只ひたぶるに生きまく欲りす

手をつかねゆくにまかせぬ如何にして何處までゆく吾身なるらん

○　金子白明

すばかりのびし二月の草を敷き星影仰ぎ歌おもひ居ぬ

如月は西風多しかなしうも磯によせられ海鳥は啼く

行くなかれ靑き花咲く野に行かば君も取られむ頬のくれなゐを

野はひろし何を求めて彷徨うやいくたび我とわれにたづねし

○　井淵みたま

一つ二つ三つ四つ五つあゝ君よきかあしきか數へたまふな

天はひとつ地はひとつなりあゝされどわが身一つは餘り淋しき

たらちねの母の柩にさゝぐべき經も知らねばたゞにぬかづく

あゝ君はわれに賜ふに悔といふとげ／＼しきをもてはやし給ふ

○　植村桂郎

われと言ふいとかたくなの性ありて神を恐れぬわづらひにあり

海を見て波立つ下のいと深き底の心を悲しみて居ぬ

悲しみを歌にして笑む幸得しと君に言ふ日のあらばこそあらめ

口惜しさは島の流人になぶらるゝ信天鳥のごとも泣かれき

○　八尾洋々

とこしへに水はひくきに流るゝと冷笑ひてはまた酒を呼ぶ

愚なる子はひたすらに眞珠貝とらむと日毎野を

あさりゆく

生れざる前の世われを戀ひしもの呼ぶと思ひて大空を見る

○　岩崎雨洋

君なくば生は欲せじ斯くおもひかく思ひつゝ春の日に生く

何事か起らむとするその前の一時に似て風なぎにけり。

かへりみて心たらひぬ大海に春の午後の日しづやかにてる

○　佐藤茂

いづらかに檻車の中の囚はれの人の如くに運ばれて行く

あゝよろこび愁の墳に根ざしたるたゞ一瓣の花なりしかな

○　橋口春山

倦みごゝちあざやかに笑みわれ待てる君にしあれどものたらぬかな

斯くてしも人はほこゝと呼ぶならむ涙ばら／＼頰を流れたつ

○　湘南病客

病む二人互みにこゝろ傾けて日をし過ごさば死を喜ばむ

短かなる世にたちし日の悔をこひ今病みてあり教へられし子（畫師栄舟先生に寄す）

○　芝野花

目とづれば歌は浮び來うき雲のとらへかたなき心いたみに

玉のごと君が面てり目を射ぬと思へば櫻花さきにけり

ひねもすを風の音きゝておぼろげに世のなるさまを思ひ得しかな

疲せし手にやせし手とりて子は父を父は子をしぞあはれと思ふ

○　松友萩江

長かれとねがひし髮のみじかくて女なる身の恥かしきかな

つかれし眼閉づればをかしさまざまの大いなる顏のころがりて來る

○　岡田幽溪

何事も忍びてあれば一時に涙あふれぬ燈火の前

母とわれ向ひてありし美しき日をこそ思へ春來

る日は

○　鎌田雅美

小さなるわれは孤兒天地に生くてふことの怖れにありぬ

苦しさはた悲しさはもの言はず別れ來し夜のさまにてそ似れ

うれしさを忘れてまたも涙しておもひ沈みぬひとりをる日は

○　阿部白聲

はれやかに笑ひ興ずる人よりも憂ふる人のなつかしき日よ

○　渡部柳村

あゝ君よ小さき型に囚はれし人にしありけり悲しからずや

○　さゆり子

箸はげし黒ぬり重をおもたげに娘みづから餅をくばりぬ

おもふことなしとも見ゆる我胸に春日さすなりあはきさびしさ

○　素乃山人

「沈む日は明日生るゝ」この如き望みに暮の町を行く哉

○　萩原彩堂

日曜日午後としなれば又來る一週間の憂に沈む

○　太田生麥

思ふこと苦しき時は死ぬるてふ悲しきことも口の端にいふ

わが心ありし日のごと若やぎて人の誹りを購ふべくなりぬ

歌はずばこの幽欝をのがるべき道更になしいざ歌ひてむ

假名と眞字つらねし數の幾千が果してわれの性をためしや(自嘲)

○　關本梁村

われ昔心のなかに君といふ形を得たるみなもとを知る

よろこびとうれひに飽きて何となう寂しきことをおぼえけるかな

強きとところにおもひうるみたる君が眼を見るさびしき日かな

いささかのよろこびをしも驚きの眼をして君は眺めたまふよ

つかのまのおもひをたどりほほゑめる身とはなりにき君にむかへば

○　　　　小木烏城

幸多き明日よ明日よとけふもまたふりたることをいひてくらしぬ

春の背ふとおぼろげに眼にうかぶおもかげなれどなつかしきかな

○　　　　西井金羽

ありし日のありし面影ありし日のありしひと時呼びかへせども

さびしさの路を歩みて我はゆくそのさびしさの果を追ひつゝ

あゝせちに涙を呼べばなつかしきありし昔のおもかげぞ浮く

○　　　　法月紫星

かくれたる古沼の錆の下にすむ眼無し魚ともならんと思ふ

我を抱くかの大空をいとひつつ息もふたがる地のなかを戀ふ

物と物うてばあひ鳴る中にゐて君とわれとはとこしゞまかな

○　　　　遠藤汀花

筆とりてたゆたふひまに君がみ名あまたならびぬ白き紙の面

悔ゆる日のさだかに來むと知りつゝもなほ生きんとす弱き心よ

○　　　　中村白夜

いつはりを多くのたまふ性ゆゑに幸人とわれは云ひにき

○　　　　中村玉野

君知る日かなしみ覺えよろこびを覺えてつひに歌をうたひき

○　　　　大場皎

軟風は花に小草に子が頬に接吻して春のよろこびをいふ

八百潮のどよみ疲れて凪ぎ果てし海にも似つゝ醒めしこの日よ

○　　　　脇屋富子

こゑあげてすが／＼しくも泣きもえすたのしみもえず今日明日とすぐ

ある時は切にきみこひあるときは道ゆく人のこころしてゐぬ

○わがまことと汲みたまはざる彼の人はざれ言いひてあればたるらし　山口奇晴

○故しらずもとむる心地眼閉づればうれたきさまのもののかけみゆ　和不染



初夏

折烏帽子かろきも初夏の心かな　碧雲居
初夏や閣の戸あけて山朗　同
水干や早夏になる衣の色　同
雨降ればそれも詩情や初夏の窓　同
かすみ眼の晴れて星あり初夏の空　同
初夏や庭に培ふものの苗　同
初夏や井手越す水の白きにも　同
呉竹の一露に夏のはじめ哉　同
初夏や君が細大刀世に輕し　同
初夏の風や瀬戸内めぐる船　同
初夏の空に風船のぼりけり　同
初夏の草の青さや沖の島　同
初夏や草山登る一路あり　同
大根の遅き一花や夏に入る　同
水草の芽に澄む沼や夏に入る　同
早苗田にはるゝ一雨や夏に入る　同
初夏や燈心草に雨はるゝ　同
蝦夷菊の丈三寸や夏に入る　萩里
玉垣や幔幕見えて初夏の風　照楓
若竹の三尺伸びて夏に入る　奇溪
掛替ゆる飛瀑の軸や夏に入る　吟紅天
初夏や靄に眼眠き朝渡し　丹羽郎
魚すくふ日傘求めぬ夏に入る　李童
初夏や日淺き禪に瘠せそむる　湟南
初夏や書き干すビラの浪模様　成功
初夏や池堀り足して鯉放つ　翠子
初夏や寺を養蠶講習所　孤梢
寺借りて揮毫に應ず初夏一日　五得

初夏やさし木の桑の皆つきて　麥門冬
初夏や倒さに寫る盥富士　蓬雨
初夏や遂に入卦の嘘なりし　腐花
初夏や花の白きをめづる草　茶童
蒔きあまる種くれてけり夏に入る　蘆村
山國は一毛作や夏に入る　春嶺
初夏の澁茶斷ちたる麥茶哉　魯斧
初夏や石に伸びたる螢草　其蜩
初夏や繪の具にのらぬ空の青　梁村
鹽漬の櫻にお茶も初夏の宿　總子
初夏のお寺を借りて種痘かな　不可知
刺繍ある傘紫や初夏の人　枯葉
初夏の苑青銅の鶴草に立つ　同
初夏や嘉例に放つ大眞鯉　蛙聲
初夏の瀧に開きし一路かな　同
湯あみして初夏の川邊をありきけり　峽花
初夏の駄菓子店にも金魚かな　同
初夏や社前の左右の金魚賣　燕石
今朝の夏瀬戸物白き膳部かな　同
根刈せし桑の芽吹や夏に入る　抱虎生
たのもしき麥の走り穗夏に入る　同

初夏やほうけ茅花を草に刈る　春溪
初夏や驪駒牽いて相馬まで　同
初夏や柳蔭に見る湖畔亭　湖村
抜き殘る葱に擬寶珠や夏に入る　同
北狄に進むる軍や夏淺し　尺水
初夏や染屋にかけし祭衣　同
初夏や白絹を練る釜の湯氣　瓜鯖
初夏の輕き埃りや馬市場　同
初夏や笹の葉青き籠の鯛　同
初夏や絹織る窓の明放し　同
初夏や鶯塚の竹の月　風水
初夏や坊規新たに水の事　同
初夏の花何々や園日記　同
簾下げて初夏心庭を見る　同
富士講の幟も初夏の紺屋哉　青城
初夏の机移すや竹の窓　同
講堂に迫る槐や夏に入る　同
魚市の白き日覆や夏に入る　同
御所柿の接穗に初夏の二葉哉　太郎
初夏の山繭黄なる葉裏哉　同
初夏や秣に和する草みどり　同

刈りすつる麻の蓬や夏淺き　同

本號應募者八十七名、句數千四百二十八句

募集課題　螢　六月十日締切
　　　　　風蘭　七月十日締切

定め

應募句は加賀國金澤市櫻畠九番丁大谷正信宛の事
句數は一人十句以上三十句以下の事締切當日まで
に當方へ屆くやう郵送の事



高商問題私觀

星雲子

（一）

一時、社會の耳目を聳動したる高商問題も、五月廿三日の大會に於ける學生の無條件復校を以て、兎も角も一段落を告げたるが如し。

商科大學問題は、其內部に立入りて詮索すれば、諸種の情實の纏綿せるものありて、吾人局外漢の測り知るべからざる駈引や策略も行はれたる模樣なり。さりながら大概の事には暗き方面はあるものなり。其暗き方面にのみ頸を突込みて少しも光明の側を見得ざるか

らば、一生只憤慨して暮らすの外あるべからず。世の中には、勿論、暗中に眼を光らす梟の如き人も必要也。さりながらかゝる人は極く少數にて事足れり。暗闇の中にては、よく兎の毛の尖までも見れども、白晝に於ては盲人も同樣の人が天下に多くなりては厄介至極の事也。萬事は大體に於て案外正しき方向に動く。駈引や策略や一時効を奏するとも久しきを持すべからず。終局の勝利は常に道理のある所に歸す。吾人は此見地に立ちて世事を見る。今回の高商問題についても亦此見地を動くべき理由を見ず。

（二）

「大學」と「學士」。此二つの名稱は今の世に於て尚輕からざるの意義を有す。商大設置の議起るに及び、高商一味の人が、自己の學校を以て「大學」となし、其卒業生を以て「學士」となさんとしたる所以也。而して此等の人は該校の歷史及び現在の勢力が、之を主張するの權利ありと思惟したる也。

學制統一は文部省年來の遺口にして商大も亦帝大に併せ置くを便とし、且つ商大の學問に重きを置くは高商の實際を主とするに對して其目的を異にすとなし、終に之を法大の下に置く事に決したり、而して文部當局は自ら之を斷行するの權力あるを疑はざりき。

冷靜に觀察すれば、高商問題の紛擾は、此二つの考の衝突に外ならざる也。多くの駈引や策略は此根本問題に附隨して起れるならんも、駈引や策略の爲めに斯くの如き結果を見たるにはあらざる也。

（三）

現今の日本に於て商科大學が果して必要なりや否や。此根本の問題夫自身にも已に議論の餘地あるが如し。或は商業に關する學問の未だ幼稚なるの故を以て、或は法大の經濟科と略ぼ似寄りたるの故を以て、かゝるものを設置するの必要なしと唱ふるものも亦少からず。必要なしとすれば夫れ迄也。さりながら大學は必ずしも進步したる學問のみを敎授する所にあらず、進步せざる學問を講究して進步せしむる亦其職分の一たるを疑はず、又商品學、保險學を初め商業に專屬せる

學科にして經濟科になきものも少からず。學問の進歩は分科によつて促さる。吾人は商大の必要不必要は知らざるも。之あるは之なきに優るといふ見地を取る。

(四)

已に商大を設くるとすれば、今日の高商を商大とするよりも別に商大を置くの可なるは事理極めて明白也。故如何となれば、今日の高商は今日の儘にて存在せしむべき充分の理由と必要とあれば也。餘り長からざる年月の間に商業に關する一通りの知識を得、之を實地に應用して活社會に働く人の必要なるはいふ迄もなき事にて、今日の高商は實に其役目を負ふもの也。學問と實際の關係は議論の餘地もあり、殊に商業の如き實際的のものを對象とするものにあつては其區別甚だ曖昧なるも、概していへば、商大は重きを學問に置き、高商は實際を主とせざるべからず。若し今日の高商を商大となせば、別に高商に代るべき新たなるものを設けざるべからず。今あるものを根本的に變じて、今あるが如きものを更らに新たに設くるの煩雜は、今あるものをあるが儘にして、新たなるものを設くるの簡易なるに若かず。若し高商は今の儘にして其上に二年なり三年なりの大學部を設け、高商の卒業生が進んで大學部に入るも可、入らざるも可といふ組織にせば可ならずやとの議論もある樣なれども、三四年にて實地に就く人と、進んで學問を研究する人の教育は根本的に異るを可とす。若し同一にやれば孰れか一方が他の犧牲となるを免れず。吾人は此點文部の見解を以て大體道理に適したりと見る。只惜む所は文部が其權力を笠に被て高商側をダシ拔いて斷行したるが如く見ゆる所に、其遣口の拙なるを蔽ふべからざるも、學制上大體に於て正しき見解に立てりといふを憚らず。

(五)

高商の生徒が其權利と思惟する所を主張する方法として、同盟休學をなし、母校を以て居るに足らずとして帽子の徽章までも地に抛てりといふに至ては、勢の激する所止むを得ざりしとはいへ、確に批難に値するの擧動といはざるべからず。今日に至ては問題は多く

專攻科存廢の件に推移せるが如きも、若し當初當局が專攻科を廢せざりしとするも、事はあの儘に收まらざりしは明白也。吾人の希望は些か君子に全きを求むるに似たれども、實は、「我高商は高商にて足れり、商大の生徒よく何をか爲さん。虚名と實力と、其優劣を爭ふ亦男子快心の擧也。來れ商大の柔弱兒」位の意氣込にて、商大などを眼中に置かぬやうにありたきもの也。「大學」と「學士」の名稱の勢力ある世の中に於て、私立の學校が「大學」と「學士」の稱號を得るに忙しき時に於て、獨り高商の學生に望むに、時代の風潮にかぶれざらんことを以てするは、些か無理なる注文の如くなれども、高商の歷史と現在の地位とよりしてかゝる意氣抱負のあらんことを希望するに堪へざりし也。

（六）

問題は何時、如何なる所に落着すべきかは豫測すべからざるも、恐らくは或一定の年限間（本年の初級生が專攻科卒業の年限間）專攻科存置位にて妥協成立すべし。是れ高商より見るも極めて道理ある主張にして、是丈けは文部も許可せざるべからざる義務ある也、吾人は呉々も此邊にて此事の落着すべきを信じ、且祈る也。若し文部に對する報復として、豫算案を否決して以て商大を延期するとか、又商大を高商に置くの運動を再始するとかいふつまらぬ事は、假令、してやらうと申出づる人あるも斷然之を拒絶する位の覺悟あるを要す。世の中には此問題を以て政略上に利用せんとするもの、若くは働きを見せて學生等の同情を買ふの好餌とせんと欲するものも少からず。高商の人士、深く自己の立場を思ひ、事の成否を考へて愼重の態度あらんことを祈る。

（七）

高商問題に關聯して最も吾人の遺憾に堪ざるは多くの新聞紙の無責任にして不誠實なる點也。只世の中を騷がして快とするか、當局者を罵倒して學生等の同情を買はんとするか、筆に一點誠實沈着の態なくして、誇大、煽動、惡罵、無責任の語氣全篇に充滿す。誠の足らざるにあらずして識の足らざる也。吾人深く之を

惜む。

（八）

今回の事、大體に於て吾人は高商側の批難者也。されど五月廿三日の大會に於て、調停三團體の希望を容れ、大人しく全生徒復校せるの態度に至ては、當然の事とはいへ、又徐ろに同情の念禁ずる能はざるものあり。虚名の時代は容易に去らざらんも、而かも次第に去らん。自重自愛せよ、高商の學生諸士。諸士にして自重自愛せば、世の同情を買はざらんと欲するも、同情は自然に諸士に向て集らん也。（完）

長谷川二葉亭氏逝く

樗陰生

長谷川二葉亭氏は　亡くなられた。露國に居て病を獲、日本に歸航する船中、五月十日印度洋で亡くなられた。氏の「浮雲」は今日から見れば固より大したものでない。優柔不斷な、而かも神經質な男の心理は可なりに細かく書いてあるが、全體の筆遣ひに戯作じみた、いやな處が甚だ多い。全くなつてゐない處も少くない。けれども、あの時代にあつては、あれ丈けのものを書いた見識も筆力も實に尋常のものでなかつたに相違ない。歷史的に見たら見遁すことの出來ぬ作物であらう。「其面影」と「平凡」は今の文壇にあつて決して惡るい作物でない。圓熟、老練の筆致、容易に追從を許さぬ。けれど、矢張り調子にドッカ輕過ぎる、拵へたやうな處があつて、魂を打込んで愛讀する氣にはなれない。氏は創作家としては第一流とならずに了つた、飜譯家としての氏の手腕は現代に於て固より凡を拔いて居た。あの細心な、言葉の豐富な、老熟な、筆遣は若い者の到底及びもつかぬ所である。けれどゴルキーなどのやうな荒削りな、男性的の作物を譯するには氏の筆は餘り適當でなかつた。氏の最も得意とした處はツルゲネフの纎細な、優麗な、夢みる(ドリーミイ)が如き作品の飜譯にあつた。氏は一昨年あたりはツルゲネフは最う厭きた、トルストイの「クロエッエル、ソナタ」のやうなものを書いて見たいふて居られたが、然し今日まで出されたものでは余はツルゲネフの飜譯が一番價値が在と信じてゐる。氏は世間でもいつてゐる如く文學や小說は嫌ひだというて居られた。「僕は小說家でない」「僕は文學者でない」と始終いうて居られた。何故小說や文學が嫌ひかといへば「文學はどうも眞劔になれない、拔身と拔身と振上げて、やり損へば生命にかゝはるといふやうな氣にはどうしてもなれない」爲めだというて居られた。小說を書いて下さいと頼むとなかなか承知しない。「書くならば僕は「文學亡國論」といふものを書きたい」と眞面目にいうて居られた。氏は何事にも現在に滿足出來な

い人であつたやうに思はれる。氏に若し一切文筆をとることを禁じ、一生決して小說を書くなと命じたら、小說程天下によい物がなく見えたに相違ない。小說で飯を食はねばならぬ故に小說がいやになつたのである。よくいへば理想家、わるくいへば怠惰者は、何時でも義務的、強制的の仕事を嫌ふ。氏も亦此種の人であつたらうと思ふ。氏が文學を嫌ふのは區々文筆を事とするは丈夫の事にあらずといふやうな支那的思想の影響もあつたらうし、又何か社會的の仕事をしやうなどいふ露國小說の主人公の感化もあつたかも知れないが、現在に滿足したくないのと、自分は今して居る事以上の事の出來る人間だと思うてゐたい爲めであつた樣に思はれる。

氏は一見して體格の魁偉な人であつたが、顏色は勝れず、眉と眉との間に八の字を畫き、人と話をする時は近眼鏡の下に始終眼をパチ／＼させてる人であつた。そして人の說にはなか／＼同じない。「こうでせう」といふと「いや、さうぢやないな」といふ。「この「いや、さうぢやないな」といふ調子が極めて面白かつた。又氏の特徵をあらはして居た。氏は人の說に全じないといふよりも、寧ろ反對することを好むといふ風も見えた。嘗てこういふ話を聞いた事がある。「池邊君が其面影の哲也に僕の性格を似てるといふぢや、僕は怒つて、それぢや僕の性格を丸出しにしたやうなものを書いて見せようといつてやつた。池邊君はそりや面白い、どんなものが出來やうかと聞くから、ポーツマスの談判の時に○○○を刺す男を書かうといつた。池邊君もそりやちと困ると驚く。それなら攘夷か日清戰爭にしようといつたら、維新頃ならいゝが十年役でも困るれといつてゐた」と意氣昂然として語られた。けれど氏と最も親交ある一知人も、そりや池邊君の批評が當つてゐる。といつた。氏には一面卓犖磊落といふやうな分子もあつた、が、又一面には神經質な、女性的な、小事に屈托するといふやうな風も確かにあつたらしい。「浮雲」の主人公も「其面影」の主人公も、「平凡」の主人公も皆意志が弱くて、神經質で、グヅリ／＼してゐる性格である。こういふ人は思ひ立て事に當れば常人の出來ない事もしかねないが、思ひ立つ機會は一生來ないのが多い。氏が實際界に入つて如何程仕事が出來たかといふ事は證明されずに了つたが、余は其方面には餘り期待してゐなかつた。露西亞の社會、人情、風俗の眞相を氏の筆によつて傳ふるは氏の眞の職分ならんと思うてゐた。それさへも果さずに印度洋上で亡くなられた。船の上で亡くなられるゝよりは氏の異常な努も性格を滿足せしめたかも知れないが。氏以外の人は甚だ痛惜に堪えない。

一言にしていへば、氏は文壇の先覺者として、刺戟者として、ツルゲネフの絶好の飜譯者として我文壇に深き影響を與へた。此人を失ふたのは文壇の損失である。

人間は死骸を目のあたりに見てさへも死といふものを解されぬ事がある。議論としては死といふものを極めて器械的のものと解釋したい。けれど深く考へて居ると、それでは滿足が出來なくなる。況して死骸をさへも見ず、死目にさへ逢はざる人にとつては其人は生きてゐるものとし

か思はれぬ。氏の大きな體格、青黒い顔、パチ〳〵する其眼、此文を書きつゝある際にも目に浮んで來る。

一片の追悼文を草するよりも、其人について感ずる眞情を吐露するのが、其人に對する義務と思ふ。余の此文を書いた所以である。（完）

二葉亭氏の著書

浮雲 （太陽十週年紀念號）
其面影 （春陽堂發行）
片戀 （仝　前）
平凡 （金尾文淵堂發行）
浮草 （仝　上）
血笑記 （易風社發行）
カルコ集 （春陽堂發行）



漫ろ言

醉美生

○森田草平氏の「煤煙」は近來最も見るべき作の一つだ。夏目氏の[illegible]癖を學んだために、多少型に嵌つた所や、叙述の誇張になつた處はあるが、又巧みに夏目氏の長所を利用した處もある。心の内のムードと外界の事象とシックリ合ふやうに書いた手際は恐らく明治文壇以來の出來であらう。此點は反覆熟讀に値する。然し肝要の女主人公の性格や感情は一向分らない。氏は今に至ても當の相手を客觀的に見得ないやうだ。不思議な女だ、奇妙な女だといふ初一念が全く除かれないやうだ。性の缺損があるらしいのと、禪學めいたものを修めた事があるといふ二つの點が、一種の妙な性格の女を作り上げたやうにとれるが、あの女の風采容貌も亦性格もハッキリ胸に映らぬ。男の性格と、男の家庭が分て居るから、男の妙な氣になることは分つて居るが、何故特にあの女とあゝいふ風にならねばならぬかゞ呑み込めない。戀は分らぬものだといふなら、

分らぬものだと感ずるやうに書いて欲しい。其中心點に於ては全く失敗だが、氏の筆力の侮るべからざるは何人も感ぜずに居られない。余は最初の三分の一あたりが最もよく出來てると思ふ。郷里に歸つたあたりは損ひつく程よい處がある。會話は一體に拙い。意味で會話を書いて居るダヌンチオ流の誇張な筆遣ひも見える。完全な作物ではないが讀まなければならぬ作物である。一日も早く出版されることを望む。

○田山花袋氏の「拳銃」は結末の拵へ物らしいのを除いては非常によく出來て居るが、ダヌンチオの「犠牲」の最初五六頁から趣向を得たものでないかと思ふ。

○田川大吉郎氏はなかなか識見の勝れた人であるが、伊藤統監が韓國に赴任する時に「あなたは朝鮮に行つたら眠て居らつしやい。あなたの經驗と、あなたの性質と、又あなたの年配で、目を光らして朝鮮の事を見てゐたらどうして堪るものでない。あなたが眠て居る位で恰度よい」と公に向ていつた相だ。公の政治は武斷派から見れば隨分批難もある樣だが、大局から見れば決して間違つてはゐぬ。只法律規則の濫發が最も公の病であるらしい。田川氏の言は公にとつて至言であつたのである。

○政治は其人民の爲めに行ふべきものである。日本の爲め／＼とのみ思ふて韓民を治むれば其結果は却て日本の爲めにならなくなる。韓民の爲めを計つてこそ、韓民は却て日本に歸する。天下仁政に敵するの強敵なきは孟子なども道破したる處、日本人は餘りに性急である。

○島崎藤村氏の「家」は三四度も推敲して讀んだ。描寫の新工夫は驚嘆くの外はない。あゝいふ眞面目な作物を唯罵倒して了つて、些しも其苦心の跡をも見ぬといふは何といふ事であらう。

○「無名通信」の二號に出た「砂ほこり」は相馬御風氏の作で、三號の「青年」は島崎藤村氏であらう。一號と二號の「向ふ三軒」は無論小杉天外氏である。「向ふ三軒」のみ、而かも未完であるのに大きく廣告されて他の完結した作物が小さく廣告に出て居る。

新刊批評

△現代男女の研究　覆面野史著　現代社發行

雜誌「ムラサキ」に連載せられて好評を博せるものを一冊に集めたるものにして、所説概して穩健、且つ書き方も明晰にして興味あり。只た俗情に媚びんとする讀物とは類を異にす。女子にとつては參考となる節多きを疑はず。（定價四十五錢）

△蝶　小山内薫著　水野書店發行

收むる所、「粘土」「事實」「夢中」「十三年」「蝙蝠傘」「蚊」「旅役者」「歸京の家族」「聚樂の鰻屋」「中學生の日記」「軍醫の家」「銀行」「堀田の話」「失明」「沈默」「平氣」「猫と鼠」の十七篇也。あり餘るの才氣累をなして、總ての作品に眞摯着實の態度の足らざるを惜む。（定價八十錢）

△關東の山水　大町桂月著　博文館發行

著者親しく關八州の山水を跋渉したる紀行文也。著者の天眞爛漫たる性情と、縱横自在なる筆力とは世の珍とするに足れども、文章として見る時は、思想章句悉くコンヴエンシヨナルにして些の新味工風の見出し難きを惜む(定價一圓)

△邪宗門　北原白秋著　易風社發行

詩壇の新作家中最も評判高き北原白秋氏の詩集也。音調に極めて幽婉又纖微なる處あり、詩に對する努力の熱烈なるを看取するに難からざるも、正直にいへば、我等は之を一讀して、著者の傳へんとするが如き詩境に悠遊する能はざるを悲む吾等に詩情枯れたるにもよらん、又詩の素養乏しきにもよらん。されど詩を以てかゝる難解なるものにせざるべからざる筈はなしと思ふ。ヴエルレーヌ●詩の飜譯さへよく分るものあるに、日本人の多くが解し得ずとあつては少しく邪徑に陷りたるを思はざる能はず。製本極めて美麗也(定價一圓)

△修養漫話　前田慧雲著　東洋大學出版部發行

行住坐臥に就いて吾人の修養し行くべき色々の訓戒が含まれて居る、而かも立脚地が眼前の名聞利達を離れて居るので、讀みもて行く中に靄氣十分なる蘭麝の香をきく樣な心地がある

△正想的宇宙觀　龜谷天尊著　隆文館發行

加藤弘之博士の因果的宇宙觀に對して飽く迄楯衝いたもの、吾人は加藤博士の唯物的立論には承服し難いものであるが、さればとて此著によつてそれが十分手應へある程に攻撃されたとも信じ得ぬ、語に不謹愼なものがあれば說に統一を缺く處も少くない、アラを拾へば幾らでも拾ひ相なのを遺憾とする、例へば信仰は智識から來るといふが如きも用語が不妥なるのみならず如此きは却つて敵に糧を輸するものだし、又下等動物や植物が各々その進化の程度の優れるものに食はれるのを以て却つて向上たといふ樣な立說も隨分窮したる說と憐ましむるのみならず、左樣かと思へば更に玉利博士の所說の他の動物又は植物を食餌とせずとも生活し居る動物ありなどいふことを、一廉の味方と頼んで居る、その他結論に於ては然りと思はれる事でも變挺のプロセッスで持つ行くには遺憾が多い、之ては何となく反對せんが爲の反對らしく人をして著者の折角の熱誠を疑はしむる弱點がある、今少し整々の陣が張れぬものかしら(正價金五十錢)

△宇宙と國家　座間勝平著　昭文堂發行

隨分元氣な文字を用ひてあるが、左ればと自己の所感を誇張したものとも思れぬ赤誠が溢れて居る、「上」宇宙と人生の篇の考へ方は結論に至る迄の處の考へ方は正しい、が彼の決論即ち「生存の殘酷」に至るのは餘りに氣早である、その前には吾人の道德の及ぶべき限度を今少し深刻に痛切に考へて立てればならぬ。それから人類相食むの時期が必至的に來るべきかをも、他人の糟粕を甞めずに新に考へ直す必要がある、その決果必ず悟るべきものあるを豫想する、「正人生と國家には前項の結論より自ら導かれたる不純の思想がある、人種競爭等を唱へるに至つては人類の目的を離るゝこと甚だ遠きものである。(定價金三十錢)

△花の趣味　三宅花圃女史著　服部書店發行

凡てが言文一致の流行を離れた雅文體、而かも情を運び景を寫し、[illegible]

を傳へるに、些の滞りなき暢びやかにして麗しき文字は、最も内容のそれと相若いて、梅、菊櫻、ポツピー、デージー、ヒヤシンスの和洋の色々、それ等の精神を十分に浮かべるに足るのである、或は西詩或は國風扨てはそれに因める神話、傳説等を、わざとしからず識り成して品高き趣味に人の心を誘ひ入れるもの、橡際に淸風に臨んで讀むべきの良書である、（定價金九十錢）

△**近世世相史**　齋藤隆三著　博文館藏版

短き一時代若くは一方面の、單に風俗志と名くべきものには貞丈守武等の著述もあるが能く徳川三百年の治世に亘りて世相の全局を觀、能く微細に亘りて描寫したるものは本書を以て嚆矢とする、衣服修飾の嗜好等がその最も力を用ひられし處なると同時に、能くそれ等を包む四圍の空氣、施政の如何をも解說し、それと十分連絡せしめて了得に便ならしめた處等、頗るその用意に周密なるものがある、江湖に紹介すべき價値ある書物と思ふ（定價金二圓二十錢）

△**增補故事熟語辭典**　池田蘆洲　實文館發行

故事熟語辭典の小本の坊間に散見するものも多くあるが、その集大成した完全なものといへば、先年現れた此辭典である、その後著者の更に蓄積したる語が更に三千餘に達したので、之を更に增補して又此度新に刊行したのである、更に一層の完全を見たる事は言ふを待たぬ（定價金二圓）

△**國語字音假名遣字典**　高野辰之和田信二郎編　實文館發行

數ある國語中實際の發音と表記法とが異なるものを掲んで一々その正しき假名遣を敎えたもの、現今行はるゝ十幾種の辭書中より採つて此一篇に網羅し盡し、更に多く、補つたので約三萬五千語を收めたといふ事である、（定價金八十錢）

△**コロンバス**　內外出版協會發行

世界百傑傳の一として出したもの、靑年の爲に探險思想を喚起すべき好讀本である、

△**日本武士道**　重野安繹日下寛共著　大修堂發行

武士道の淵源から說起してその今日までの歷史的の意義を明かにし、幾多の事例を引證して解明したものだ（定價金壹圓五十錢）

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵稅共		

▼但し特價號は規定以外別に代金を申受くべし▲

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增の事
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年五月廿七日印刷
明治四十二年六月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省
御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(又ハ)コハ
振替口座七八〇七
卸小賣
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、
帶留、ブローチ、手釦、
紀念品一式
最新の流行品目錄郵劵
六錢封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價
金銀盃